九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— I —

1 9 7 0

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州縱貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— I —

序

この報告は，九州縦貫自動車道建設事業に伴い予定路線内の埋蔵文化財の記録保存の措置として，本年度，福岡県教育委員会が日本道路公団福岡支社の委託を受けて行なった発掘調査の記録である。

本書の刊行にあたり，現地調査から本書の発刊まで，ご援助いただいた，大川清助教授はじめ国士館大学考古学研究室，国分直一教授，増田精一助教授はじめ東京教育大学考古学研究室の各位，ならびに種々ご援助ご配慮をたまわった関係各位に深甚の謝意を表する。

昭和45年3月31日

福岡県教育委員会教育長

吉　久　勝　美

例　　言

1. 本書は，九州縦貫自動車道建設事業に関連して，昭和44年度12月までの発掘調査した埋蔵文化財の報告書である。
2. 調査は日本道路公団の委託を受けて，福岡県教育委員会が実施した。
3. 調査の担当は久留米地域関係は国士館大学考古学研究室と東京教育大学考古学研究室，その他の地域は福岡県教育委員会があたった。
4. 本書の執筆は次のとおりである。

1.		渡辺正気
2.	1	大川清・高橋章
	2	大川清・伊藤博幸
	3	増田精一
3.	1	柳田康雄・副島邦弘
	2	副島邦弘
4.		渡辺正気・西谷正・柳田康雄 副島邦弘

5. また，発掘及び遺物整理にあたっては下記大学及び高校の学生，生徒の有志各位の協力をいただいた。

国士館大学考古学研究室
東京教育大学考古学研究室
福岡教育大学歴史研究部考古学班
福岡大学歴史研究会
福岡女子大学
福岡女学院短期大学
筑紫女学園短期大学
大濠高等学校歴史部
九州女子高等学校考古学同好会

6. 発掘及び遺物整理について，森貞次郎・芹沢長介・小田富士雄・鈴木重治の諸氏からいろいろご指導，ご助言を賜った。厚くお礼申し上げる。
7. 掲載写真の撮影及び実測図の作成，製図は各遺跡担当調査員があたった。
8. 本書の編集は，副島邦弘が担当した。

目　　次

頁

第1.　発掘調査の端緒と概括……1

第2.　久留米地域関係遺跡……5

1.　祇園山古墳……7

2.　宗崎遺跡……14

3.　甲塚遺跡……24

第3.　広川地域関係遺跡……35

1.　広川平原遺跡……37

2.　広川赤坂遺跡……53

第4.　粕屋地域関係遺跡……56

駕輿丁遺跡……57

図　版　目　次

本文対照頁

PL.1. 祇園山古墳 (1) 葺石(西より)…… 9
(2) 石棺蓋石(西より)…… 9
2. 祇園山古墳 (1) 石棺(東より)…… 9
(2) 石棺(西より)…… 9
3. 宗崎遺跡 拡張部全景(西より)……14
4. 宗崎遺跡 (1) Aトレンチ出土の瓦器類……16
(2) C—8区土壙……16
(3) F—16区ピット内出土須恵器……16
(4) G—5区小土壙(南より)……16
5. 宗崎遺跡 (1) B—16区(南より)……16
(2) D—8区—B(東より)……16
6. 宗崎遺跡 (1) 瓦器・かわらけ……20
(2) 白　磁……20
7. 甲塚遺跡 (1) 甲塚古墳より遺跡所在の台地を望む……24
(2) 第1区第2号竪穴……28
8. 甲塚遺跡 (1) 第3区竪穴(縄文土器・石皿出土状況)……28
(2) 第2区第1号・第2号竪穴……29
9. 甲塚遺跡 (1) 石鏃(内2個サヌカイト)……32
(2) 掻　器……32
(3) 尖頭器……32
(4) 石　刃……32
(5) 石　核……32
(6) 細剝片……33
(7) 石錐・剝片……33
10. 広川平原遺跡 (1) 第2号住居跡(南西から)……47
(2) 第4号住居跡(北から)……50
11. 広川平原遺跡 (1) 縄文土器……43
(2) 縄文土器……43
12. 広川平原遺跡 (1) 石器……39
(2) 先土器石器……39
13. 広川赤坂遺跡 (1) 遺跡遠影(東対岸から)……53
(2) 発掘全影(南より)……53
14. 広川赤坂遺跡 (1) 出土遺物……54
15. 駕輿丁遺跡 駕輿丁遺跡(左)と駕輿丁廃寺(右端)の遠影(北東から)……58
(2) 駕輿丁遺跡遠影(駕輿丁廃寺から)……58
16. 駕輿丁遺跡 軒丸瓦，軒平瓦……62
17. 駕輿丁遺跡 丸瓦，平瓦……63
18. 駕輿丁遺跡 須恵器……68
19. 駕輿丁遺跡 墨書土器……70
20. 駕輿丁遺跡 土師器……71

挿　図　目　次

頁

1. 調査遺跡分布地図……3
2. 久留米地域遺跡分布図（国土地理院地形図1：25,000）……5
3. 祇園山古墳の位置図……7
4. 祇園山古墳全景実測図……8
5. 祇園山古墳葺石実測図……折り込み
6. 祇園山古墳石棺蓋石見版図……10
7. 祇園山古墳石棺実測図……10
8. 祇園山古墳石棺外部実測図……11
9. 祇園山古墳墳丘出土の土器類……12
10. 宗崎遺跡周辺地形図……13
11. 宗崎遺跡全体図……15
12. 宗崎遺跡D－8区－A・B土壙実測図……17
13. 宗崎遺跡F－8区－C土壙実測図……17
14. 宗崎遺跡遺物実測図……18
15. 宗崎遺跡遺物実測図……19
16. 宗崎遺跡遺物実測図……22
17. 宗崎遺跡　(上)石鍋実測図……22
　　(下)石鍋写真……22
18. 甲塚遺跡地形図……25
19. 甲塚遺跡第Ⅰ区竪穴遺構配置図……27
20. 甲塚遺跡第Ⅱ区竪穴遺構配置図……27
21. 甲塚遺跡出土土器実測図……30
22. 甲塚遺跡出土石器実測図……31
23. 甲塚遺跡出土石器実測図……32
24. 広川地域遺跡分布図（国土地理院地形図1：25,000）……35
25. 広川平原遺跡地形図……38
26. 広川平原遺跡調査地域平面図……39
27. 広川平原遺跡出土石器実測図……40
28. 広川平原遺跡出土石器実測図……41

29. 広川平原遺跡出土縄文土器拓影……44
30. 福岡県下における押型文土器出土遺跡……45
31. 広川平原遺跡第2号住居跡……48
32. 広川平原遺跡出土須恵器……49
33. 第4号住居跡付近……50
34. 広川平原遺跡出土土師器実測図……51
35. 広川赤坂遺跡地形実測図……53
36. 層　位　図……54
37. 広川赤坂遺跡出土石器実測図……55
38. 粕屋地域遺跡分布図（国土地理院地形図1：25,000）……57
39. 駕與丁遺跡地形実測図……59
40. 駕與丁廃寺心礎……61
41. 駕與丁廃寺礎石……61
42. 軒丸瓦拓影……62
43. 瓦復原図……63
44. 軒平瓦拓影……64
45. 丸瓦にみられる粘土ひもの実測図……65
46. 玉縁にみられるヘラ書拓影……65
47. 敲打文拓影図……65
48. 平瓦拓影図……66
49. 平瓦拓影図……66
50. 須恵器実測図……68
51. 須恵器実測図……70
52. 墨書土器実測図……71
53. 土師器実測図……72

第1. 発掘調査の端緒と概括

ふみわけみちから高速自動車道にいたるまで，道路の歴史は，その時代の全歴史事象の縮図ということができる。

道をとおして人々は，つねに人と人，集団と集団との交流をはかり，生活・産業・文化の発達をなしとげてきた。

さて，近年，国土の開発とはげしい交通事情に対処するため，さらにはわが国の社会，経済の発展のため，昭和31年に日本道路公団が設立された。この力こそ，名神高速道路，東名高速道路等を完成してきたのである。

そして，九州においても，昭和40年頃から九州縦貫自動車道の建設計画が具体化され，そのうち，まず最初に福岡（粕屋郡粕屋町）熊本（鮫託郡託麻村）間約 102kmについて昭和40年10月18日基本計画が定められた。昭和41年7月25日に整備計画が決定，同日付で建設省から日本道路公団に施行命令が発せられた。その後，ひきつづき，路線の追加策定が進められている。現在では，福岡県北九州市門司区から，宮崎県西諸県郡えびの町まで，またそこから，宮崎市と鹿児島市とに2道にわかれ，全延長約 409kmにおよぶ路線が決定ないし計画されている。本県では北九州市門司区から大牟田市までの約 133kmである。

さて道路の開発は，それ自体としては，歴史の発展として慶賀すべきことであるが，道路建設は同時に，文化財の破壊になりかねない。わが国のように，国土のすみずみまで，歴史のあとが周密にかつ重複して，きざまれているところでは，必らず，遺跡にぶつかり，その破壊となる。しかしこれら各遺跡の遺構，遺物はすべて，わが国の歴史と文化の理解，さらには人類の発展過程を認識し，歴史を正しく前進させるために欠くことの出来ないものである。したがって可能なかぎり永遠に保存されることが要請される。

しかし歴史とは，本来，前代をふみこえるものであり，これらの遺跡が破壊されることは，一方から言えば，まことにやむを得ないものである。ここに文化財と一般開発との調整が必要となり，昭和42年9月30日，文化財保護委員会（現文化庁）と日本道路公団との間の「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」となった。第1項は埋蔵文化財包蔵地についての公団事業施行前の両者の協議に関する項で，埋蔵文化財包蔵地について協議のうえ，次の3種に区分して必要な措置をとることを定めている。

1. 事業地区に含めないもの
2. 事業地区に含めるが保存をはかるもの
3. 発掘調査を行なって記録を残すもの

第4項において，上記3の発掘調査を，「公団は都道府県教育委員会に委託して実施するものとし（下略）」とうたわれている。

この覚書交換以前であるが，すでにこのような観点から，日本道路公団福岡支社は，九州縦貫自動車道の計画決定にあたって，文化財保護との調整のため，昭和40年秋から福岡県教育委員会と接触をもたれた。しかし，県教育委員会は，当時の劣弱な文化財行政機構では十分に答えることが出来なかった。この段階で，昭和41年2月，建設省九州地方建設局および日本道路公団福岡支社の関係職員の案内で，福岡県文化財専門委員岡崎敬氏と，福岡県教育庁文化財係長渡辺正気が，全路線の大綱を視察し，重要遺跡の保存について，現地協議するところがあった。

さらに，昭和41年7月21日，福岡支社は，路線決定の参考にするため，予定路線を含む幅750mを，粕屋町以南大牟田市の県境まで，65km にわたって，文化財とくに埋蔵文化財包蔵地の分布調査を，福岡県教育委員会のあっせんで，福岡県史跡調査会（長沼賢海会長）に委託された。調査は同年7月下旬から9月上旬まで，下記のとおり，各位の分担によって行なわれた。

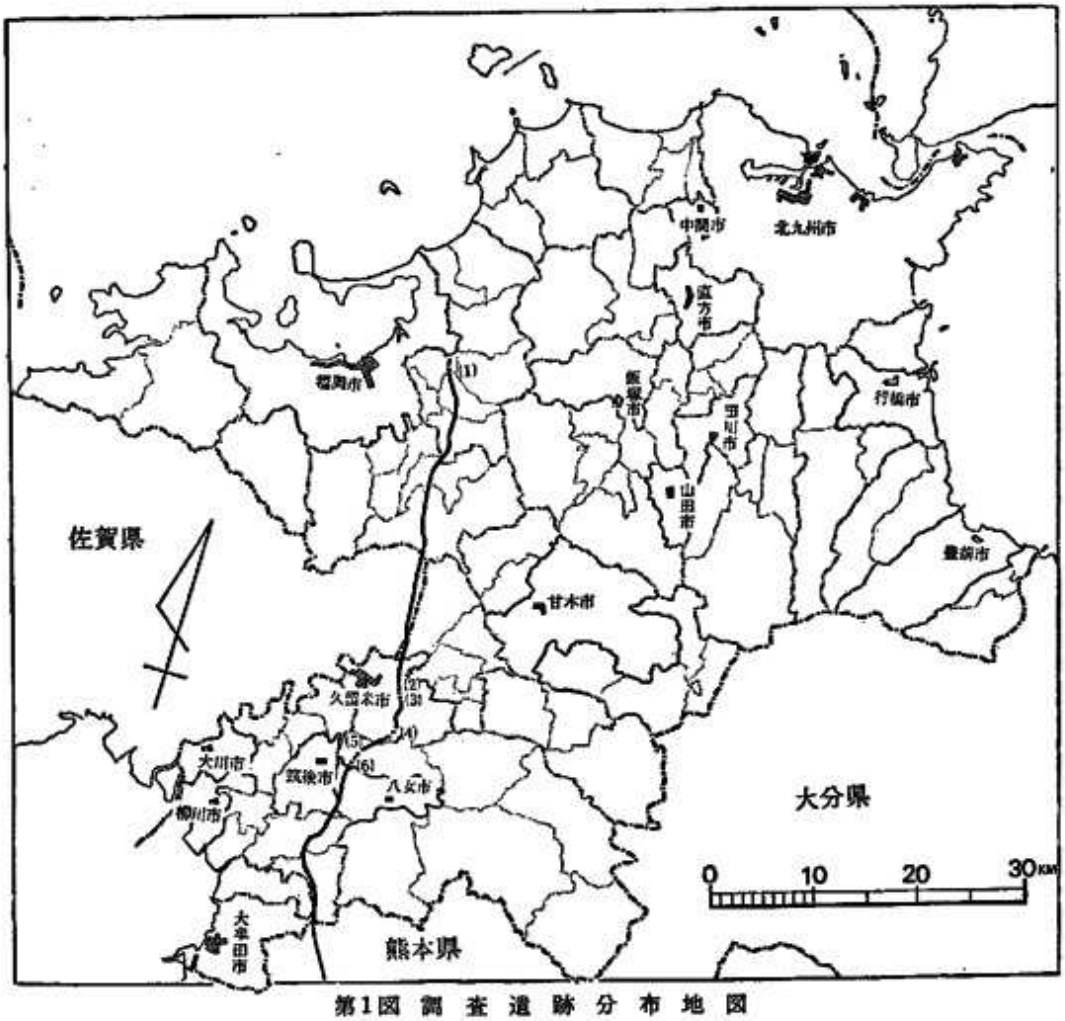
山中英彦	粕屋郡粕屋町～粕屋郡宇美町
高山　明	筑紫郡大野町～佐賀県鳥栖市
古賀　寿	久留米市
岩崎　光	久留米市南端～筑後市
久賀愛策	山門郡瀬高町～大牟田市

この結果，219箇所の遺跡その他の文化財が確認された。

この結果をも勘案して，道路公団は，路線を決定し，昭和41年，施行命令発令後，逐次公表していかれた。文化財をさけられた努力はうかがわれるが，路線決定に際し，文化財側と公団側との間に，十分な協議が行なわれなかったことは，今日から見るとき，きわめて遺憾であった。

路線決定によって，上記の219箇所のうち，18箇所の埋蔵文化財包蔵地が，道路にかかることになった。これらについて，上記覚書によって，道路公団福岡支社と福岡県教育委員会との間に，昭和44年7月1日，発掘調査の委託契約がかわされ，県教育庁文化課において，本年度から発掘調査を実施することになった。なお上記分布調査後，本年度に入ってからの再度の分布調査まであわせると，粕屋町以南の路線にかかる遺跡は，昭和45年2月末日で総計68箇所となっている。

本年度は，それらのうち，10箇所の調査を行った。粕屋町の1箇所をのぞいては，すべて久留米市以南である。本報告書は，さらにそのうち，昭和44年12月末日までに発掘を終了した次の6遺跡の報告である。



第1図 調査遺跡分布地図

地図上の番号	遺跡名	所在地
①	鴨輿丁遺跡	粕屋郡粕屋町大字仲原991
②	祇園山古墳	久留米市御井町高良山299
③	宗崎遺跡	久留米市御井町大字宗崎字山の下
④	甲塚遺跡	久留米市藤山町大字藤山字向日焼
⑤	広川平原遺跡	八女郡広川町広川709
⑥	広川赤坂遺跡	八女郡広川町大字太田逢子返り

調査の実際は，福岡県教育委員会文化課の技師がこれにあたったところと，東京教育大学文学部考古学研究室および国士館大学文学部考古学研究室にお願いしたところとがある。各遺跡それぞれの調査期間，担当者，協力地元教育委員会などは，次表のとおりである。

（渡辺正気）

遺　跡　名	調査期日	調査担当者	調査補助員	地元教育委員会
祇園山古墳	昭和44年 12月5日 〜 12月26日	大川　清	国士館大学学生	久留米市教育委員会
宗崎遺跡	昭和44年 12月5日 〜 12月26日	大川　清	国士館大学学生	久留米市教育委員会
甲塚遺跡	昭和44年 12月15日 〜 12月28日	国分直一 増田精一	東京教育大学学生	久留米市教育委員会
広川平原遺跡	昭和44年 12月8日 〜 12月19日	柳田康雄 副島邦弘	福岡教育大学学生	広川町教育委員会
広川赤坂遺跡	昭和44年 12月11日 〜 12月15日	副島邦弘	福岡教育大学学生	広川町教育委員会
鴛奥丁遺跡	昭和44年 11月1日 〜 11月5日	西谷　正 柳田康雄 副島邦弘		粕屋町教育委員会

第2図　久留米地域分布調査（1/25.000）　1．祇園山古墳
2．宗崎遺跡　3．甲塚遺跡　●古墳　○散布地

第2．　久留米地域関係遺跡

九州山脈の名峰久住山から発する筑後川は多くの名称をもっている。大分県では玖珠川とよばれ，日田盆地を通り，優秀な装飾古墳群を持つ吉井，浮羽町を通って流れ筑後川となり，流れは大きくゆるやかになり，筑後平野のあるじとして有明海に流れ込む。

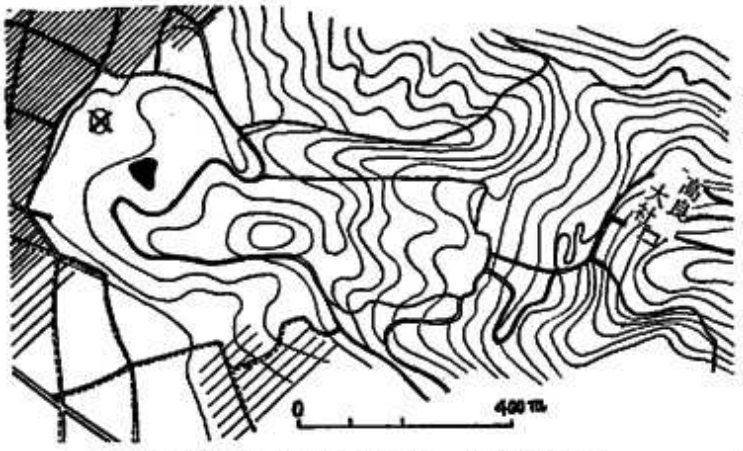
そのかなめが久留米市である。南西は有明海にのびる広大な筑後・佐賀平野と，北方の博多湾にのびる福岡平野，さらに狭長ながら吉井・浮羽町にのびる平野の中心地となっている。

その展望は東に耳納山系の高良山，北東に筑紫山系の山々が望める。古代から，国造磐井がおさめた土地である。高良山・耳納山・明星山・白金山・赤藤山から平野にのびる山麓やその平野には多数の遺跡が存在する。

高良山の山麓を北から南へ八女に貫けていくのが縦貫道で，高良山山麓の古墳群と甲塚にある帆立貝式古墳の西1kmの地点を通っていく。祇園山古墳，宗崎遺跡，甲塚遺跡の順で報告する。　（副島邦弘）

1. 祇園山古墳

(1) はじめに



第3図 祇園山古墳の位置 ×祇園山古墳

祇園山古墳は久留米市御井町山ノ下にあり，久留米市の東方にある標高 312m の高良山頂より西へ延びる山が筑後川の平地へ突出し，その平地に接する比高15mほどの台地上に構築されている。

本古墳は，12月11日より樹木の伐採，14日より墳丘の測量を開始，16日，墳頂部より発掘を開始，17日，墳頂部現表土下45cmで石棺蓋を発見，20日，チェーン・ブロックによって蓋石を取りはずす，以後，石棺実測，構築法の調査，葺石の調査を実施，26日終了。

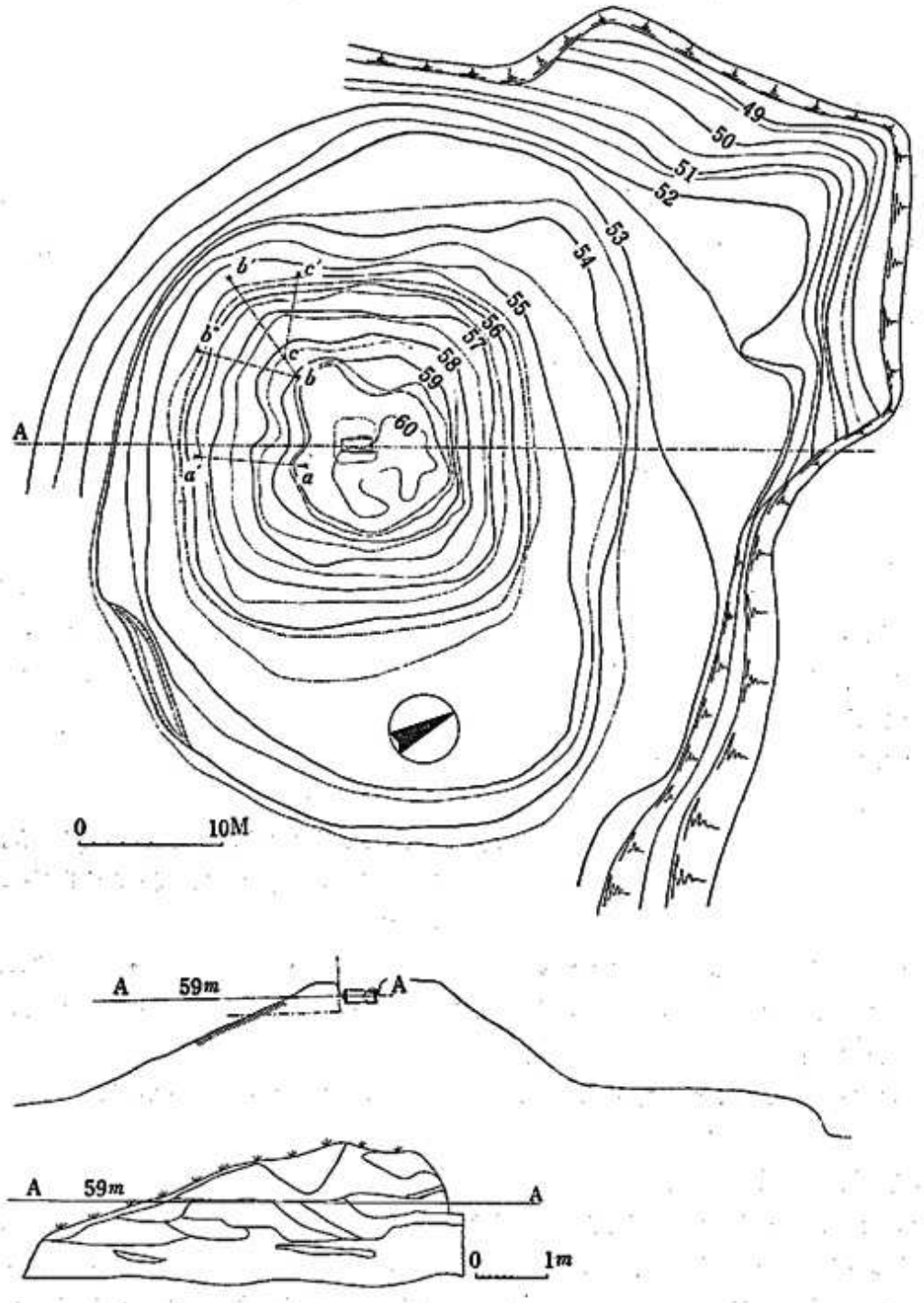
調査主任　国士館大学考古学研究室　大川　清
　　福岡県教育委員会技師　西谷　正
　　国士館大学考古学研究室学生，戸田有二，尾形与典，高橋章，西岡みゆき，田中義和，有吉重蔵，二宮淳子，大島秀一，青木健二

なお，発掘調査には，久留米市教育委員会の半田豊文化係長・塚本直次主事・樋口一成諸氏より，絶大なる御援助を賜わった。石棺および葺石の石質の鑑定をしていただいた国士館大学の飯野丹次講師とともに謝意を表したい。

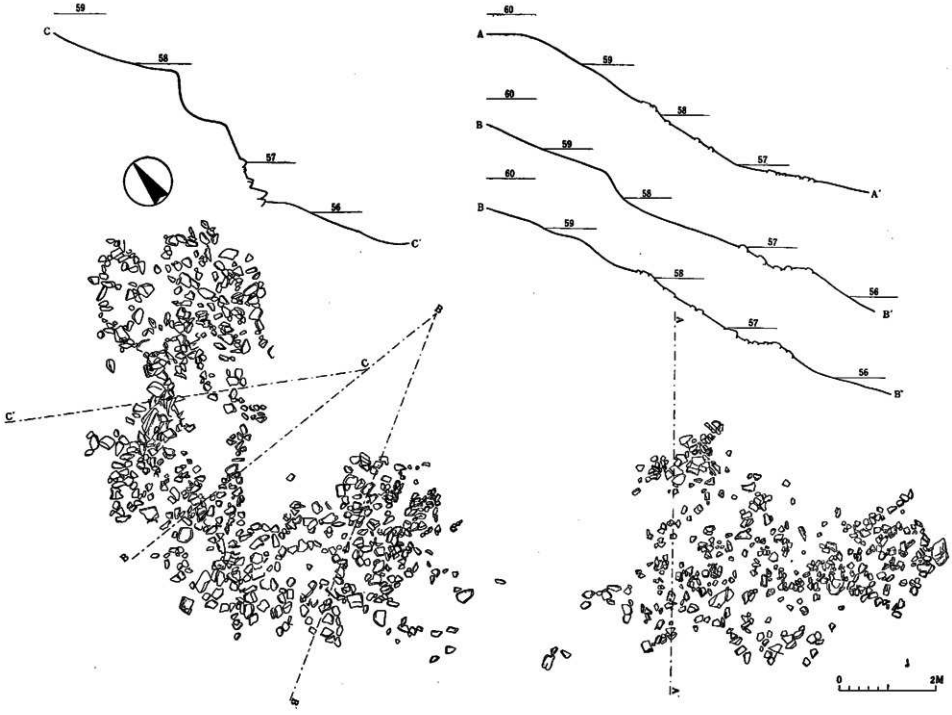
本稿作成にあたっては，調査担当研究室学生がそれぞれ分担してことにあたった。

(2) 墳　丘

本古墳は，低地帯に延びた丘陵上部に盛土された方形墳である。平面形は，墳丘基部で一辺約25m，高さ約5m，墳頂部は一部分崩れてはいるが，一辺約10mの方形であったと考えられる。最も，構築当初は現在より若干高かったと考えられる。墳丘の位置は磁北が，対角線上にあるため方墳の各辺は，南東，南西，北西，北東にある，北西辺の墳頂から，1m程の部分は



第4図 祇園山古墳全景実測図



第5図　葺石実測図　(縮尺1/80)

崩れが顕著であるほかは，きわめて遺存状態は良好であった。墳丘には葺石が施設され，今回の調査では，西方から南方の墳丘を発掘してその状態をみた。葺石は第5図のごとくかなり顕著に遺存し，現墳頂下2m位の所まで，すそから葺き上げてあった。葺石はこの附近一帯に多量にある雲母片岩が用いられていた。

墳丘には葺石のほかに，墳頂部北東（石棺より約3m）の現表土下約30cmのところから変形須恵器片が1個出土した。又第3図A－A′断面の葺石上部の表土中から，かわらけ（皿底部3，埦口辺？）が出土した。須恵器片は，古墳時代の遺物と考えられるが，かわらけ類は室町時代の物と考えられる（第9図）。

(3) 石　　棺

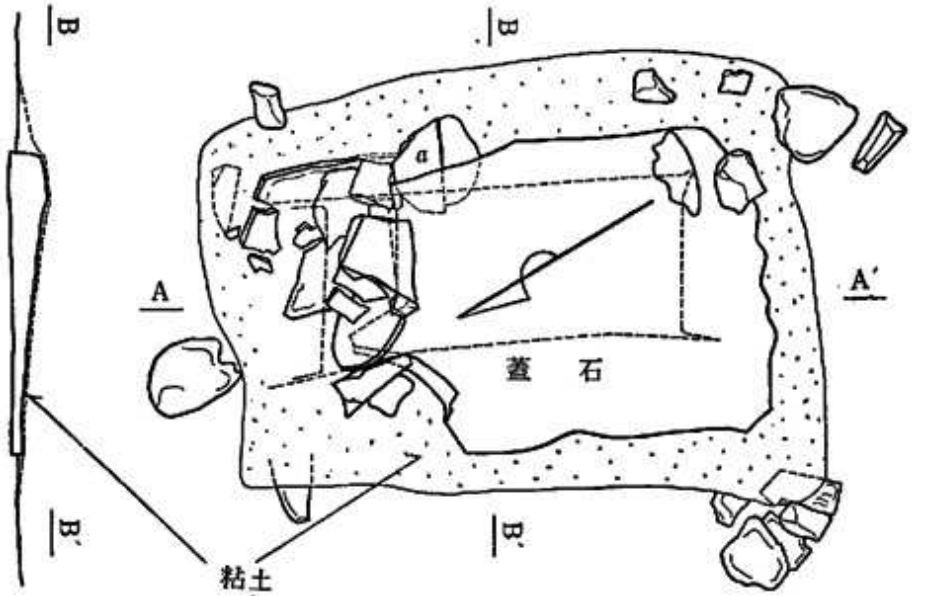
本墳の主体は，安山岩の板石，大小5枚を主体とし，さらに両側壁の不足部分をおぎなうため，それぞれ板石1枚を用いて構築した箱式石棺である。蓋石は，石棺を覆うに足る大きさの1枚石を用いていた。石棺の内部はもちろん蓋石内側には，朱が塗られていた。とくに，蓋石の内側朱彩には，刷毛痕と思われるものが認られた。石棺の大きさは上部内法で，長さ約1.7m，巾約80cm，底部では長さ約20cm，巾約75cm，深さ約90cmである。

この石棺の中軸は，N—29°16′—E であるため，記述の便宜上，磁北を約30度東にずらして，両側壁については東，西とし，両妻を南，北とする。両側壁は，さきにのべたごとく，若干寸法に不足をきたしているため，それぞれ板石を補足している。それは，東西両側壁とも，南寄りの部分において見られる（第8図）。この補足用の板石側壁は主体板石の外側から当てがわれたため，石棺内部では，この部分に空隙が生じることになる。その部分に粘土をはりこみ朱彩してあった（第7図）。

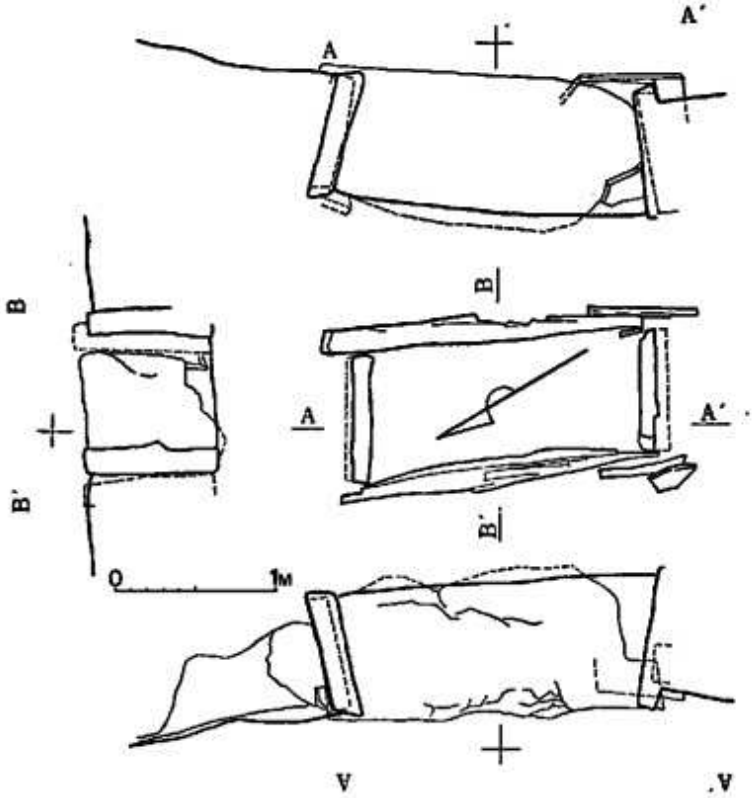
(4) 石棺構築

この石棺を，構築するにあたっては両妻の部分を，側壁がはさむ形になっている。そのため，両側壁は妻石で内傾することはふせげるが，両妻はときには土圧によって内傾することもありうるし，現に，この石棺では，両妻は上部と下部では，約30cmの違いがあって上部が内傾している。両側壁は外側から圧力を加えれば，十分安定する。しかし，さらに強固に側壁を安定させるために，50×30cm程度の雲母片岩を側壁下部外側に控積みのように配置して土をうめ込み，さらに，側壁中央附近の東壁ならびに中央部にそれぞれ1個の雲母片岩を置き，それから上部にかけて粘土を置き，粘土の外側には淡黄色土をおき，側壁上部近くに，さらに粘土を置いて安定させてある。（第8図B—B′）

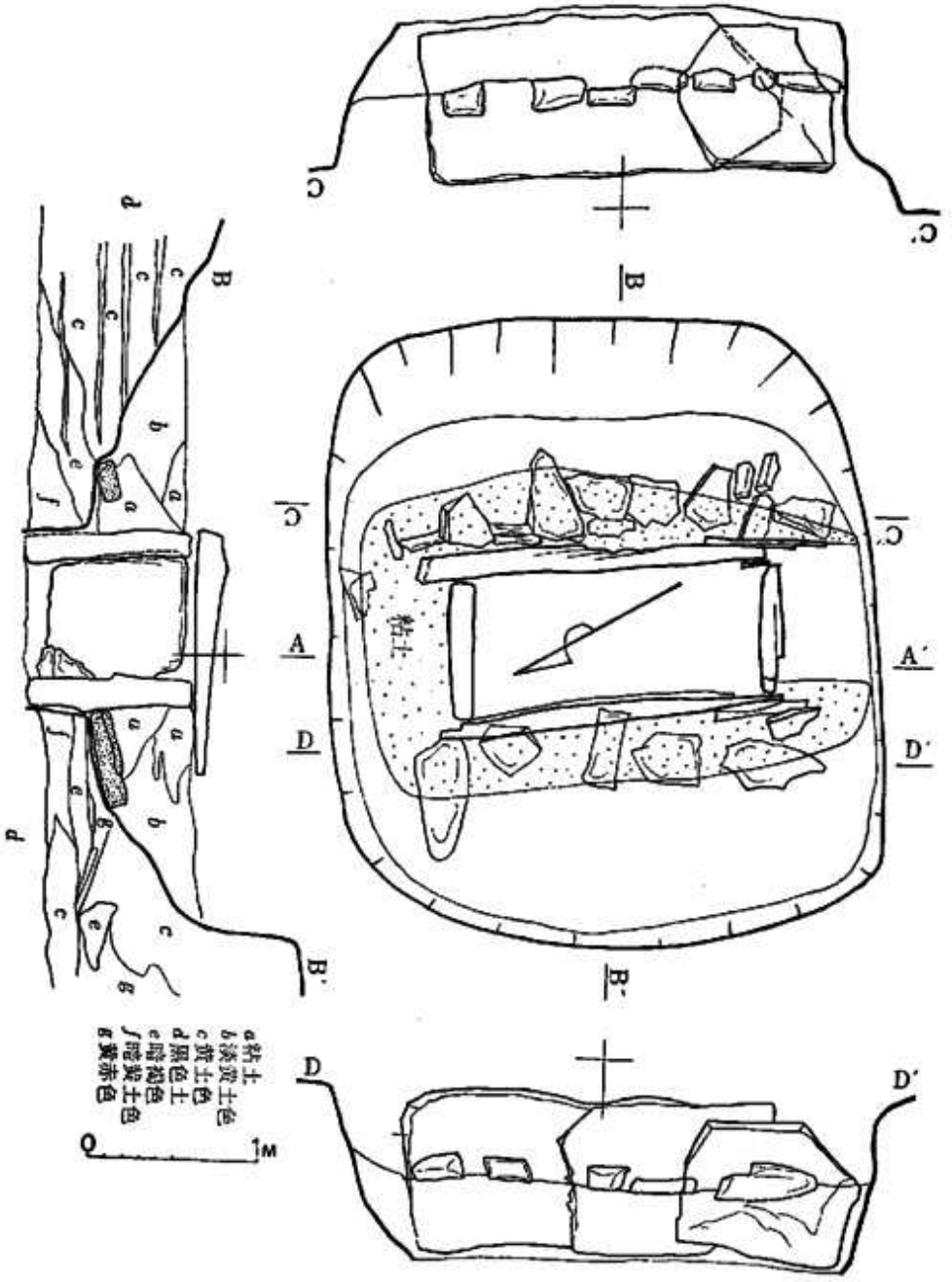
そこで，これらの石棺を構築するために，墳丘上部中央に方形隅丸の壙を掘って，そこに4側壁の石を置いた。壙の大きさはA—A′で約3.2m，B—B′で約3.6mのすり鉢状にくぼ



第6図 石棺蓋石見取図 (縮尺1/40)

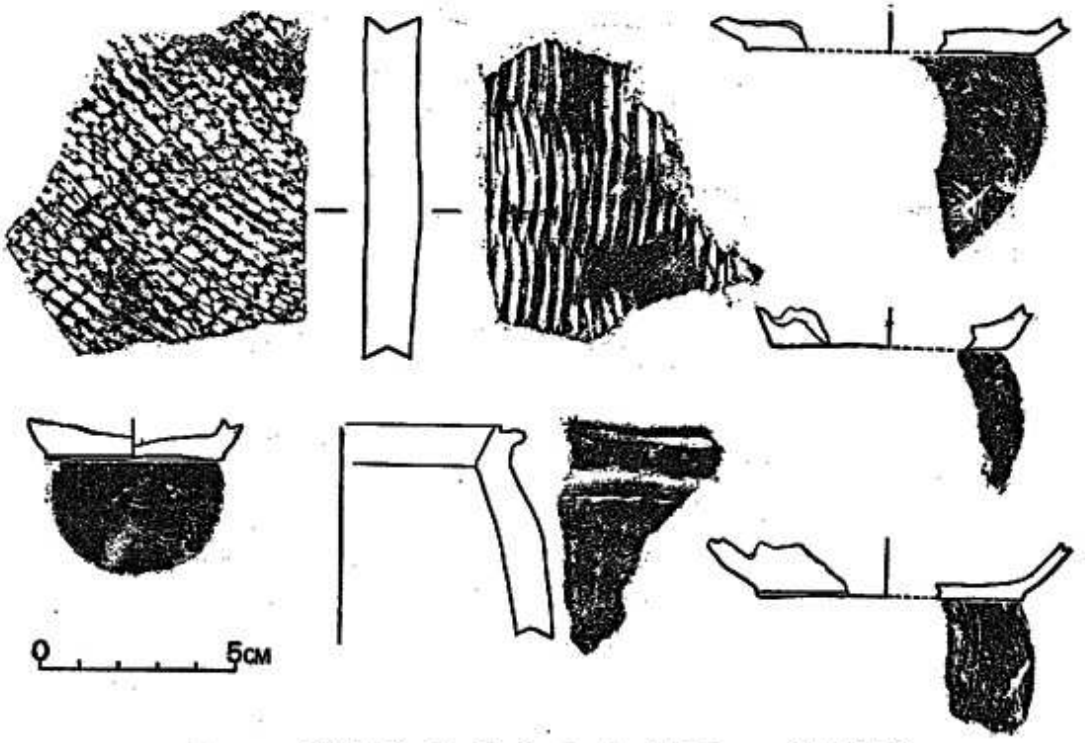


第7図 石棺実測図 (縮尺1/50)



第8図 石棺外部実測図 (縮尺 1/40)

め，現表土下約1.1mの深さのところから一段と深く掘り込まれている。その掘り込みは，東西側壁外方60～70cmのところから，ほぼ垂直に約50cm下り，ゆるやかに内側へ深く掘り込んだその最下部に側壁をたて，控積みの石を外側に並べ，上方に粘土をおいて安定させた。



第9図 墳丘出土の土器類　(縮尺 1/2)

(5) むすび

この石棺内部には，遺骸はなく，さらに副葬品も全く見当らなかった。もちろん，丹念に内部に遺存していた土砂をフルイにかける作業をおこなったが，副葬品の細片をも検出し得なかった。このことは，この石棺内に埋葬がなされたか，否かを考えさせることとなった。そこで埋葬の事実があったとするならば，盗掘を考慮せねばならない。盗掘と考えるならば，その侵入場所がどこであったか等々を考えてみなければならない。

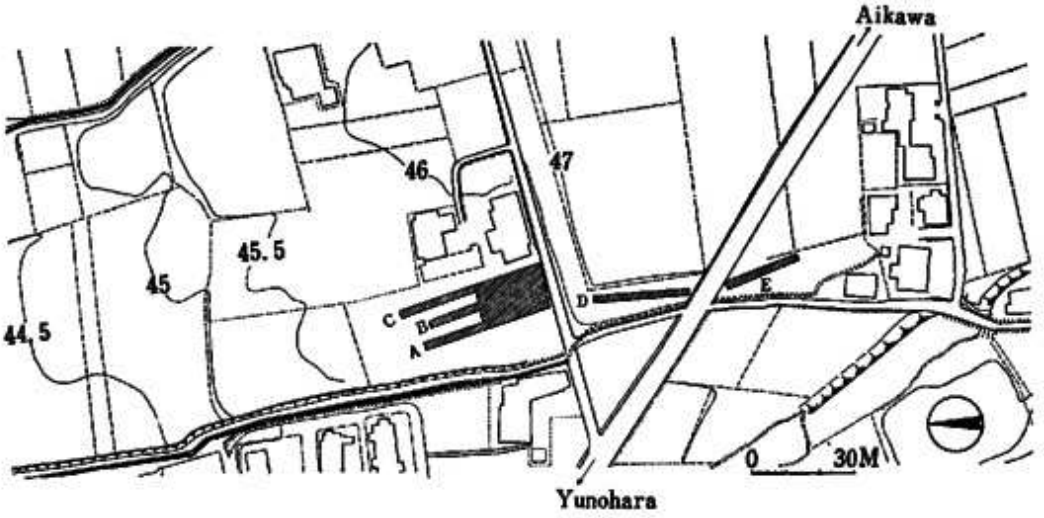
まず，天井石の状態についてみると，蓋石北側の部分に天井石と同質の安山岩破片が，不規則に天井石や側壁上部にかかりながら，約10個程置かれていた。さらに蓋石東側の北寄りに，40×40cm大の安山岩（a）があった。この安山岩aは，天井石と東側壁との間に，楔のようにくい込んでいた。いま述べた，蓋石北側の安山岩破片の状態と，安山岩aの状態，さらには蓋石の北側が粉砕片を空隙にかぶせたと考えることもできるが，安山岩aの存在はそのことを肯定することを躊躇する資料であろう。

石棺構築の際にのべた石棺側壁上部近くに2次にわたる粘土の加工があった。その第2次（上部）の粘土は天井石を覆っていたものの基部に該当するものと考えられる。この石棺蓋石上部にはきわめて少量の粘土が散見された。本来ならば側壁から蓋石にかけて，多量の粘土が

覆っていてしかるべきであろうに，それがあまり見当らないというのも不思議であった。もっともこの石棺の南外側の墳丘断面によれば，現表土近くに，酸化鉄朱（べんがら）まじりの粘土が多量にのこっていた。そのことは蓋石上部を覆っていた粘土や，酸化鉄朱塊を除去してここに放置したものではなかろうか。とすれば，この蓋石上部の土は埋葬後，一度除去され蓋石の北側をおしあけて内部の副葬品などを取り去ったのではなかろうか。そして安山岩aは，パッキングのように利用され，蓋石の砕片を空隙にかぶせたと考えることができよう。この石棺の盗掘にあった時期は明瞭でないが，かなり古い時期と考えられよう。

（大川清・高橋章）

2. 宗 崎 遺 跡



第10図 宗 崎 周 辺 地 形 図

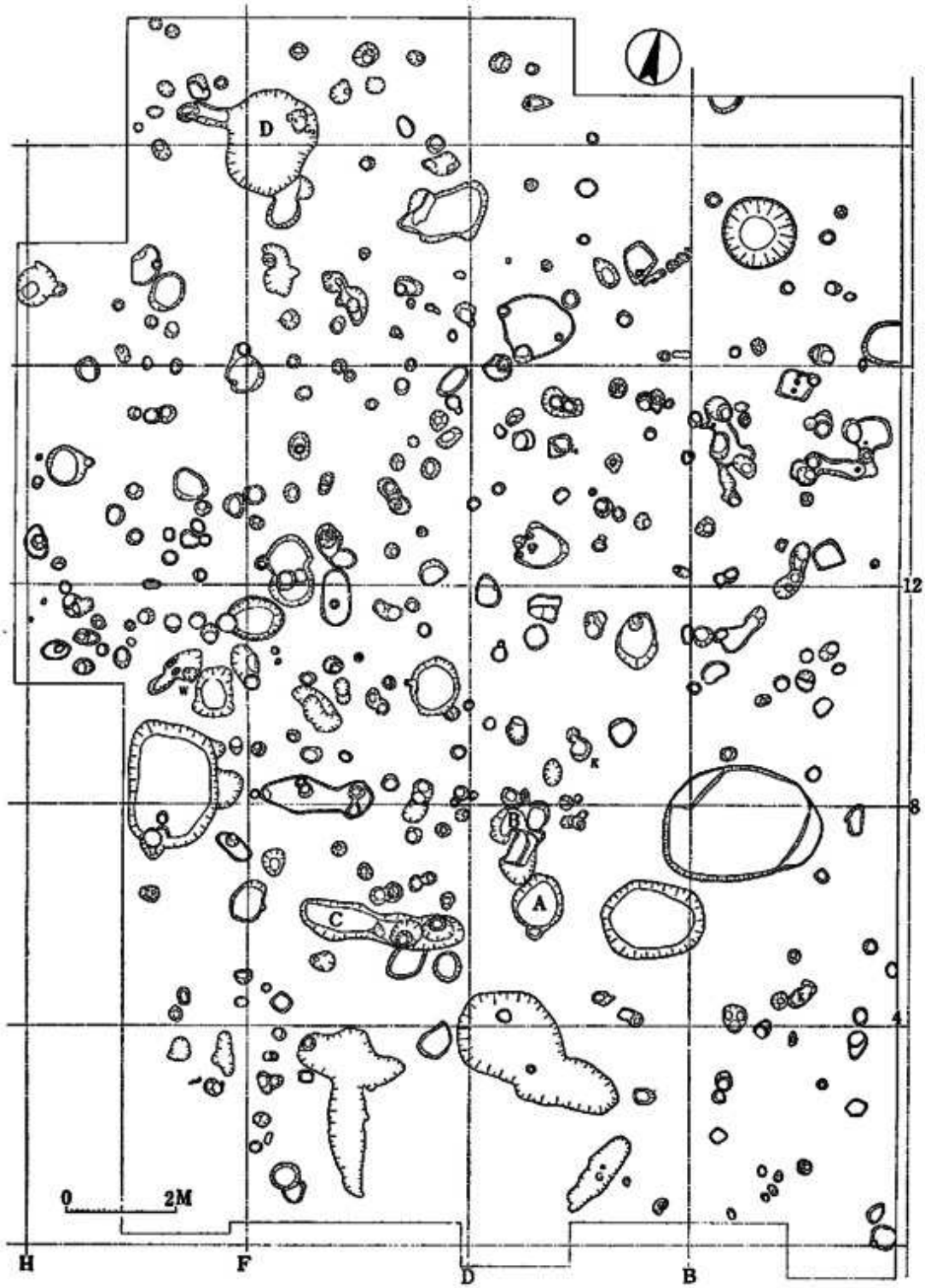
(1) は じ め に

宗崎遺跡は福岡県久留米市御井町宗崎字山ノ下2508，および土井ノ内2513番地にあり，久留米市の東方にある標高312mの高良山頂より山は西に延びて筑後川の平地へと突出する。その途中に神籠石が山を廻り，山裾には西に御井町，南に高良内町の集落が形成され，その中間に宗崎の小集落がある。宗崎部落の西には畑地が開さくされ，標高は40～45mである。

今回調査の対象とした地域は，畑地で長さ54m（東西）のトレンチを入れ遺跡の状態を観察した。その結果，南寄りの部分にさらにトレンチ2本を増設した，それによると，この南地区には柱穴多数が見られ，さらに土器類もかなり多量に発見されたので，この部分の全面発掘を実施した。遺跡は20～30cmほどが耕土でその下部に黒色土が20～30cmあり，その下は黄褐色の地山という土層構成であつた。遺構としての柱穴や土壙は耕土下の黒色土から掘り込んで地山に及んでいた。そのため，発掘ではこの黒色土層を除去して地山を検出した。遺跡全体図は地山面において記録したものである。

調 査 主 任　国士舘大学考古学研究室　大 川　　清
　　福岡県教育委員会技師　　西 谷　　正
　　国士舘大学考古学研究室学生　伊藤博幸，森広樹，真下高幸，石山勇
　　山崎由美子，近藤利由，北原実徳，安藤史郎

なお発掘調査には久留米市教育委員会よりの絶大なる御援助を賜わった。この他，久留米市



第11図 宗 崎 遺 跡 全 体 図 (縮尺 1/125)

南筑高等学校地歴部，ならびに信愛女学院高等学校歴史部生徒諸君の協力を得た。また宿舎を提供頂いた高良山神社に対し謝意を表する。

調査の大要　12月5日，県教育庁文化課西谷技師ならびに久留米市教委文化財塚本主事等と現場視察，トレンチ設定の準備をおこなう。6日　南北に巾2m，間隔4mで西側よりA・B・Cのトレンチ3本を入れ，各々径20～25cm程度のピット多数を検出。8日より各トレンチの発掘を進める。18日よりA・B・Cトレンチの南側を拡張。24日　実測，写真撮影を終了，25日より発掘区の埋戻し作業開始。27日　発掘調査を終了。

本稿作成にあたっては，調査担当研究室学生がそれぞれ分担してことにあたった。

(2) 遺構・遺物

遺跡は南北約20，東西約16mの広さ（320㎡）を全掘した。実測図にみるごとく，4m方眼を組んであるが，調査時には南北線をアルファベット，東西線をアラビア数字に表現した。したがって東西線は南から順に0～20，南北線は東から順にA～Hとして1ブロックを1m平方とした。

遺構としては柱穴と考えられるものと土壙であった。柱穴と思われるものは径約30～40cm，深さ30cm程度のものと，同じくらいの径をもちながら深さが10数cmというのもかなり多くあった。土壙は大きさに統一がなく，長円形のものや細長いものがあり，大小さまざまであった。遺物はこれらの遺構から発見されたものが最も多く，地山上の黒色土層中から発見されたものは僅かであった。

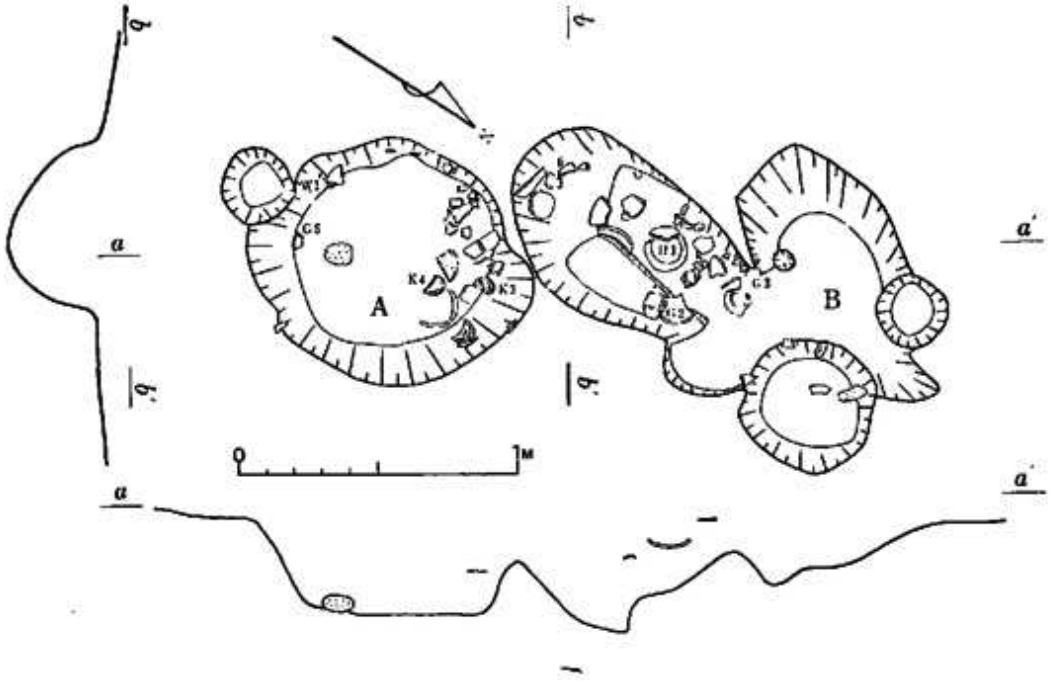
土　壙

A（D—8区，第12図）径約1.8m，深さ約0.7mの円形である。壙内には土器片が多数入っており，それはほとんど北側に集中していた。遺物は地山に接しているものはなく，黒色土に含まれて発見された。このことは壙内に黒土が若干（約¼程度）埋積したあと遺物が混入した事実を示すものであろう。遺物には白磁，瓦器，かわらけなどがあった。

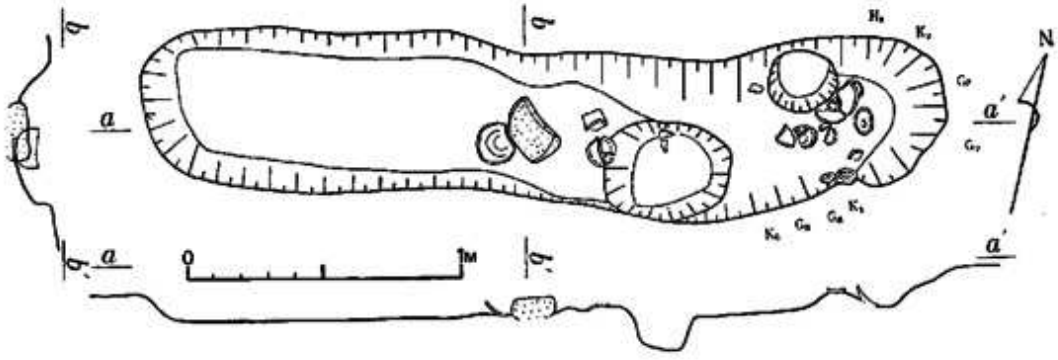
また，南寄りの壁に径約55cm，深さ約35cmのピットがあり，観察によるとピットに黒土が埋積したあと，本壙がつくられていた。

B（D—8区，第12図）長さ約3.4m，巾約2m，最深部約0.8mの互いに切り合った不整形な遺構である。本壙の主体は長方形で，土師器，瓦器，かわらけなどの土器はこの部分に集中していた。北寄りに大小2個のピットがあるが，本壙との新旧関係はAと同様ピットの方が古い。

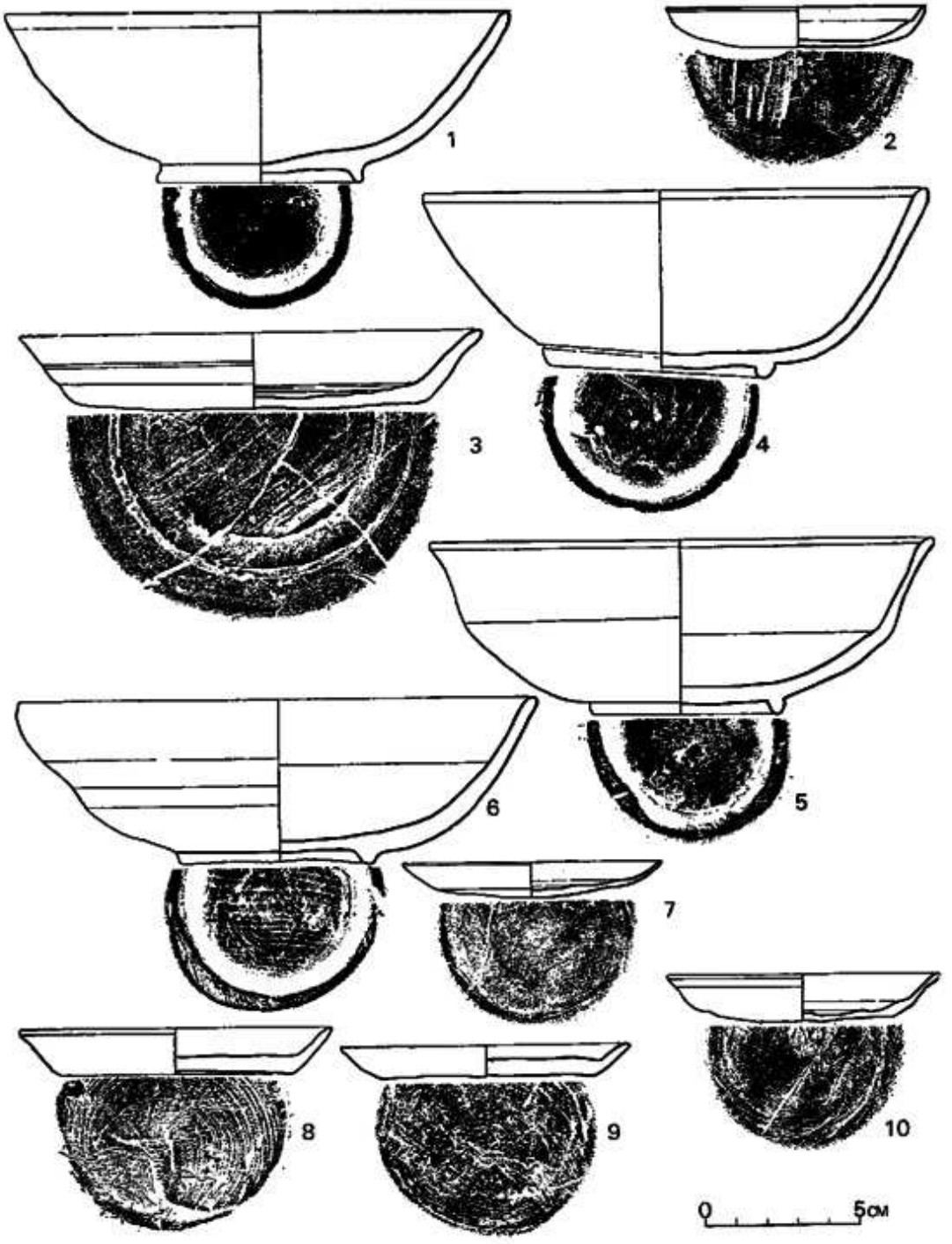
C（F—8区，第13図）長さ約6m，巾約1.2m，深さ約0.2m，瓦器，かわらけ等の遺物は東側に集中していた。遺物はA・Bと違って地山に接して発見された。壙内には大小2個のピットがあり，相互の切り合い関係を把握することはできなかったが，大ピットから地山壁に接して同類の土器片が数点出土していることより，壙の方が時間的に新しさを感じさせる。



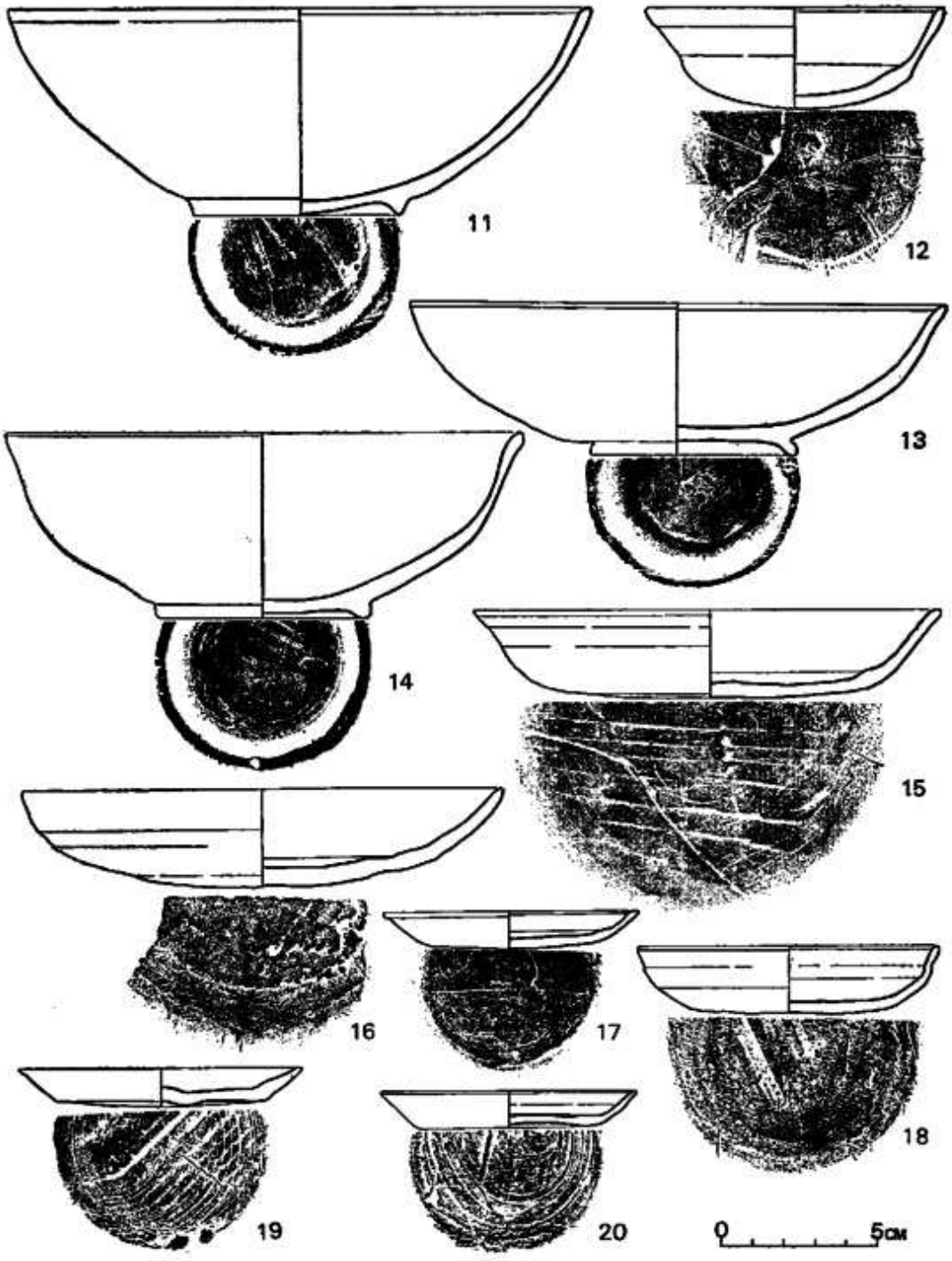
第12図　D－8区－A・B土壙実測図　（縮尺1/30）



第13図　F－8区－C土壙実測図　（縮尺1/30）



第14図 遺 物 実 測 図 （縮尺 1/2）



第15図　遺物実測図　（縮尺1/2）

D（F—20）長さ約1.9m，巾約1.5m，深さ約0.45mの壙で，北寄りのピットの埋積土の上部から瓦器埦2個が出土した。これはおそらく壙に附随するものであろう。

以上の土壙から出した遺物について以下表示する。

図版番号	写真番号	G－No.	種別	器形	色調 内	色調 外	備考
1		D－8	G 2	埦	黒	黒	附高台
2		D－8	K 3	皿	赤褐	赤褐	
4		D－8	G 5	埦	白灰	白灰	附高台
5	5	F－20	G 1	埦	黒	白褐	附高台
7		D－8	K 4	皿	黄褐	黄褐	
10	1	F－8	K 1	皿	褐	褐	ヘラ起し
12	7	F－8	G 8	埦	白灰	黒	内に暗文
13		D－4	G	埦	黒	黒	附高台
14	8	F－20	G 2	埦	青灰	青灰	附高台
15		D－8	H 1	皿	黄褐	黄褐	
16		F－8	H 4	皿	褐	褐	
17		F－8	K 2	皿	褐	褐	ヘラ起し
18	2	F－8	G 7	皿	黒	黒	内に暗文
20		F－8	K 6	皿	褐	褐	底部糸切り
21		A－4	W	皿	白	白	
25		D－4	R				石鍋の一種？

* S—須恵器　G—瓦器　H—土師器　W—磁器　R—滑石製品　K—かわらけ

図版番号は挿図14～16図まで．
写真番号はPL．6—(1)，(2)．

黒色土中出土遺物を以下表示する。

図版番号	写真番号	G－№	種別	器形	色調 内	色調 外	備考
3	4	C－19	H	皿	褐	褐	
9		C－17	K	皿	赤褐	赤褐	底部糸切り
11		C－19	G	埦	黒	黒	
22	10	C－8	W	皿			見込みに花文あり
26		C－19	R	鍋			外面煤附着

ピット内出土の遺物を以下表示する。

図版番号	写真番号	G－№	種別	器形	色調 内	色調 外	備考
8		D－9	K	皿	黄褐	黄褐	
19		A－6	K	皿	赤褐	赤褐	底部糸切り
23		H－12	W	埦			底部，附高台
24		D－16	R 1	鍋			内面整形痕
27		D－16	R 2	鍋			
6	6	F－16	S	埦	暗灰	暗灰	

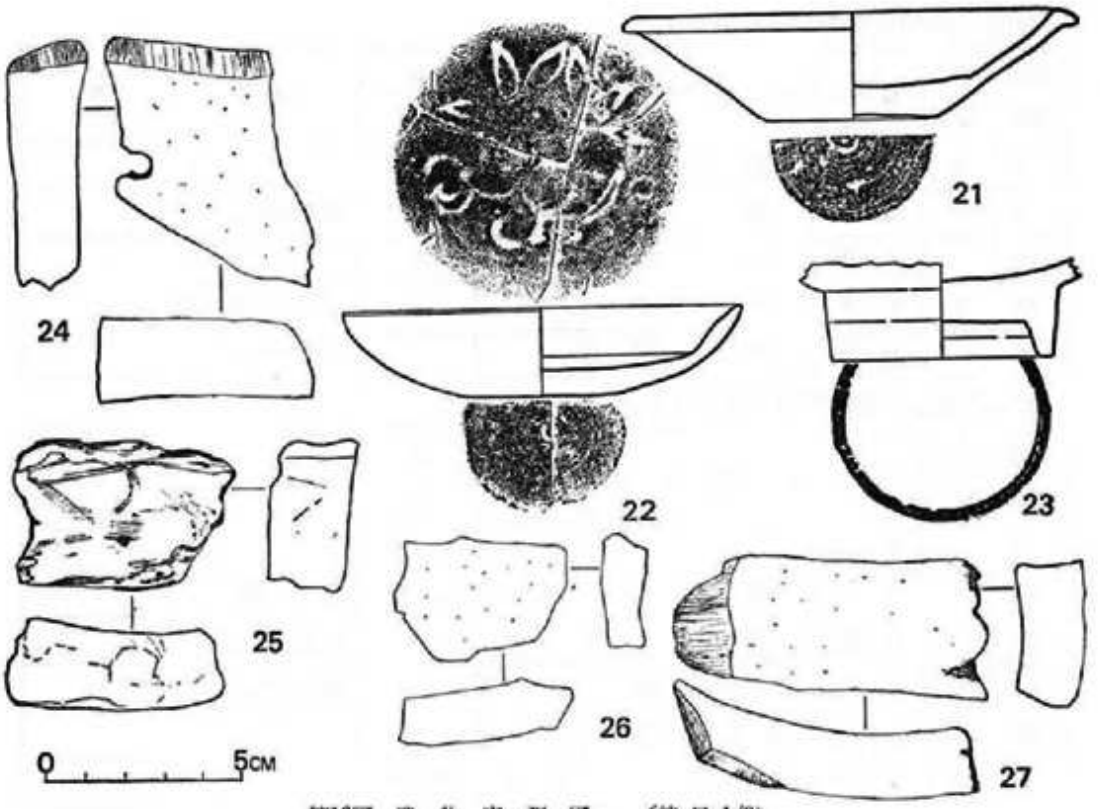
以上，本遺跡出土の遺物を遺構別に表示した。

遺物には白磁，瓦器，かわらけ，土師器，須恵器，滑石製鍋などがあった。白磁は福建省南部方面の産で13世紀末より14世紀代のものであろう（註1）。瓦器は埦形が主体で，小型埦は数個であった。かわらけは器壁の薄手のものと厚手のものがあり，色調も褐色と赤褐色の二種がある。土師器は口径15cm前後の皿形である。須恵器は埦形で瓦器の形態と同類であった。本遺構からは土器の他に滑石製石鍋と思われる破片が4点程出土した。

九州地方ではこのような中世遺物の出土は少く，その研究も今後にまつものがある。もちろん，これは九州地方に限ったことではなく，畿内周辺を除く他地域においても同様である。

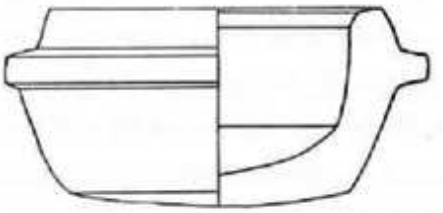
畿内周辺からもわずかではあるが滑石製石鍋の出土例がある。しかし，九州地方では滑石製品の製作・使用がことのほか顕著で，一つの文化圏を形成していたものとも考えられよう。それらの製品には経筒（註2），経石，石仏等がみられ。さらには本遺跡出土のような石鍋も多くの発見例がある。滑石製石鍋の形の窺えるものとしては福岡県太宰府町（註3）長崎県南有馬町（註4）などがあり，第17図に掲げた石鍋は久留米市朝妻出土の完形品である。

註（1）　白磁については東京国立博物館の長谷部楽爾氏の御教示を得た，記して謝意を表する。
（2）　小田富士雄『西日本の石製経筒』日本歴史考古学論叢第2所収
（3）　小田富士雄・鶴久嗣郎『防長地方の中世土鼎』九州考古学15



第16図 遺 物 実 測 図 （縮 尺 1/2）

（4） 浜口叶・古田正隆『石鍾の副葬ある石棺』九州考古学14



（縮 尺 1/4）

(3) む す び

この320㎡ほどのところに数多くの柱穴と壙が発見され，柱穴については大小，さらには深浅があり，これらをもってただちにすべてを建造物の柱穴とするわけにはいかないが，若干建造物らしきプランを求めることもできるし，さらには塀のようなものの柱列と考えられそうなものもある。壙についてはその性格をいかなるものと考えてよろしいのか即断を避けるが，これらの壙を埋めていた黒色土の中に，きわめて多くの土器類が発見されたことは，ある時期にこれらの壙の中に土器類が入れられ，その

第17図 （上）石鍋実測図 （下）石鍋写真

当時の地表面にはあまり土器類が散乱していなかったといえよう。柱穴の中から発見された土器類も壙の中からでたものとさして時代差を求められないようである。したがつて柱穴の中には土器が落ち込んだ時期と壙が開壙していた時期はほぼ同じと考えて違いなかろう。これらのきわめて輻輳した柱穴や土壙の年代についてはそれぞれの中に埋もれていた土器類などの年代から考えねばならない。とくに遺物のうちで白磁の存在はその年代を14世紀末頃と推定し得るし，瓦器塊，さらにはかわらけなどの土器類も，ほぼその頃に比定してまちがいないであろう。

この遺構，遺物をもってただちに当時の高良大社との関連を単純に断定することはつつしむべきであるが，高良大社の門前集落の一部を形成していたということには誤まりはないであろう。（大川　清・伊藤博幸）

3. 甲 塚 遺 跡

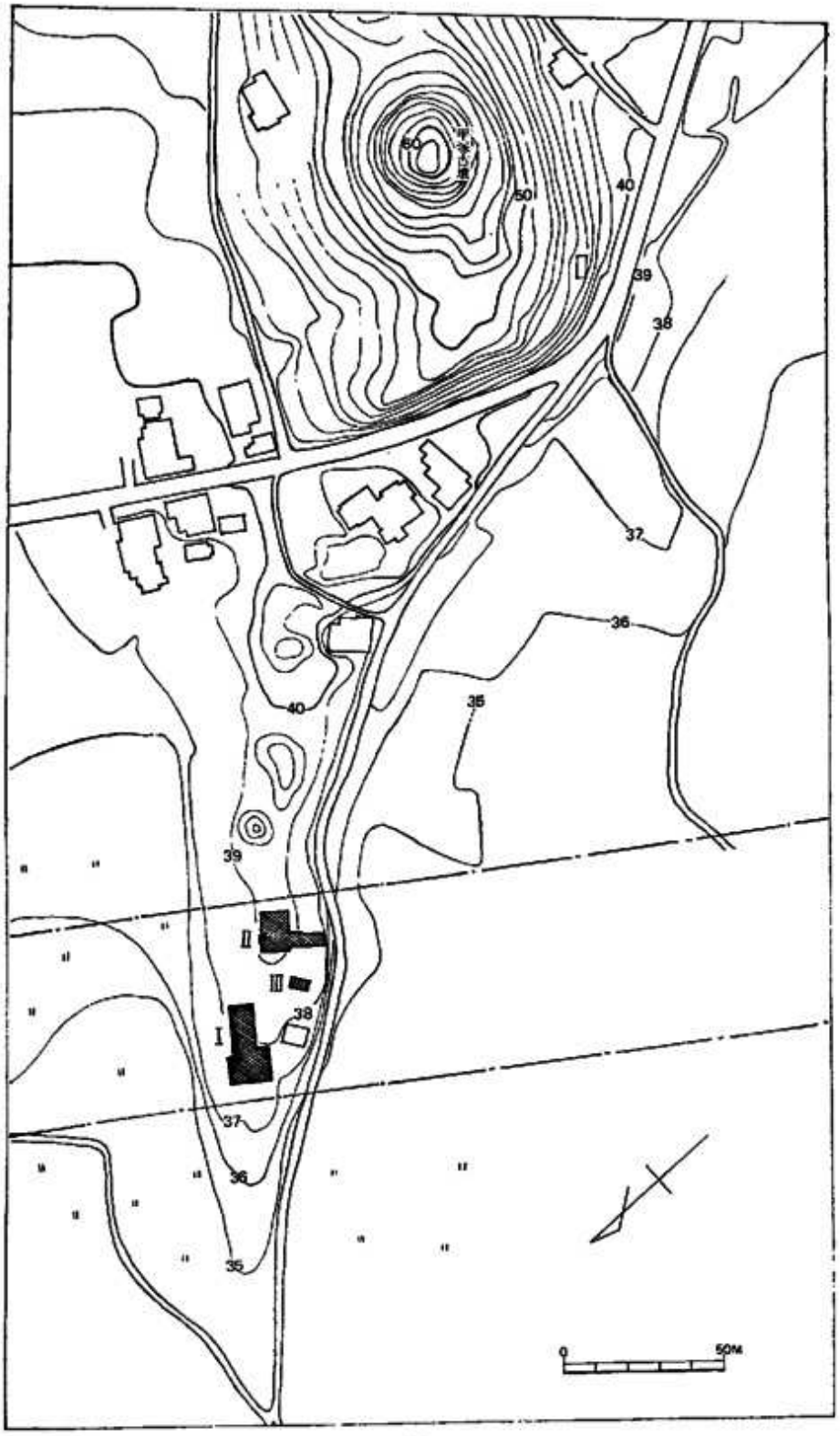
(1) は じ め に

久留米市藤山町字甲塚所在の遺跡が九州縦貫高速道路建設予定路線上にのぼり，かねてより福岡県教育庁より予備調査の依頼をうけていたが，事情によりのびのびとなっていた。

ようやく昭和44年12月2日，松岡史氏，西谷正氏と同道，遺跡の下見聞を行い，12月15日から調査を行うことにした。そして，国分直一教授の指揮で，東京教育大学考古学研究室の学生諸君と共に，12月28日まで同遺跡の発掘調査を行った。現在発掘終了後，日が浅く資料の整理も完了しておらず，有機質の遺物，とくに花粉分析を試みたいと思っておるが，おって，詳細な記述それらは後日，本報告に発表する予定にして，とりあえず，調査の概要を報告しておきたい。

(2) 遺跡の所在・名称

久留米市の南部に，浦山装飾古墳，石櫃山古墳など著名の古墳の散布する丘陵と，国道3号線の走る台地にはさまれたところに，水田が扇状に展開している。水田地帯の東南端は，甲塚古墳のある丘陵で，その麓に低い舌状の台地が北西に向け突きでている。台地の基部は現在住宅，植木の栽培地となっており，その間に2，3基の円墳が認められる。付近にはもと古墳が数多くあったと考えられ，甲塚古墳を中心にした古墳群の一角である。現在台地のほぼ中央に高さ約3m，径10m前後の円墳が，頂部が陥没していて盗掘された形跡がみられるものの，墳丘はほぼ原形をとどめて残っている。この地の甲塚という字名もこうした古墳群を背景にうまれたのであろう。ところで，この台地の先端部は雑木林ないし畠地で，石器，土器片の散布がみられる。道路建設予定地となり，調査を要請されたのはこの部分で，甲塚在住の中尾主税氏，中村忠次郎氏の畠地に第18図に示すように3ヶ所にトレンチを設けて調査を行なった。第3地区は中村忠次郎氏所有の雑木林で，かって同氏が開墾した際石積に遭ったため畠にするのを断念したとのことで，古墳の遺構が残っておるかと推定し，試掘を行なった。結果はなんらそうした徴候を認めず，縄文時代の遺構を発見した（PL7.8）。第1．2地区も同じように先史時代の遺構を認めるだけで調査の範囲内では，台地の基部に多くみるような古墳時代の遺構は発見しなかった。しかし，遺跡の所在する字名にちなんで，一応調査した遺跡も甲塚地区の一部であるところから甲塚遺跡と名付けしておきたい。なお，この舌状台地は，甲塚古墳の築かれた丘の麓からでて，長さ約250m，水田面との比高約4～5m，緩やかな傾斜で，西北方に突出し，水田をこえ，遥か延長上に浦山装飾古墳を望むことができる（PL.7）。



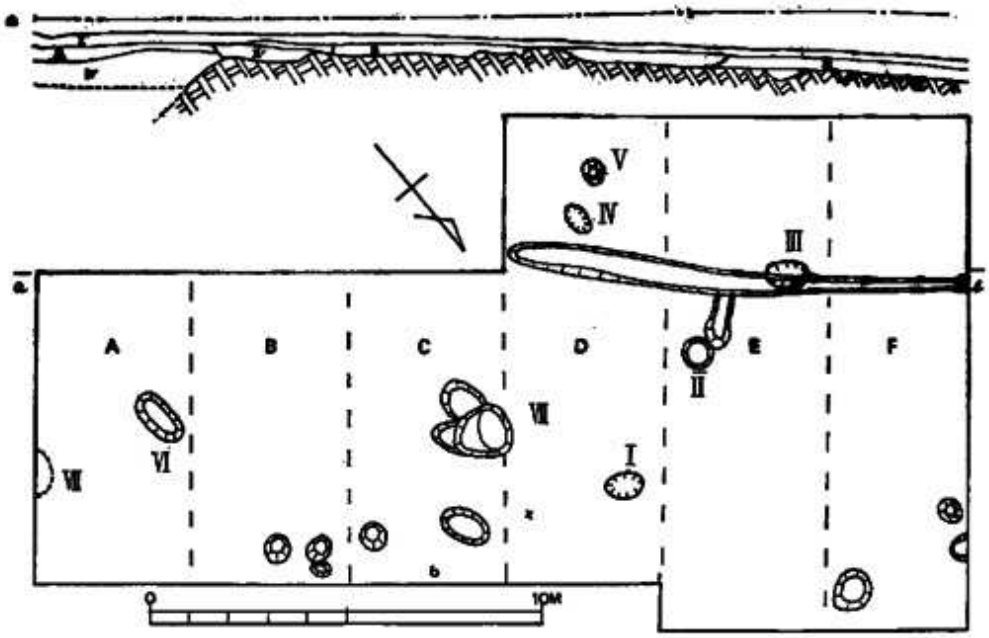
第18図 甲塚遺跡地形図

(3) 調査の経過並びに遺構

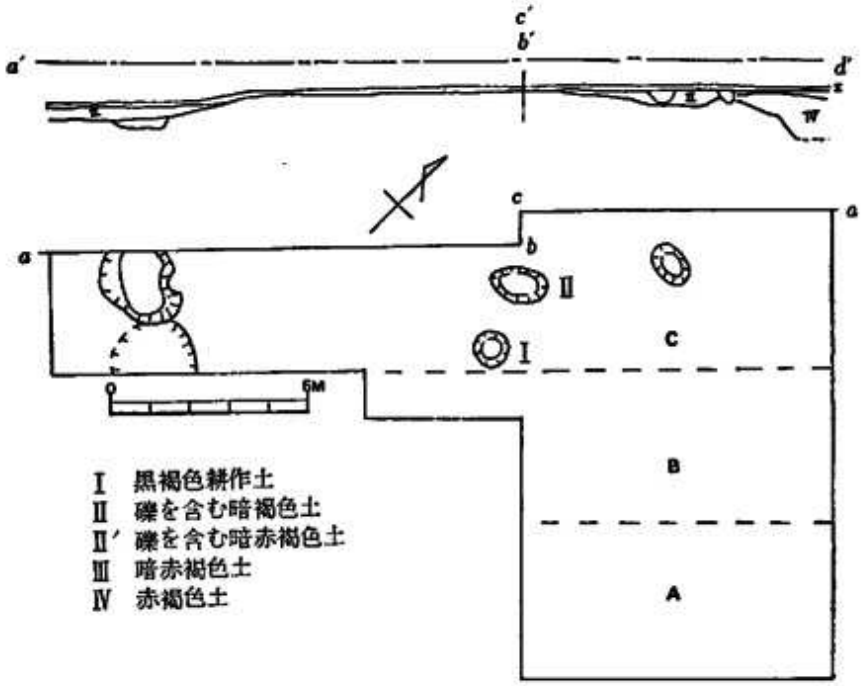
第1地区ではまず幅8m，長さ24mの範囲を4m平方を単位として調査し，台地の先端部に近い部分では，左右をそれぞれ拡張した。台地の基部に近い部分から，A（1，2），B（1，2）……F（1，2，3）区とした。約30cmの表土を除却すると，A区からF区にわたって一直線の浅い溝（幅80cm，深さ10cm），A区で1辺約3mの方形の溝，D区で半円形の溝その他黒褐色有機土を含む遺構が検出された。こうした有機土からは近代のガラス，陶片，火打金，明治年間の半銭銅貨などが出土している。最近の構築にかかわることが明らかで，かってこの台地は果樹園が営まれていたといい，F区に宅地であったことと併せて，かなり攪乱されてたことが推測される。

つぎに，こうした溝類がきざまれた表土下の堆積層は地区によって相違している。B区からC区にかけて礫を含む暗褐色土（Ⅱ）が堆積し，D区からF区にかけて南に拡張した地点では礫を含む暗褐色土層が薄く，表土の下はほとんど礫の多い黄褐色土層の地山に直接連らなるといってよい状況であった。A区は粘土質暗赤褐色土層（Ⅲ）があって，ここからは，礫混りの暗褐色土層も共に石器，縄文晩期土器片が出土していく前記黒色有機土の溝のような近代の遺物を含くまれていない。また，断面図に示すように，礫を含む暗褐色土層は，粘土質の暗赤褐色土層をけずりとったようにその上に堆積している。前者が時期的に新しく形成されたことは明らかである。また，礫混じりの暗褐色土層は，うちに若干遺物がみいだされる点はⅢ層（暗赤褐色土層）に，似ているが，性格はいかにも地山に通じ，地山が開拓されて，成立したと考えられる堆積である。Ⅲ層の堆積が現在わずかA区だけしか残ってないのは，台地尖端部がほぼ全面開拓がすすめられ，礫混りの暗褐色土層が形成されるときに，粘土質の暗赤褐色土層は一部を残し除かれたのかもしれない。第2層の礫混りの赤褐色土層に若干遺物が認められるのは，そうした攪乱の際，土中に残ったのであろう。出土する土器片はほとんど器形を推定もなし難いまで小破片になっておりその量も乏しい。

第2地区では，12m×8mの矩形の範囲にA—Cの発掘区を設け，C区に接してこれに直交する幅3m，長さ12mのトレンチを斜面に向け，丁字形に設置して調査を進めた。約30cmの厚さの表面の耕作土を除去すると，第1地区と多少趣きを異にしているが，ここもかなり攪乱され，土器片，黒曜石片が発見されるにかかわらず，オリジナルな遺物包含層は見出しえなかった。すなわち，ここでは第1地区のような新しい時期の黒色有機土を含む溝がなく，また，第1地区Aに認められた礫を含まない粘土質の暗赤褐色土の堆積（Ⅲ）を見出し得ないで，耕作土の下は直ちに礫を多く含む黄褐色土の地山，ないし，若干土器片，黒曜石片を含む礫を含んだ暗褐色土層（Ⅱ）が展開している。第1地区D～Fと相似を層位の状況を示していた。



第19図　甲塚遺跡・第1区竪穴遺構配置図　　(縮 尺 1/200)



第20図　甲塚遺跡・第2区竪穴遺構配置図　　(縮 尺 1/200)

次に，第1地区B～F区にわたる礫の多い黄褐色土の地山はB区からA区にかけて，急激に下降し，A区では遺物を包含する暗褐色土層（Ⅲ）の下に遺物を含まない赤褐色粘土層（Ⅳ）が厚く堆積している。これと同じような状況が第2地区のC区北東隅にも見出された。地山は急激に東北面に傾斜し，粘土質の赤褐色土層が厚く堆積しているのである，こうした両地区の同方面での共通した現象からみて，おそらく第1地区のA区から，第2地区にわたって地山が陥没しておったらしい。そこに赤褐色土（Ⅳ）が堆積し，現在のような平担な地面が形成され，遺物包含層（Ⅲ）が形成される基盤となったのであろう。

第1，第2地区の間に設けた第3区は，既述のように古墳の遺構があるかもしれないという想定のもとに実施したが，そうした徴候がなく，潅木の根を掘り起すとただちに礫混りの黄褐色土の地山がでて，第2区とほぼ同じ状況にあつた。

上述のように，第1区から第3区を通して層位は不規則であり，表土の下は地山という単純なところが多いのであるが，こうしたなかで，時期を異にし，形も大小さまざまの竪穴が各所で見出された。表土直下の地山に認め，封土に遺物がなく時期を決定しがたいもの，礫混りの暗褐色土(Ⅱ)を切って築造されたもの，同上の暗褐色土(Ⅱ)に覆われたものなど，層位の関係からもいくつかに区別できる。第1地区C区のいくつかの竪穴が重複し，不規則な形をしている竪穴（Ⅶ）は，少くともその一つが礫混り赤褐色土を切って作っている。第1地区竪穴Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅷは礫混じり暗褐色土（Ⅱ）に覆われていた。またA区の長楕円形竪穴は礫を混えない赤暗褐色土に覆われて発見されⅠ，Ⅱ竪穴より大形で深く，封土中より石鏃が出土している。第1地区Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ，Ⅶ，第2地区Ⅰ，Ⅱは表土直下の地山にあって，うち，第1地区Ⅳ，第2地区Ⅰ，Ⅱの封土中からは若干の土器，石器が封土中より出土，他の竪穴では遺物が認められなかった。第2地区C5区のやや大形の竪穴は礫混りの暗褐色土におおわれているが，封土ならびに底面からなんら遺物の出土を見なかった。

上述のような各種の竪穴のうち注目されるのは，第1地区Ⅰ，Ⅱ号竪穴，とくに多量の縄文晩期の土器片，黒曜石製錐，磨り石などの石器，魚鱗その他の有機物を含むⅡ号竪穴である。径80cmの円形竪穴で，断面は袋状になっている。Ⅰ号竪穴は長径約1m，短径75cmの楕円形で，断面はこれも袋状を呈している。また，これらと同じように内部に遺物を含んでいたのは，第3区で見出した竪穴で，縄文晩期の完形椀形土器，打製石斧，石鏃，石皿破片等が出土している。長径80cm，短径65cmの楕円形で，断面は前記竪穴と異り，鍋底状に口が開いている。第3区は表土を除却すると全面礫混りの黄褐色土の地山で，竪穴の深さは推定したところ約45cmをかぞえる。第1区のⅡ号竪穴は深さ cm，Ⅰ号竪穴は55cmである。竪穴の規模からいって，いずれもそれほど深いものとは考え難いが，原形はこれらより幾分あったであろう。

ところで，こうした小型の竪穴の目的は果してなにであったろう。第1区Ⅰ号，Ⅱ号竪穴は袋状を呈し，一見弥生時代の貯蔵穴と推定されるものと形は似ているが，規模の点から物を貯

蔵したとは考え難い。また，袋状でない第3区の竪穴も認められる。これらの竪穴中よりの遺物の出土状況をみるに，第3区竪穴からは完形の土器が1個出土している。あるいはこうした完形のものを置いていた竪穴かともみられるが，これは唯一の例外で，大部分の土器は破損し，完形に復原しうるものはない。また，竪穴中より石器が出土しているが，小型例を除いて，第3区竪穴出土の石皿は使用に耐えない破片である。また第1区Ⅱ号竪穴からは破損しているが接合しうる磨り石が出土している。竪穴中で破損したのではなく，破損したものを一括置いたと考えられる品である。また，この竪穴からサヌカイト製の剝片がかなり出土しており剝離順序の追える例もある。一括して竪穴に放棄したものであろう。さらに第Ⅱ号竪穴からは魚鱗をはじめ有機物も多い。したがって，これらの竪穴は貯蔵穴というよりむしろ廃棄物を処置した穴と考えた方が，遺物の出土状況からみて合理的なように思えるので試案として書きそえておきたい。

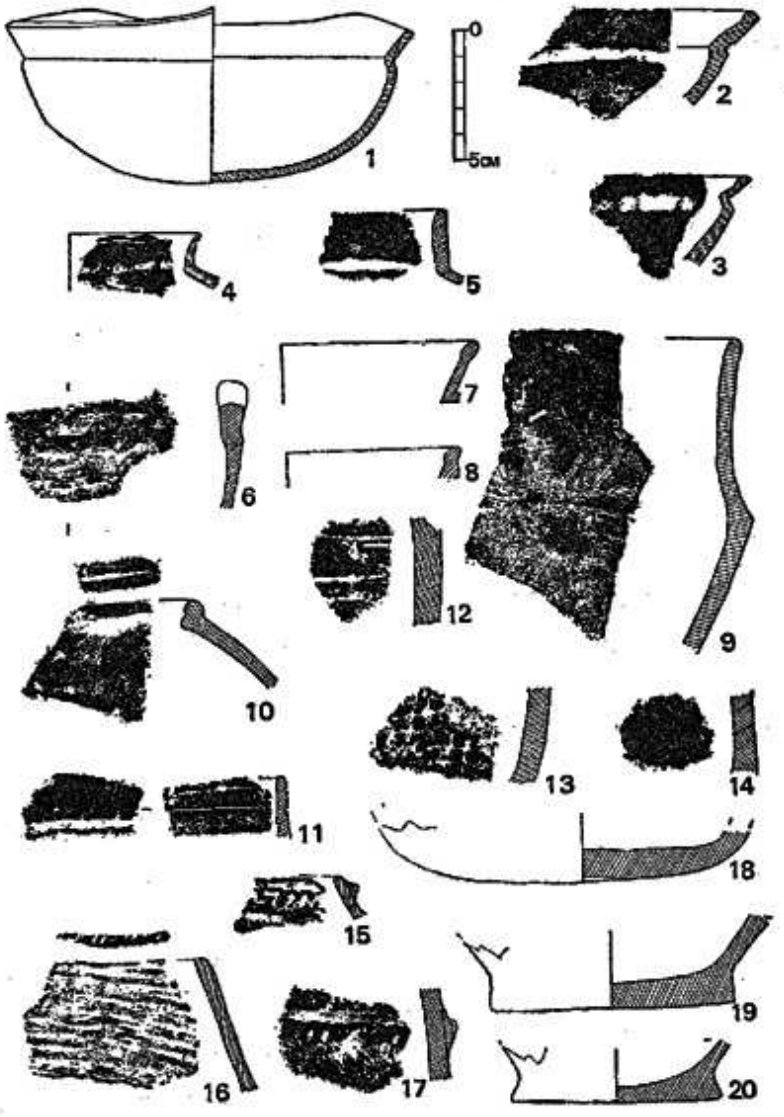
(4) 出 土 遺 物

前述のようなこの遺跡の層位，遺構の状況にあって，とくに豊富な遺物を出土したのは第1地区Ⅰ号，Ⅲ号竪穴および第3地区の竪穴で，包含層出土の遺物は，土器などほとんどが小破片で形をうかがえるものに乏しい。しかし，表土，包含層，竪穴出土品を通じて，とくに石器が豊富である。いまだその全体を整理していないが，とりあえず，主要なものを選んで紹介しておく。

土器　遺跡を構成する先述した諸層のうち，遺物を出土したのは，表土層，礫混りの暗褐色土層（Ⅱ）暗赤褐色粘土層（Ⅲ）および竪穴遺構のうちのあるもので，それより下層の赤褐色粘土層（Ⅳ）および礫の多い黄褐色土層（Ⅴ）は無遺物層である。各種出土の土器は層位によって区別し難く，総じて，焼成温度が低く，胎土のもろい縄文式土器の系統に属している（第21図参照）。表面を荒い条痕を残して調整した粗製土器と，砂粒のがすくなく良質の胎土で，表面を磨研した精製土器とに大別されうる。粗製土器に属する第21図—16は口縁部に刻み目があり，15，17は口縁部および胴部に粘土紐を貼布し，これに刻み目をほどこしている。また，表面の文様については，4，11，12のように，沈線をめぐらす例，13にみるように，網目状の沈線をほどこす例がある。

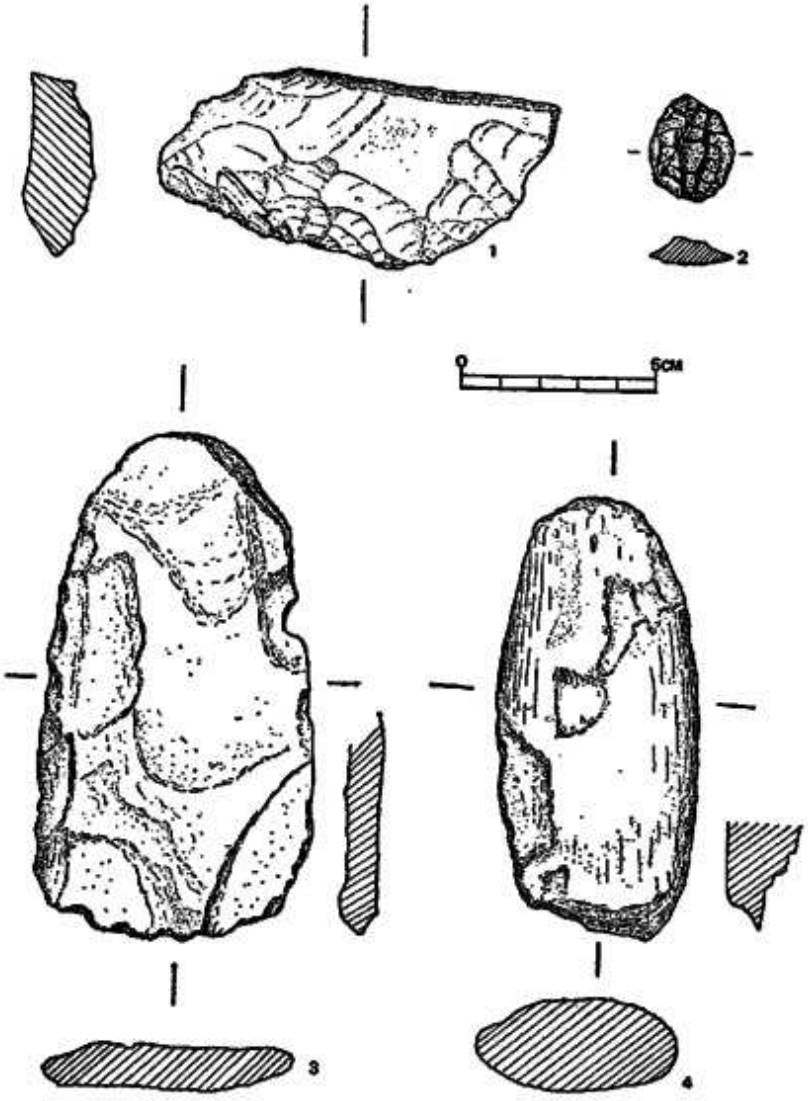
器形には椀形，壺形，鉢形，深鉢形などが認められ，唯一の完形土器であった第3地点竪穴出土の椀ないし浅鉢形の土器（第21図—1）は，丸底で，三カ所に頂点をもつ波状口縁をもっている。第21図の6，11もこうした波状口縁をもつ土器の口縁部の破片である。底部の形には前述の完形土器のように丸底のほか，粗製土器には，丸底（18），円形粘土板を貼布した平底（19，20）の例が出土している。

遺物の整理が進んでいない段階で，急ぎ結論を出すのは慎みたいが，第2区A区表土下で得



第21図　甲塚遺跡出土土器実測図　　(縮尺 1/3)

た土器片（第21図14）は格子目状の浮出た文様がほどこされている。一見叩文の感じであるが，しかし，胎土は土師，須恵器のそれと異って，明らかに縄文土器である。北九州でこの種の土器が何時頃に出現しているか検討しなければならない。この所属の明らかでない例外を除いて遺跡出土土器の前掲の特色は北九州の縄文晩期の土器に通じるのであって，また，縄文晩期以外の土器はないといってよい。したがって，縄文晩期のある時期に，甲塚の舌状台地は人間生活の拠点となったのであって，住居も営なまれたであろう。しかし，弥生時代に入ってから



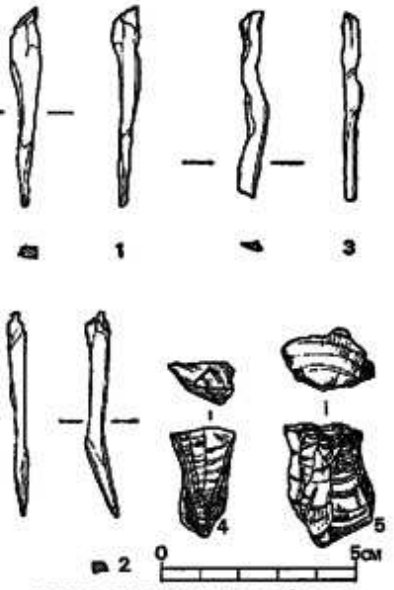
第22図　甲塚遺跡出土石器実測図　　(縮尺 1/2)

は，ここに遺構，遺物の認められないことから，一旦放棄されたらしい。そしてその後再び，ここは幾度か人々によって開拓されている。ために縄文晩期の遺構は漸次削平，消滅していって，わずかに小型の竪穴を数ヵ所に残すのみとなったと推測される。

また，北九州の縄文晩期は何期かに細分されていて，口縁部近くに粘土紐をめぐらし，刻み目をほどこすのは，晩期の新しい時期に多いといい，また，波状の口縁，沈線文をめぐらす例は比較的古い時期に多いようである。これら新旧両種の特色が本遺跡出土土器に認められる。あるいは，層位，竪穴別に時期が異るのかもしれないが，細かな時期については今後の検討の

結果を待ちたい。

石器　第3地区竪穴，第1地区Ⅱ号竪穴から完形土器をはじめ，ややまとまった土器を出土したほかは，土器類はほとんど小さな破片であり，量も乏しかった。遺跡が後世の耕作その他で攪乱をうけ，もろい土器は破損してしまったためであろう。しかし，土器類の出土が乏しいにもかかわらず，本調査でえた黒曜石の剥片，石器類の量は意外のほか多かった。後世の開拓にかかわらず，もろい土器に対して石器は原型を保って散在したため，あるいは元来，多量の石器類が使用され，製作されていたためと考えられる。



第23図 甲塚遺跡出土石器実測図
（縮尺 1/2）

原石　採集した石器ならびに剥片類の石質を通して，最も量的に多いのは黒曜石で，文字通り黒色透明のもののほか，若干灰色の黒曜石を混えている。つ縁泥いで，片岩質，サヌカイト製（安山岩質）の石器が認められ，赤黄味をおびた瑪瑙質の石器も1点出土している。また，黒曜石の原石の形状をうかがえるものが若干採集されており，これらには径の短い円礫に多少打痕のあるもののほか，幅4～5cm位の方柱状ないし角礫の黒曜石の原石がある。円礫は小形で数少いのに比べ，角礫形の方が数も多く認められる。また黒曜石の剥片のうちにも，角礫の自然面をそなえる例が目立ち，4～5cmの原石の厚みを示す例が多い。

石核　このような黒曜石の原石からいかようにして石器類を製作していったか興味ある問題で，後述するようにかなり長い錐状の石器は，方柱状の原石を縦長に利用し，それほどの長さを必要としないものは横剥ぎに活用していたのであろう。原石，剥片からの本遺跡での石器製作技術の細部の検討は今後行いたいが，石核と認められるものも4個認められ，うち2個をPL．9．挿図第23図—4.5に示した。共に長さ3cm前後で，一面にプラットホームを作り，一方向から剥片をとっている。

剥片・石刃　前記のような黒曜石の原石から製作した剥片の中には，不規則な形の剥片の多い中で，長さ5cm前後のものが比較的多い。また，断面が山角形，ないし梯形で，側縁が中央の稜にそうて並行する石刃（Blade）の形態をとるものがあり，なかに，側縁に細部加工をほどこした例がある（PL．9—4）。

つぎに，剥片のうち特異なものに，非常に細かな例がある。PL．9—6に掲げたのがそれで長さ1.6cm，1.3cm，1.25cm，1.5cmで単なる剥片と考えられるもののほかに，細石刃として使用されたと思われるものもある。また，このような細剥片のほか，断面が三角（第23図—

3）ないし，四角（PL. 9—7）の細長い形を呈するものがある。こうした剝片は第1地区の第Ⅰ号竪穴より一例出土したほか，第Ⅱ号竪穴より出土した。とくに後者の竪穴からは，尖端部が擦りへった錐状の尖頭器が5本出土している。第22図—3にみる細長い剝片は，かかる石錐製作に関連すると推定してよかろう。

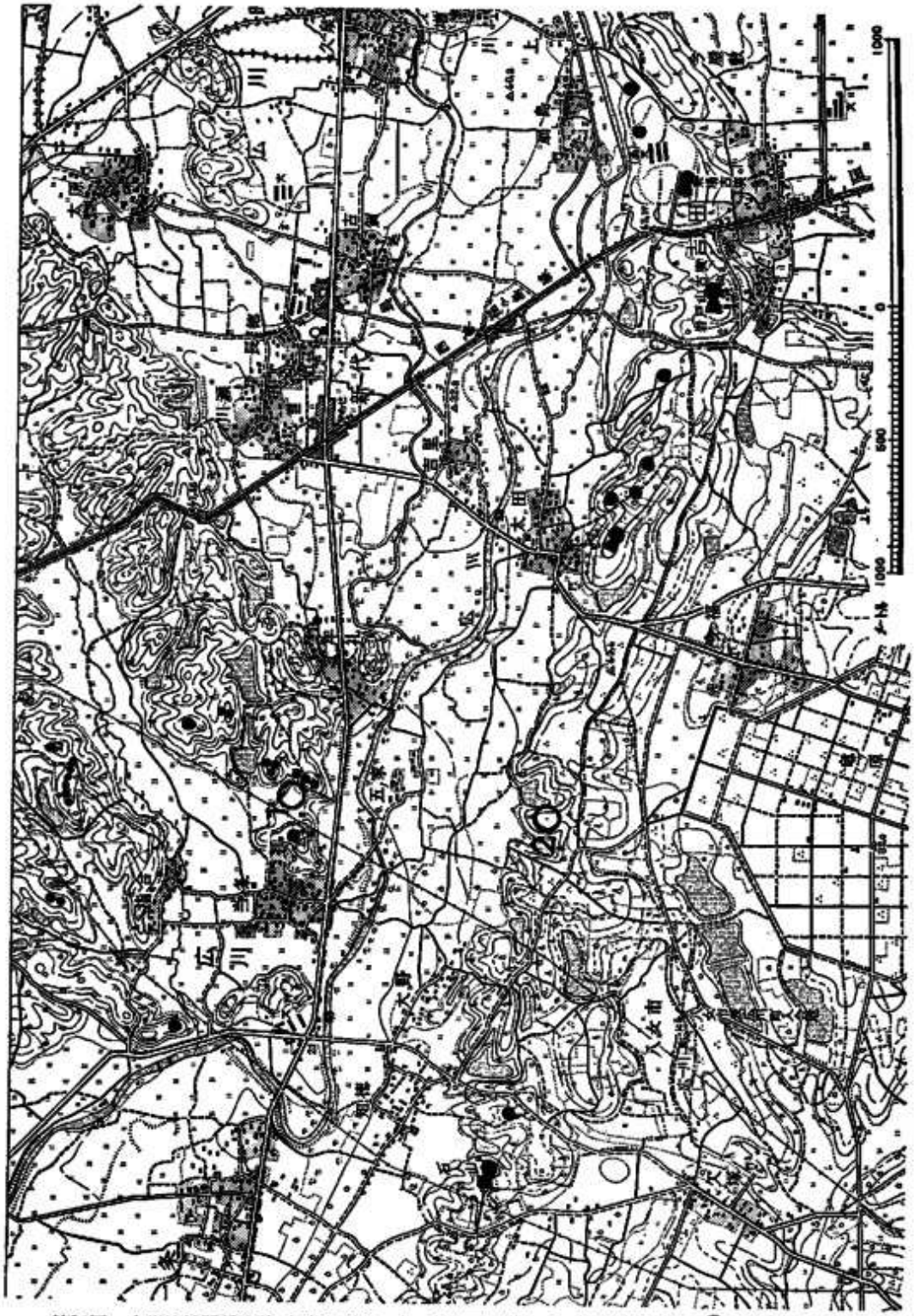
黒曜石製石器　不定形の剝片のうちには，なんらかの目的で，側縁に細加工をほどこした例がかなりある。それらは一応措いて，既述の石刃を除いて定型的な石器と認められるものをあげると，石鏃，掻器，尖頭器がある。石鏃は計7点出土し，うち黒曜石製は5点，サヌカイト製2点で，かえりのあるものと，平根のものとがある。また，製作過程のものが2点ある。ともに，黒曜石製で剝片の打撃面(プラットホーム)を尖頭部としている。掻器と認められる例はかなりの数に達するが，PL. 9—2に幾例か示した。剝片の先端部を半円形に細加工して刃部としたもの，直線的に加工したもの，側縁に刃を作ったものなどがある。尖頭器にはいくつかの型があり，先述の細長い錐状尖頭器はもっとも特異な例である。第23図—1・2は5cm前後で比較的長く，PL.9—7に示すものは破片を除いて，一つは5.2cm，他は3.3cmである。いずれも先端部の擦りへっておるがとくに製作のためできた条痕ではなく，皮革その他柔い物質に対して尖頭器として使用しているうちに，これらの擦痕が生じたもののようである。また，これが第Ⅱ号竪穴から5本，縄文晩期の土器と一括出土したのは共存関係が確実で注意をひく。次に，PL.9—3に示す尖頭器のうち，上段の左端は断面三角形，一端を尖鋭にした尖頭で，長さが前述の錐に比較して短かい上，先端部に擦痕が認められない。上段中央の石器は断面梯形の剝片を両側から先端部にかけて細加工をほどこした長さ2cmの石器で，形は石鏃に近いが剝片の打撃面を基部にしている点が鏃と異っている。中段，下段の尖頭器は剝片の打撃面に対して反対側（中段右下段左）あるいは側縁（中央左，下段右）を細加工して尖頭部としている。

打製石器　小形の石器が主として黒曜石を原材として製作されているのに対して，サヌカイト，緑泥片岩などで大形の石器が製作されている。第22図—3は，第3地区竪穴出土の扁平な打製石斧で，緑泥片岩製である。この種の石斧は縄文晩期の遺跡からの出土が報じられ，農耕問題と関連して注目されている。本例で注意をひくのは，実測図に示した裏面が，刃部から約5cm位までが平らに磨かれた面をなし，原表面をとどめている点である。側縁の調整からみて打製石器と考えられるが，刃部の磨かれた部分が刃を作るために磨いたものか，あるいは使用の結果の摩擦痕であるのか明らかでない。もし前者と仮定すると局部磨製石斧といえよう。

第22図—1に示す打製石器は頂部に幅約1cmの水平な自然面を残したサヌカイト製の石器で北九州の縄文晩期の遺跡からしばしば出土の報告がなされている，いわゆる石庖丁型石器の部類に入るものであろう。このほか打製石器にはサヌカイト製で径2～3cmの円形掻器（第22図

—2）長さ6cm幅5cmの不定形の搔器と石鏃が2例出土している。

磨製石器　磨製石器には長さ約1cm，幅5.3cmの緑泥片岩製かと思える磨製石斧（第22図—4）と，石皿，磨り石とがある。石皿は第1区より1個，第3区竪穴中とより出土している。前者は，幅約20cm，厚さ約5cmの扁平は緑泥片岩を利用したもので，差しわたし10cm位の浅い磨り痕が両面にあり，後者は安山岩系統の石材で，もと幅30cm位と推定され，片面に幅20cmの磨り痕が残っている。こうした石皿に使用したと考えられる径12～13cmの磨り石が，かなり出土しとくに第1区Ⅱ号竪穴からは，破損しているが，ほぼ完形に復しうる磨石が出土している。（増田精一）



第24図　広川地域関係遺跡（1/25,000）　1. 広川平原遺跡 2. 広川赤坂遺跡　● 古墳　○散布地

第3　広川地域関係遺跡

白金山から源を発した広川は，三潴町で荒木川となり，久留米市内で筑後川に合流する。この広川をはさむように2つの帯状に長い丘陵が張り出している。すなわち，筑後将士軍談で詳細に記載されている岩戸山古墳・石人山古墳および亀の甲弥生遺跡を含む水縄山系の大丘陵である。

この丘陵の舌状部にそって各時代の遺跡が密集しているその中に広川赤坂遺跡が存在する。対岸は，耳納山脈の一群である白金山からのびた多数の舌状台地といった方がより明確になる。その舌状台地にも張り出し部ごとに遺跡が存在しており，その中に広川平原遺跡がある。この両遺跡間の距離は1kmである。付近には石人山・岩戸山・乗場古墳等の古墳群が3km以内に存在している。石人山と岩戸山の間の，ゆるい起伏の茶畑のなかを北から南へと貫くように九州縦貫道が通っていくのである。（副島邦弘）

1. 広川平原遺跡

(1) はじめに

1. 調査の経過

広川平原遺跡は九州縦貫自動車道予定路線の発掘調査第61地点で土師器散布地としてあげられていたところである。

発掘調査は昭和44年12月8日から12月19日まで実施した。調査員は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課技師　　柳田康雄

〃　　副島邦弘

なお発掘にあたっては福岡教育大学考古学研究会の光枝房敏・江浜明徳に，整理は福岡大学歴史研究会の山崎茂孝・水城一俊・桜井康治・磯部昭憲の諸君の協力を得た。

12月8日　発掘予定地の野菜の収穫が終っていなかったので，これを手伝うと同時に地区の設定を行なう。発掘のための借上面積が少ないので，道路予定路線と平行に借上地東端に基準線Aを引き，これと直交する線を引いて，A・B・C・Dの4地区に分け，交点を基準に第26図のように3mの方眼をくんだ。

12月9日　B区，C区のA線に添った地区のBA03，BA04で竪穴住居跡を発見する。これに北から1号，2号，3号と住居跡番号を付す。

12月10日　第1号および第3号住居跡は借上地外にかかるため調査できず，第2号住居跡のみほぼ全容を出すことができた。

12月14日　BA42に住居跡らしき土色の変化を確認し，掘下げを行なう。午後グリット西壁の断面図作成のため，壁の削りなおしを行なう。

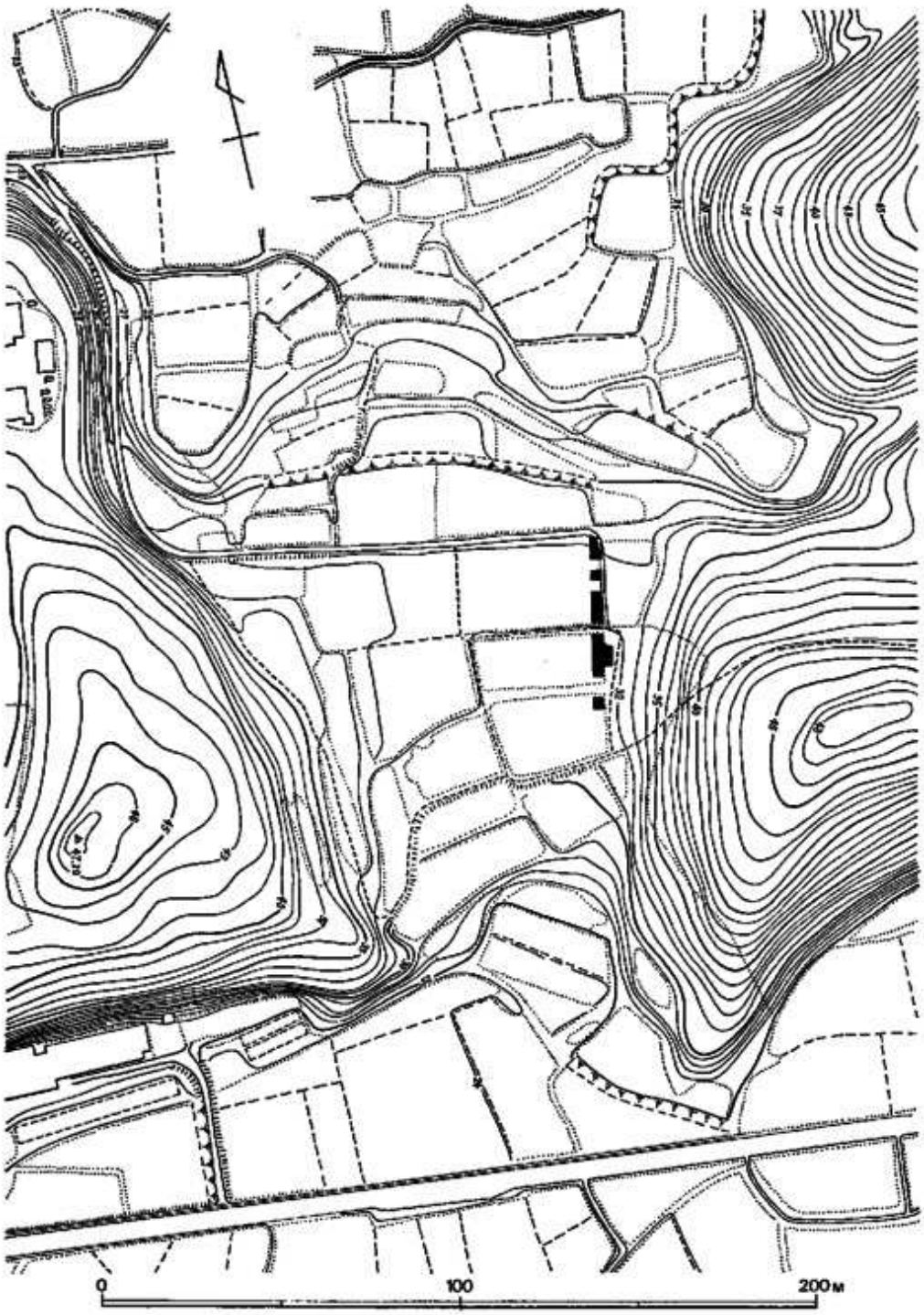
12月16日　発掘地域の水糸配りを行ない，平面実測と，実測の終った地区から遺構のレベルとりにかかる。

12月18日　実測の残りと，実測の終った地区の埋めもどしにかかる。

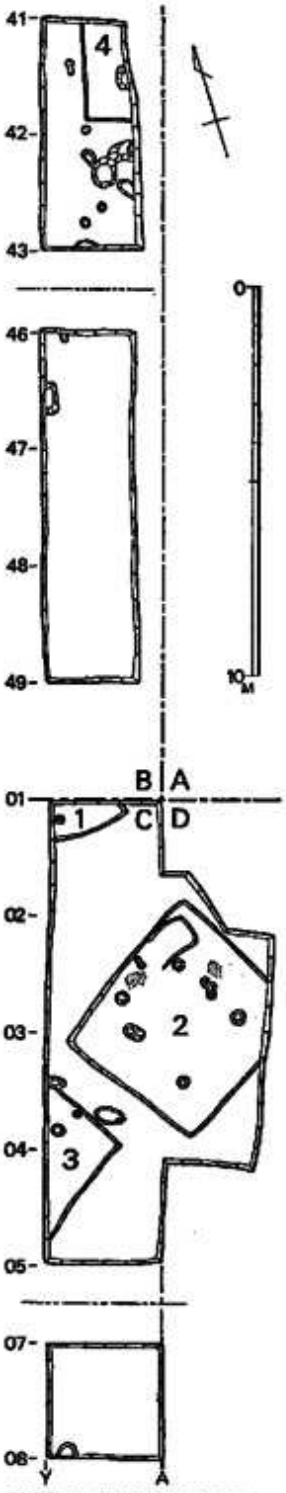
12月19日　埋めもどしを完全に終了し，本日をもって予備調査終了。

2. 遺跡の立地

広川平原遺跡は福岡県八女郡広川町大字広川字平原にある。広川町は筑後川および矢部川がつくる九州で最も広大な筑後平野の東に位置し，東半は水縄山系がしめ，南北は水縄山系からのびた低丘陵によって画された狭長な平地をかかえた地形的環境にある。



第25図 広川平原遺跡地形実測図



第26図　調査地域平面図
（縮尺 1/200）

遺跡は水縄山系からのびた低丘陵の先端近くの標高31mの微高地にあるが，東西は40～50mと高くなり，南北に開けたところである。八女市との境界となっている東西に長くのびた丘陵があり，一般に長峰丘陵とよばれているこの丘陵には筑紫国造磐井の墳墓として著名な岩戸山古墳や，5世紀中頃とされる横口式家形石棺をもった石人山古墳等多くの古墳がならんでいる。これと比較すると平原遺跡のある丘陵には大きな古墳はないが，直径5～20mの円墳が多数存在する。遺跡の東西両方の丘陵上にも古墳群があり，最も近い古墳は発掘地点から50m程のところにあり，遺跡との関係で重要である。しかしこれらの古墳のすべてが盗掘にあい，すでに消滅しているものも多いという。（柳田康雄）

(2)　先土器時代及び縄文時代出土遺物

1.　石　器　（図27・28）

検出された石器，剥片は約50点，このうち明らかに石器としての条件を具備しているものから，おもなものを取りあげて記載するが，その前提段階として本遺跡の層位を述べる。

層位　本遺跡の層位は4層にわかれる。

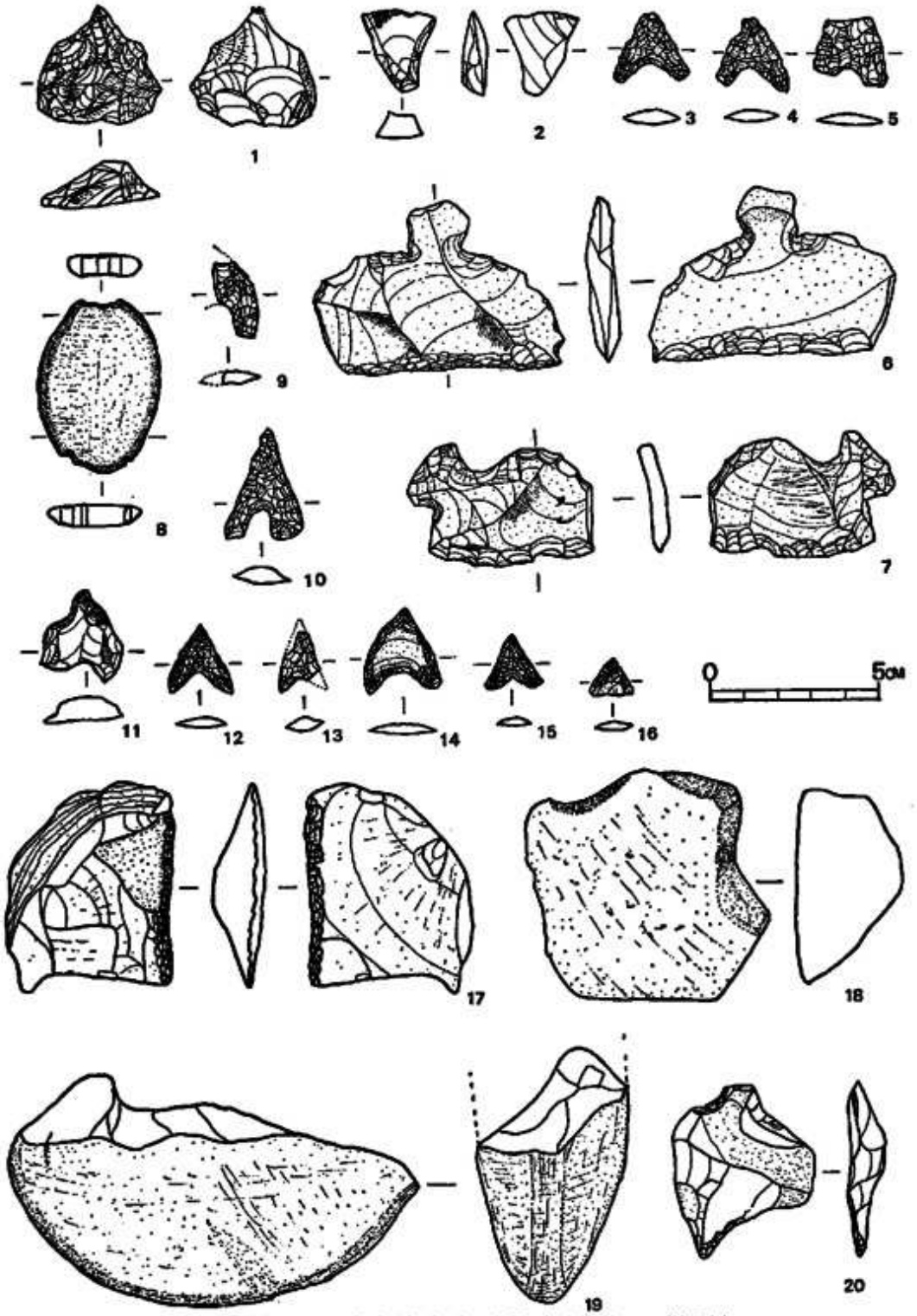
○第Ⅰ層　表土。いわゆる耕作土で，砂質のためサラサラしている。色調は暗灰褐色で，第Ⅱ層との堆積関係は整合である。堆積の厚さは20～40cmである。遺物を含んでいる。

○第Ⅱ層　色調は茶褐色で，十分に締まった感じで水分をふくみ粘質性を帯びベタベタしている。厚さは30～50cm内外である。遺物包含層である。

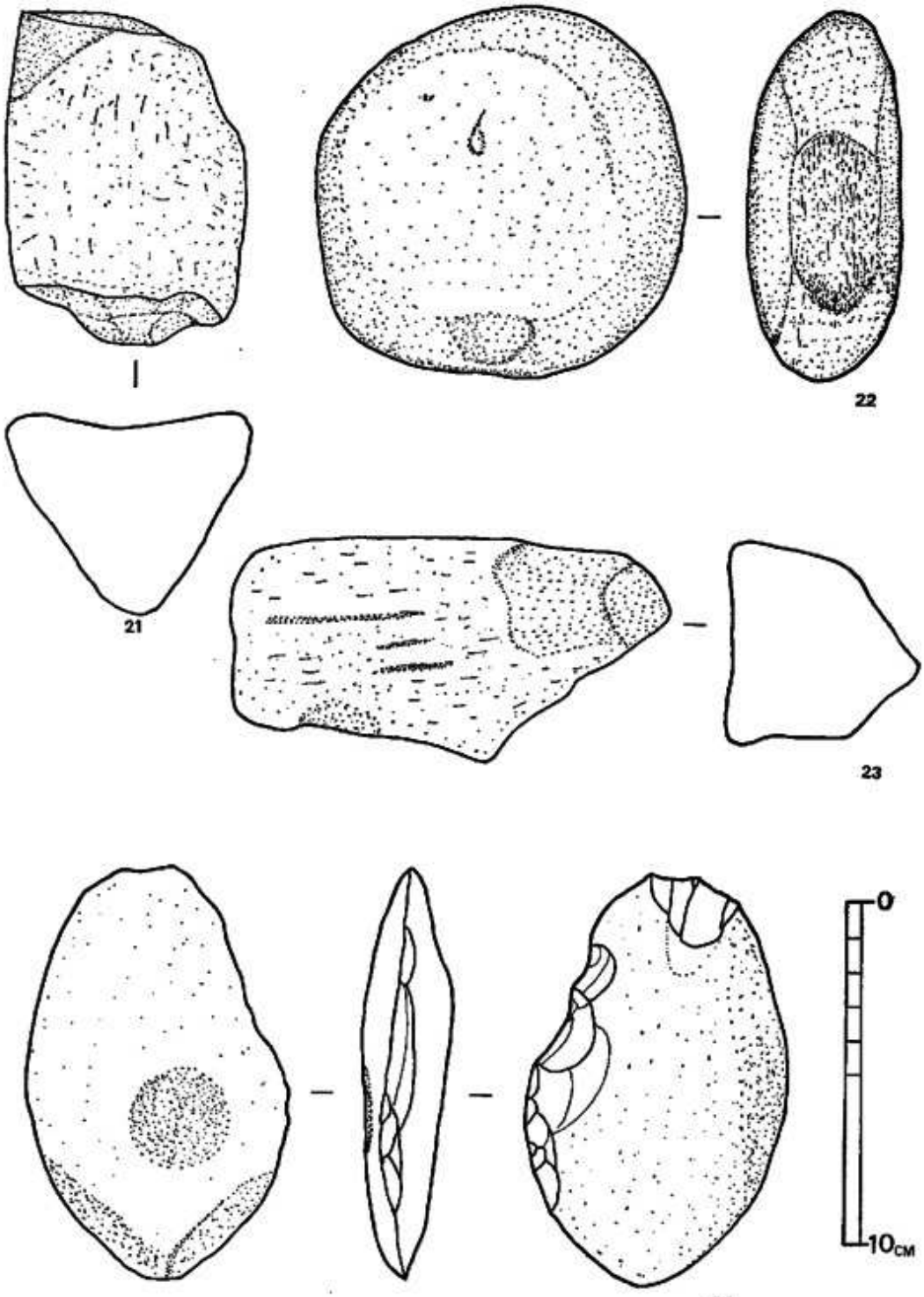
○第Ⅲ層　色調は黄褐色で，粘質土でしまっており，第Ⅱ層よりもベタつく，厚さ40～50cmである。これを切って住居跡が営まれている。

○第Ⅳ層　基盤。

遺物はⅠ～Ⅱ層に包含している。（第27図1～5，第28図21・23・24）までⅠ層出土，Ⅱ層の茶褐色土出土遺物は（第27図，第28図）のうち，Ⅰ層出土分を除いた部分である。



第27図　広川平原遺跡出土石器実測図　（縮尺½）



第28図 広川平原遺跡出土石器 (縮尺½)

また石器の形態的な分類は，掻器・台形状石器・磨石・石錘・石鏃・砥石でその他に剝片が存在する。

掻器　(図27—1・6・7・17・20・24)　石質はサヌカイトと黒曜石である。原面の一部を残し，側縁を刃部として使用している。6はサヌカイトを材料としてつまみを持った横型石匙である。表裏の先端に加工が加えられ刃部を形成する。刃部の角度は鋭角で，剝離は大ざっぱで刃部には細かく調整がほどこされている。風化度は高く，時期としては縄文時代である。7はサヌカイトを材料とした横型石匙で，刃部は両面から細かく加工が加えられ鋭角の刃を形成している。時期は6と同じ。17はサヌカイトを材料とし，原面の一部を残し，刃部には両面から細かく加工をほどこしている。いわゆるサイド・スクレイパーである。この形態は弥生前期にもみられるが，本遺跡では弥生式土器が一片も検出されず，また，風化の面からみて6・7と同時期と思われる。20はサヌカイト製で片面を大ざっぱに剝離をほどこし，それを刃部としている。表に直径1.5cmの凹を持っている。掻器というよりも凹石とした方がよいかもしれない。

台形状石器　(図27－2)　サヌカイトを用いた剝片をバルブ直下より截断して台形状に作りあげている。百花台遺跡の典型的な台形石器のように整った形ではないが細かい加工が認められる。

磨石　(図27—19，図28—22)　二点とも硬質砂岩で石皿とセットとして使用されたと推定されるもので，礫自体に研磨が行なわれて整形されたものである。22は手頃な扁平な河原石の両面および側辺に美事に研磨が行なわれて整形されたものである。19は半分に破損されたものである。

石錘　(図27—8)　漁撈具としてのおもりが一点出土した。扁平な長方形河原石を利用し，長軸の両端をうちかき紐かけの抉入状剝離を施している。その間に磨痕が走り，紐は対角線状に結んだものと推定できる。

石鏃　(図27—3～5，9～16)　狩猟具として重要な位置を占めたであろう石鏃は，本遺跡では11点であった。すべて無柄で抉り込みがしっかり施されている。14・15・16はPit内から出土している。16は三角鏃である。11は未加工品で製作過程を知るためによい資料となるだろう。石質はサヌカイト製が3・4・12・14・15・16で，他は黒曜石製である。時期は石鏃だけではいえないが，サヌカイト，黒曜石の風化度は高い。

砥石　(図27—18，図28—21～23)　円形ないしは角礫を利用したものであり，加工および使用痕は顕著である。18は側面を磨研しており，21は全面にわたって使用したものである。23は表面に3本の薄い溝を有している。石質は硬質砂岩である。

以上から石器だけをとってみると時期は先土器および縄文時代と考えることができる。

(副島邦弘)

2．縄文土器（図29）

本遺跡で採集された縄文土器片は16片であった。全部がⅡ層の茶褐色土から出土している。その内訳は押型文土器が13片，条痕文土器2片，撚糸文土器は1片であった。

押型文土器　楕円文11片，山形文2片である。楕円文の粒と山形文の刻みは大形のものばかりであった。文様の走行も多様で一定していない。胎土には相当の砂粒を含んでおり，焼成は余り良くない。色調は必ずしも一定していないが茶褐色や黒褐色のものが多く器壁の厚さは10mm前後である。

押型文土器の口縁部は3片であった。すべて外反すると思われる。口縁部内側に原体条痕（29図1）の施文されたものと，口縁部表裏に同一原体を施文した（29図9，12）ものとである。（アルファベットのAは原体条痕の幅を表示し，Bは原体の幅を示めす。）いわゆる原体条痕は大分県早水台遺跡のものと大差がないが，粒は一般的に大粒である。

1は表面に大粒の楕円が施文され，口縁部は外反し器面調整時の粘土の残片がコブ状に残ったものである。表面の楕円文と内面の原体条痕および横位の楕円文は同一原体で施文されている。2は口縁部に近い胴部破片で原体幅は15mmで施文のときのかさなりが見え，施文方向は斜行である。3は穀粒文に近い楕円で施文方向は縦位である。原体幅は10mmである。8は胴部破片で原体幅は12mmである。9は表面は斜行の山形文で内面に同一原体で横位の山形文を施文している。

図29—11，12は原体を押しびきしたものと思われる。12は内側にも施文されている。

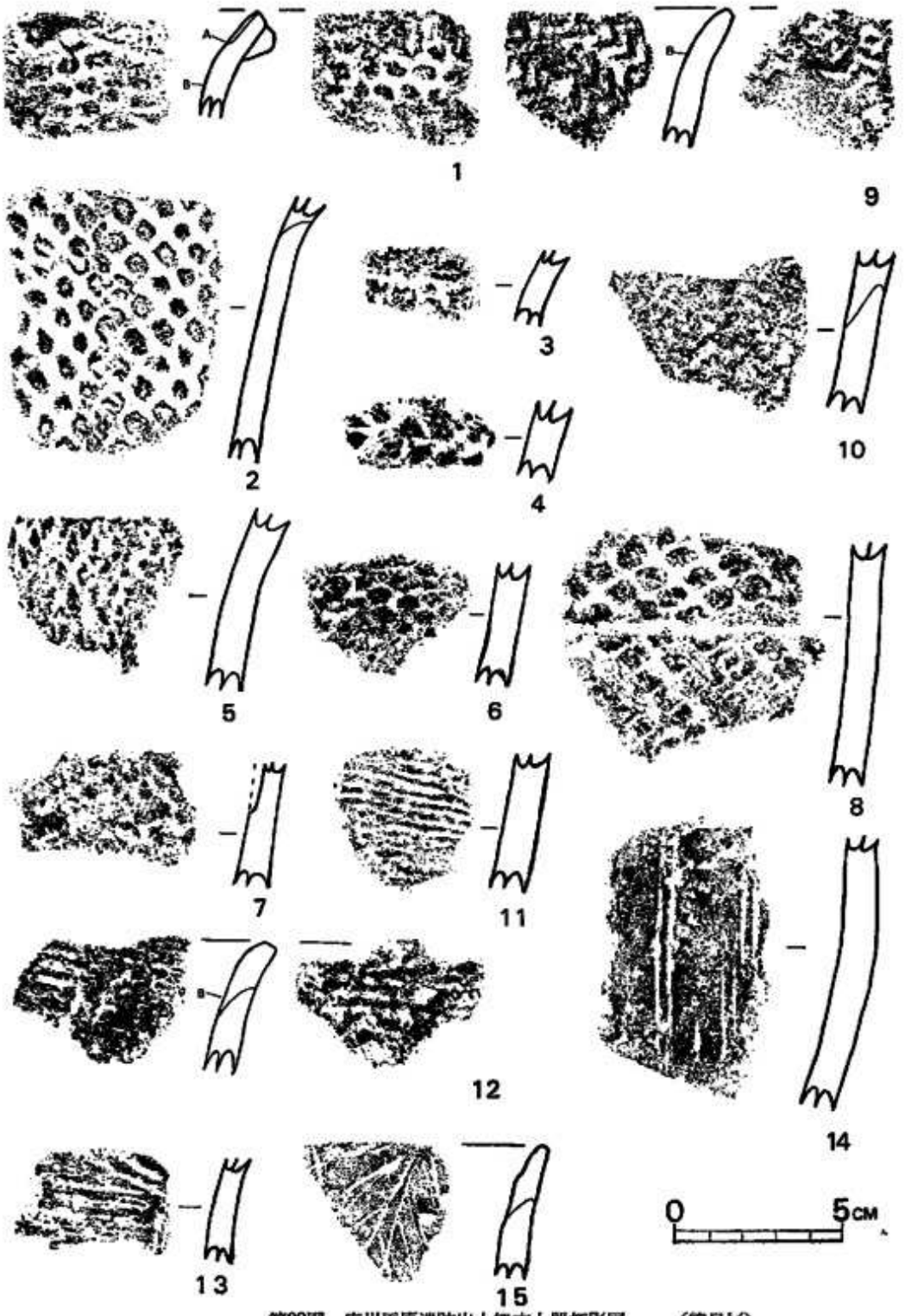
条痕文土器（図29—13，15）わずかに2片で，13は胴部破片であった。条痕は器壁全面に横位に施文されている。器厚，胎土，色調は押型文土器に類似する。僅かであるが胎土中に雲母を含んでいる。15は口縁部でやや外反する。条痕と言うより木葉痕みたいな感じである。器厚は10mmで胎土・焼成は良好で，色調は褐色である。中期あるいは後期のものと思われ，形式は不明である。

撚糸文土器（図29—14）僅か1片で，胴部破片であり，器形などは明らかにし難い。胎土には砂粒を含んでおり，焼成は不良である。器厚は11mmで，色調は灰褐色を呈している。また撚糸文はすべて縦に走っており，しかも撚りは一段のRと思われる。一部無文のまま放置されている。

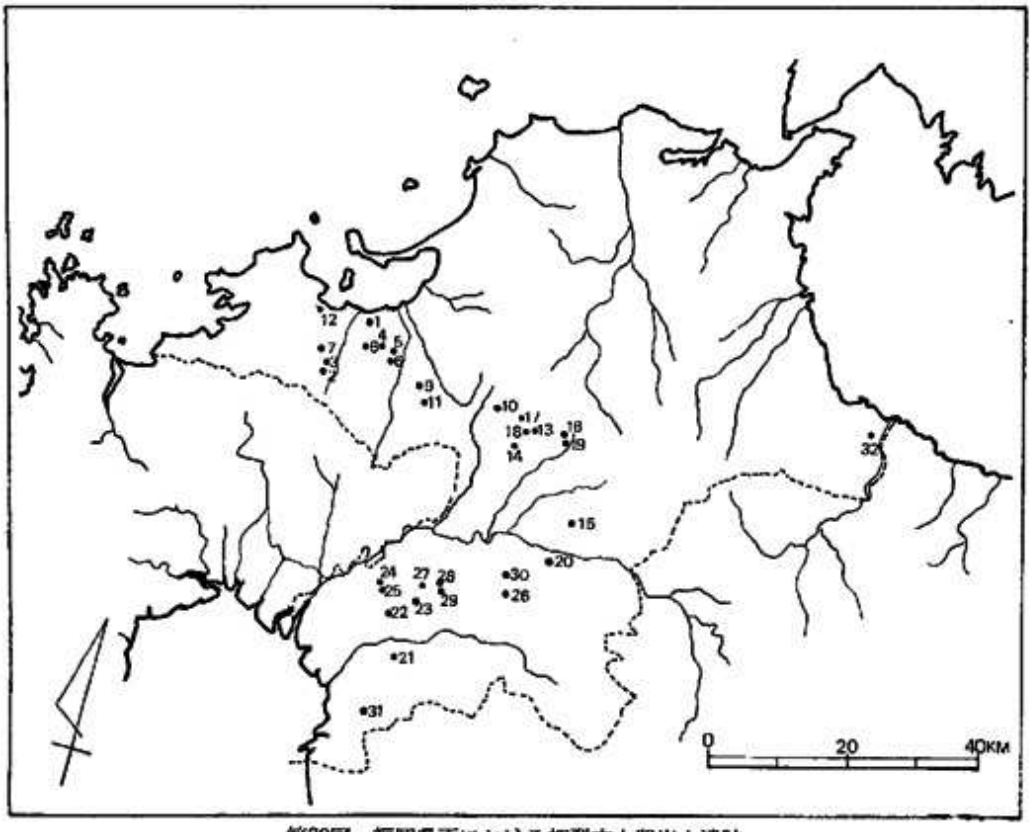
これらの遺物は全て巻き上げ手法にて作られている。巻き上げの部分が理解できるものは断面に示した。

小　結

九州の押型文遺跡は大分，熊本，鹿児島に多く，福岡県は他の県よりも比較的に少なく，まとまって出土した遺跡は少ない。現在32ヵ所で断片的に発見されている。



第29図　広川平原遺跡出土縄文土器拓影図　　（縮尺1/3）



第30図　福岡県下における押型文土器出土遺跡

	遺跡名	所在地	備考
1	大濠	福岡市大濠	九州古文化図鑑 第一輯
2	金武	〃 金武	福岡市教育委員会 教示
3	野方	〃 野方	肥山正秀氏蔵
4	中尾	〃 中尾	福岡市教育委員会 教示
5	野多目	〃 野多目	福岡市教育委員会 教示
6	柏原	〃 柏原	福岡市教育委員会 教示
7	羽根戸大原	〃	埋蔵文化財遺跡地名表福岡市教育委員会.1969.
8	五ヶ村池	〃 七隈五ヶ村池	相戸太氏蔵
9	上大利	筑紫郡大野町上大利	九州古文化図鑑 第一輯
10	下石仏	〃 筑紫野町下石仏	九州考古学2 P11～P12
11	四郎五郎池	〃 四郎五郎池	「都久志」筑紫中央高校郷研雑誌
12	宇美神社	糸島郡前原町長垂	大神邦博氏 教示
13	峯	朝倉郡夜須町大字小田字峯	大濠高校蔵
14	向福島	〃 字向福島	九州考古学33・34 P14～P17

15	拝塚	〃 朝倉町石成	『埋づもれていた朝倉文化』1969. 朝倉高校史学部編
16	馬田	甘木市馬田町大字馬田字上原	九州アカデミー第1号 P7
17	田中原	〃 三奈木町字田中原	〃
18	〃	〃 三奈木小学校	〃
19	屋形	浮羽郡吉井町屋形	筑後地区 先史遺跡地名表 福岡教育大学編
20	富永	〃 富永	〃 福岡県報第9輯 P96～99
21	上ノ原	八女郡立花町上ノ原	〃
22	鯉野谷	筑後市前津鯉野谷	〃
23	裏山	〃 上代島裏山	筑後市教育委員会「裏山遺跡」
24	高江	〃 高江集地	筑後地区 先史遺跡地名表 福岡教育大学編
25	長崎	〃 長崎	〃
26	広川平原	八女郡広川町	本遺跡
27	下山	八女市岩崎下山	筑後地区 先史遺跡地名表 福岡教育大学編
28	立山	〃 忠見区立山	〃
29	今福	〃 今福	〃
30	甲塚	久留米市藤山町	本年度12月調査
31	荒田比	大牟田市倉永字荒田比	本年度8月調査
32	垂水	築上郡太平村垂水	渡辺正気氏 教示

本遺跡出土の押型文土器は口縁部が外反し，胴部に幾分ふくらみをもって底部に至る器形になるようである。

表面の文様には大部分が大形の楕円文でかなり粗雑に施文されている。裏面には早水台式土器に特徴的な原体条痕が施されている。

本遺跡出土の押型文土器は早水台式に比較して，厚手であること，文様が一般的に粗大な楕円文であること，口縁部が外反することなどから，少なくとも早水台式土器より時期は下るものと考えることができる。撚糸文が伴っていることを考え合わせても早期末で，田村式に併行できるものと考えたほうが妥当である。

しかし，本遺跡の押型文の時期は土師器の時期に攪乱されたもので，この遺跡のどこかに押型文の遺跡がプライマリィの状態で眠っていることを思い浮べ，何時の日にか発掘されんことを望む。（副島邦弘）

(3) 古墳時代の住居跡

第1号住居跡

CAO2に土色の変化があり，表土直下から遺物が割合多く発見された。しかし，表土下の

茶褐色粘質土に掘り込まれている遺構のプランは明瞭でなく，確実に住居跡としての形はつかめなかった。遺物が発見される付近は茶褐色土であり，他の住居跡の土のようにさらついたものであるが，区別のつきにくいものであった。この中でピットは1つ発見された。北側が畦道であるため完全に調査することができなかったので，買収後の調査に期待する。

出土遺物（第34図1～10）

出土遺物で器形の復原できるものは土師器のみで，須恵器は甕等の小片であった。

1の坏は底部からの曲線とたちあがりとの間に段を有し，蓋うけの形をなしている。須恵器の影響を強く受けたものである。器面は，摩滅がひどいが，わずかに横なで調整の痕を残している。

2・3は高坏脚部であり，2は外面が縦に箆で削られ，陵線を残す。脚部外面と坏底部内面は丹塗で，脚部内側には黒漆様のものが塗付されている。煤のように後で付着したものではないようだ。3は大きく開く脚で古い形式を残している。脚端はわずかにはねあがりぎみで，内面は箆削りである。

4の小形甕は胴部と口縁部の変換点が割合はっきりし，角がつく。摩滅しているので明瞭ではないが，胴部内面は箆削りらしき痕跡がみえる。

5の甕は胴部からゆるく頸部を思わせるような曲線で，外反する口縁に移る。器面は内外面とも横なで調整である。

6も5に割合近い器形をもつもので，内外面とも横なでが行なわれ，胴部は縦に刷毛目がつけられたらしい。

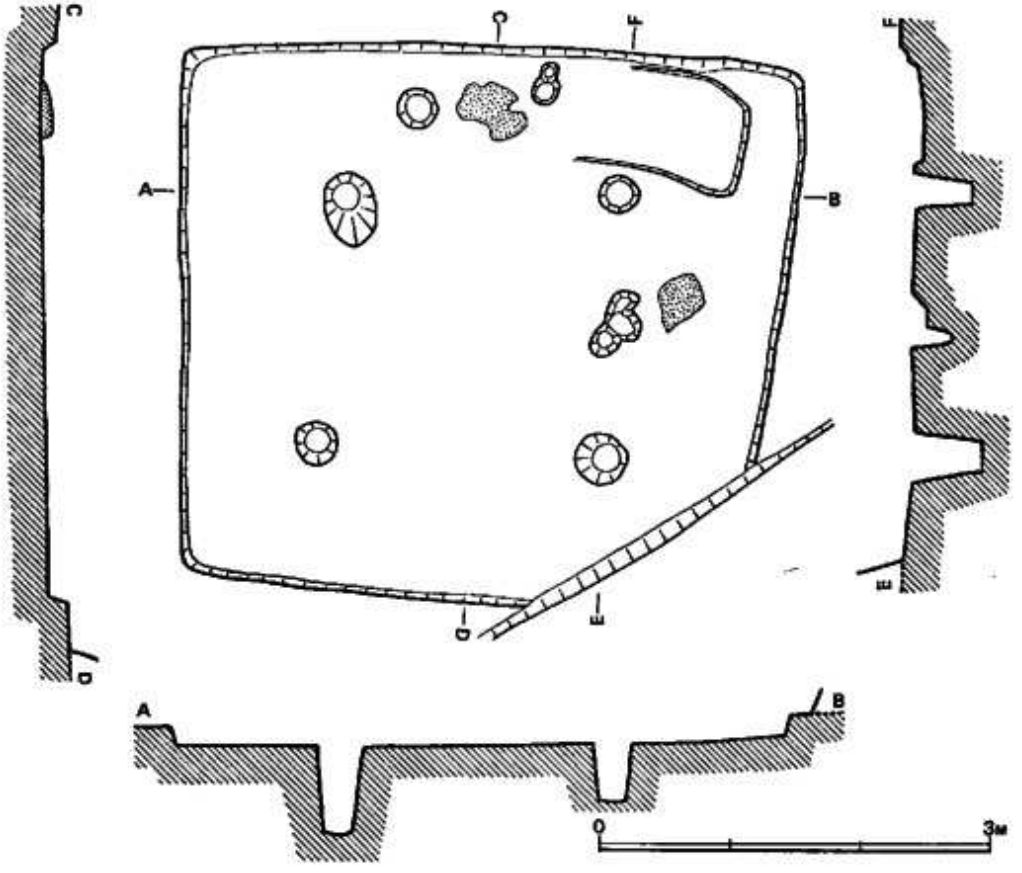
7の甕は壺形土器といってもよいようなもので球形に近い胴部に頸がつきそのまま口縁部となる。胴外面は箆削りの痕跡があり，この上にまたうすく刷毛調整の痕が残っている。内面は斜めに箆削りが行なわれている。頸部外面は横なで調整であるが，内面は不明。

8は甑と思われるもので，張付の把手を有する。外面は不規則に刷毛目調整が行なわれ，内面は下方から斜め上に箆削りが行なわれている。この種の把手が最も多かったが，9のような細手の把手もある。

10の椀は摩滅しているが，外面に縦の刷毛目を残している。鉢状の器形をなすものであろう。（柳田康雄）

第2号住居跡

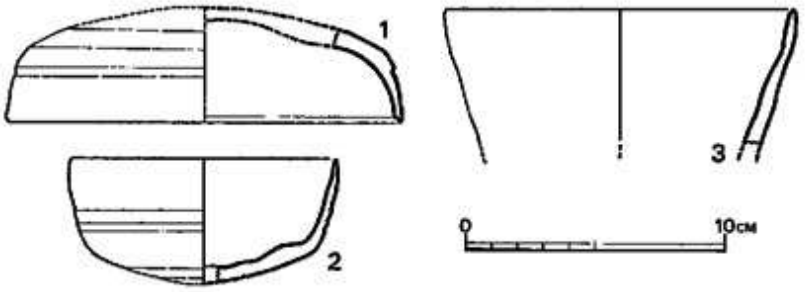
CAO3とCAO5に竪穴住居跡が西側半分発見されたのでDYO3，CYO4へ拡張したが，柿の木のため住居跡の東角を掘り出すことができなかった。今回の調査でほぼ全容を発掘



第31図　第　2　号　住　居　跡　実　測　図（縮尺1/60）

できたのはこれのみで，北西—南東径4.3m，北東—南西径4.6mの大きさである。北西側の一辺が，南東側の一辺より長く，平面プランは台形である。住居跡は表土下の茶褐色粘質土層中に掘り込まれた壁の高さ約15cmの浅い竪穴住居跡であった。柱穴は主柱となるものが4本あり4本とも壁から柱中心までほぼ1.2mの位置にある。柱間は柱中心距離でそれぞれほぼ2.1mの間隔である。柱穴の上端径は30～40cmで，埋土の状態から径約15cmの柱であったであろうことが推測された。その他小穴はあるが何であるか不明。竪穴内の壁に近く2カ所焼土のかたまりが発見され，これが炉の役目をはたすものであろうが，両方ともに床面を掘りくぼめたものでなく，床面に直接焼土ががのっている。北西側のものは粘土が堅く焼締った状態であるが，北東側の焼締は焼締っていない北側近くに北西—南東0.8m，北東—南西1.3m以上，深さ10cmの長方形の掘りこみがある。竪穴内は粘りのない茶褐色土が詰っていたが，長方形の掘りこみの中とこの付近は茶褐色土に黄褐色土が多く含まれていた。

遺物は土師器と須恵器の小片がほぼ全面に散布するのみであった。



第32図　広川平原遺跡出土須恵器（縮尺1/3）

出土遺物（第32図1・2，第34図11～15）

須恵器　器形の復原できるものは第32図1・2の2片のみであった。1は坏の蓋で小片である。天井部から胴部の変換線が明瞭なもので，口縁内側にも段を有する。天井部はヘラ削りで，その他は横なで調整が行なわれている。

2は坏身で径10.3cmの小形である。胴部に沈線状の段を3本有する。底部はヘラ削りで，他は内外面とも横なで調整である。

土師器　11は径19.7cmの坏状のものと思われるが，大形であることから高杯である可能性が強い。口縁のたちあがりは外反ぎみで肉もうすい。小坏で器面も摩滅しているので器面調整は不明であるが，きめの細かい胎土である。

12は小形甕の口縁部の小片である。口径12.3cmで胴部から直接外反する口縁ではる。口縁内外面は刷毛による横なでで胴部外面は縦に刷毛目が残っている。

13は坏の身であるが，器形は復原できる。蓋うけはめだたず，たちあがりも内すぼまりとなっている。胎土はきめ細かく，横なで調整が行なわれ，その上から内外面とも煤とは違った黒漆様のものが塗布されている。

14・15は椀であるが，14は口径15.3cmで15に比較して大きいが浅い。15は球体を半分にしたような曲線をもち，底部はうすくなっている。14は器面が摩滅しているので不明であるが，5は内外面全体に丹が塗布され，篦磨きの兆候がみえる。（柳田康雄）

第3号住居跡

CA04，CA05に土色の変化で，竪穴住居跡らしき2辺を発見したが，西側のCB04，CB05は道路用地外であるため調査できなかった。またこれは深さ6cm程しかなく，ピットも柱穴らしきものがないため竪穴住居跡とするのは疑問である。北東壁2.1m，南東壁3.1mを確認し，内側にピット2，北東壁に1，外側に1つを発見したが，これらが直接関係あるかどうかは不明である。

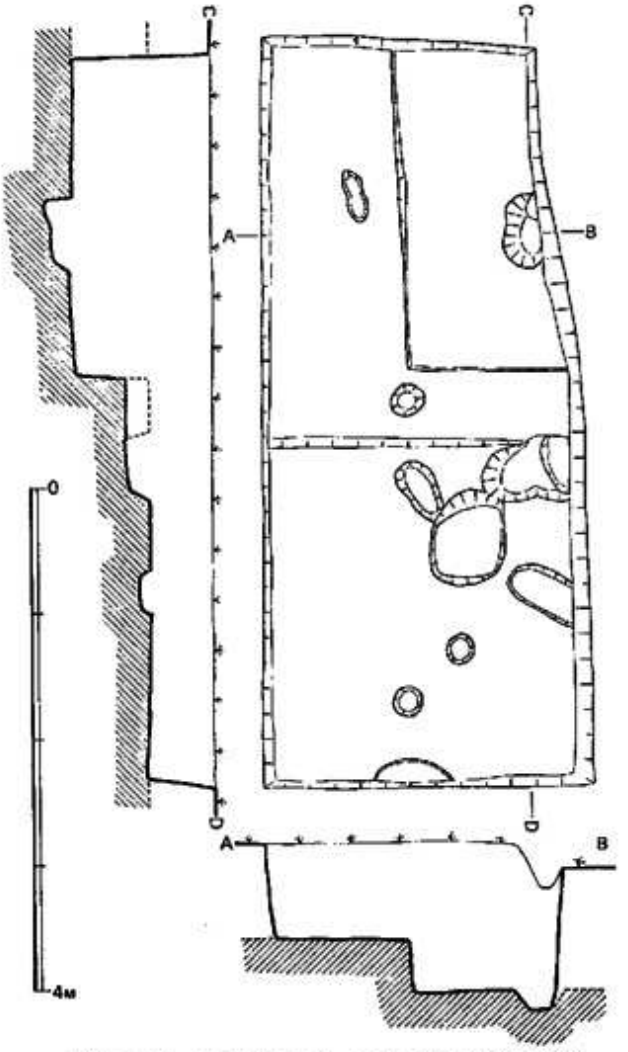
出土遺物（第34図16）

遺物は須恵器，土師器の小片が発見されたが，遺構の時期を決定するようなものはなかった。16は甕の口頸部であるが，これ全体を口縁部と見てもよいようなもので，頸部らしきなごりが少しある程度のものである。（柳田康雄）

第4号住居跡

ＢＡ42に竪穴住居跡を発見し，これを第4号住居跡としたがＢＡ41とＡＹ42が農道であるため調査できなかった。竪穴は表土下の茶褐色粘質土に掘こまれて，西壁2.5m，南壁1.3mを確認した。壁は垂直で，高さ45cmの深い竪穴住居跡である。竪穴内にピットが1つあるが半分しか掘れないので柱穴であるかどうか判明しない。竪穴外にもピットがあるが，住居跡との関係は不明。

遺物は土師器と須恵器の小片が小量発見されたにすぎない。

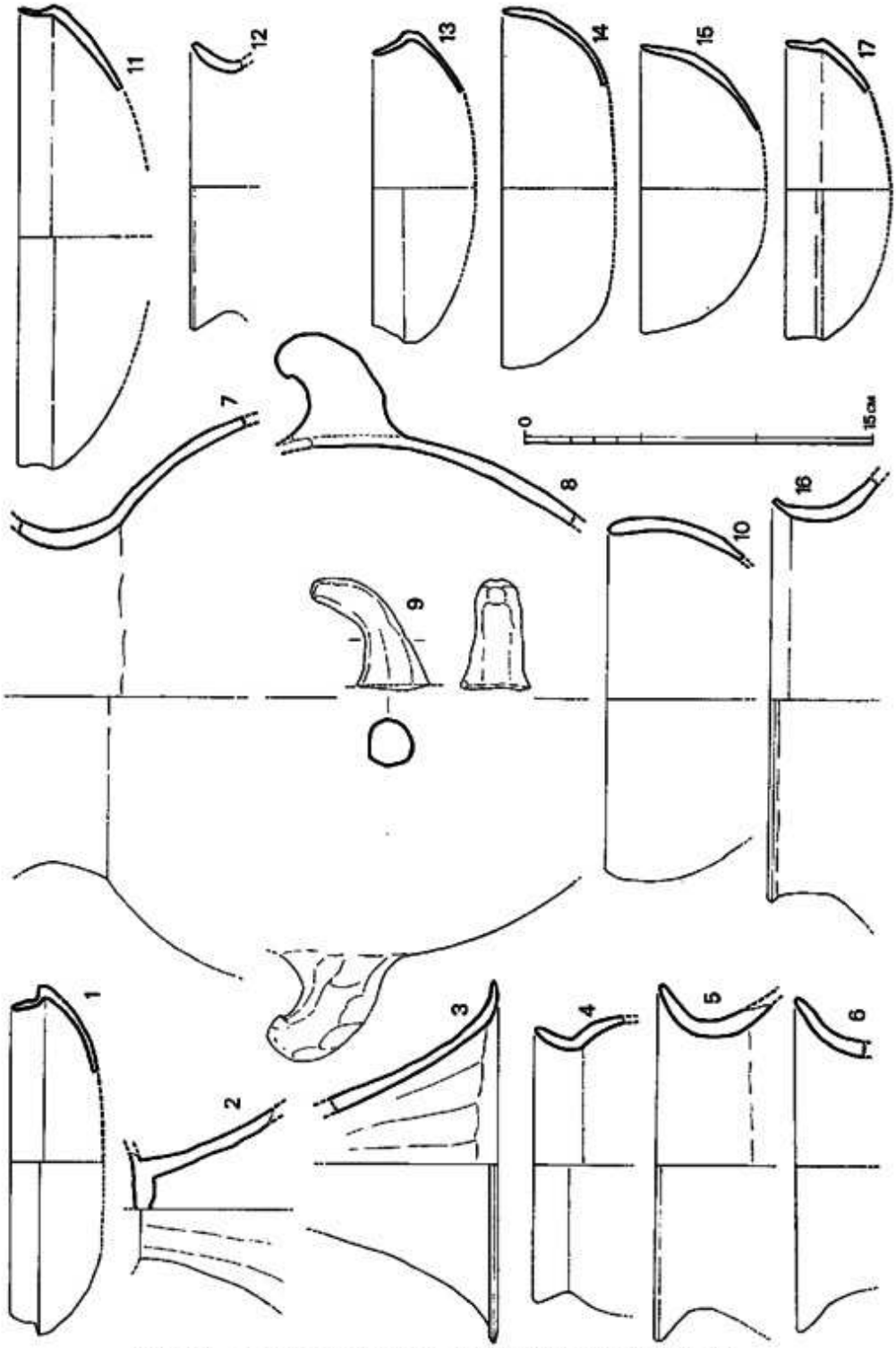


第33図　第4住居跡付近実測図（縮尺1/60）

出土遺物（第32図3，第34図17）

須恵器　3は長頸壺の口頸部と思はれるが，口径13.4cmの大きなものである。外面には横に直線の櫛目があるが，下方ではわずかに波状を呈する。内面は横なで調整である。

土師器　17は杯身の小片で器面は摩滅している。蓋うけというよりも須恵器でいう蓋の天井部と胴部の変換点に段がついた感じのものである。（柳田康雄）



第34図　広川平原遺跡出土土師器実測図（縮尺1/4）

(4) おわりに

今回の発掘調査は遺跡の性格を知るための予備調査で，調査面積も少なかったが，予想以上の成果をあげた。平原遺跡は土師器散布地としてあげられていた遺跡であったが，発掘調査にあたって，黒曜石やサヌカイト片も散布していることを確認した。

先土器時代および縄文時代の確実な遺構を発見することはできなかったが，発見されたピット群も広範囲に調査すれば，確実なものが得られるであろう。

古墳時代住居跡も完全に近く調査できたのは第2号住居跡のみで，遺物の発見も少なく確実に住居跡にともなう土器が小片であるため時期の決定をしにくいが，須恵器の坏蓋にⅢ期A[1]のものがあり，さらに量的に多い土師器では第1号住居跡の高坏や4の甕のように古い形式を残すものがあること，2・13のように黒漆塗らしきものは糸島郡前原町西堂古墳[2]，岩戸山古墳[3]，朝倉郡夜須町松延鷲尾塚古墳[4]，同三輪町谷6号墳[5]，甘木市立石町大岩南部1号墳[6]のようにⅢ期，あるいはそれ以前の須恵器と共伴していることから九州で土師器編年が確立していない現状であっても，これらの土師器が須恵器のⅢ期平行のものであることはいえるようである。したがって，住居跡の年代は須恵器のⅢ期から新しくても表土で採集されたⅣ期の須恵器の時期のもので，6世紀後半をあてるのが適当かと思われる。しかし，この集落がどの期間存続したかは，今後の調査を待たなければならないだろう。遺跡の東西の丘陵上には横穴式石室と思われる後期古墳群があるのでこれらとの関係も重要である。　　（柳田康雄）

註 1　小田富士雄「塚ノ谷窯跡群―Ⅱ筑後における須恵器の編年」（八女市教育委員会・昭和44年）
2　昭和44年5～6月に博多井筒屋で開催された「伊都国王墓展」に展示されていたもの。
3　古賀寿「筑後八女市岩戸山古墳の祭祀用土器」（九州考古学7・8）
4　柳田康雄「福岡県甘木大岩南部1号墳出土の土器」（九州考古学22）
5　柳田康雄「朝倉郡三輪村栗田谷第6号墳調査報告」（福岡県立朝倉高校史学部報10）
6　柳田康雄「福岡県甘木大岩南部1号墳出土の土器」（前掲）

2. 広 川 赤 坂 遺 跡

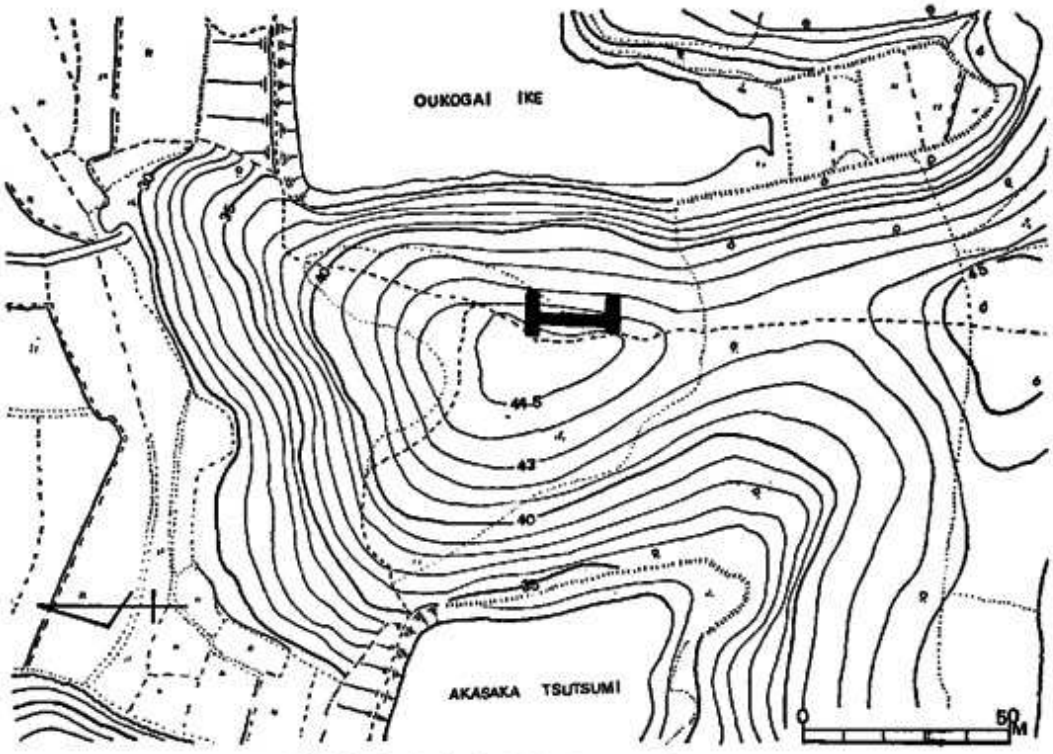
1．位　　置

地籍は八女郡広川町字太田逢返り39—2，3番である。通称広川赤坂という。

広川町と八女市の境界に存する遺跡で，舌状台地が北の方向にはりだし，その鞍部に位置する。本遺跡を狭むように，赤坂堤と逢せ返池があり，展望は北にひろがっている。遺跡の範囲は50m×50mで，現在小松を主体にする雑木密集地である。

しかしながら遺跡そのものは，過去果樹園造成や茶畑などによってくずされている。

本調査は東側の斜面を調査した。



第35図 広川赤坂遺跡地形実測図

2．調 査 経 過

広川赤坂遺跡発掘調査は昭和44年12月11日から昭和44年12月15日まで行なった。

12月11日　昼，発掘地点を設定。

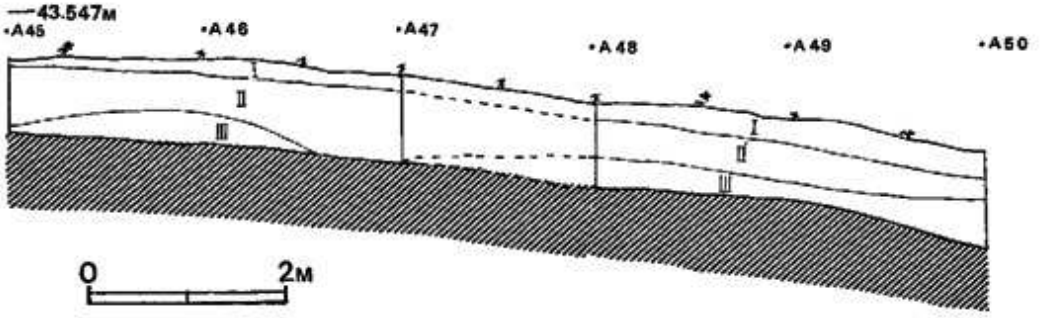
12月12日　小雪，伐採後，トレンチ設定。遺跡の傾斜にそって2×10m，2×8mをメーントレンチとし，傾斜に平行して2×20mのトレンチを結合させた（図35）。発掘開始。

12月13日　雪，遺構の検出をはかる。Ⅱ層褐色土層からchips 1点，一部深掘する。

12月14日　晴，地形測量。深掘した層位の検討をする。発掘区全域に遺構面がないことを確認し，遺物採集をする。写真撮影。

12月15日　晴，うめもどし，本遺跡発掘調査終了。

3．層　　位



第 36 図　層　　位　　図　　(縮尺1/80)

本遺跡の層位は4層にわかれる。

Ⅰ層　表土。厚さ10～30cmで傾斜にそって堆積している。色調は暗黒褐色，土質は腐植土が混った砂質土で，小松の根によって締った感じがするが，そのものはパサパサしている。

Ⅱ層　褐色土。厚さ40～60cmである。粘土質を帯びて，ベタベタした感じである。遺跡の頂部では露出している。この層から黒曜石のchipsが出土した。

Ⅲ層　礫層。厚さは約20～30cmで，砂岩質のこぶし大から頭大の礫をふくんでいる。スコップがたたない。

Ⅳ層　基盤。

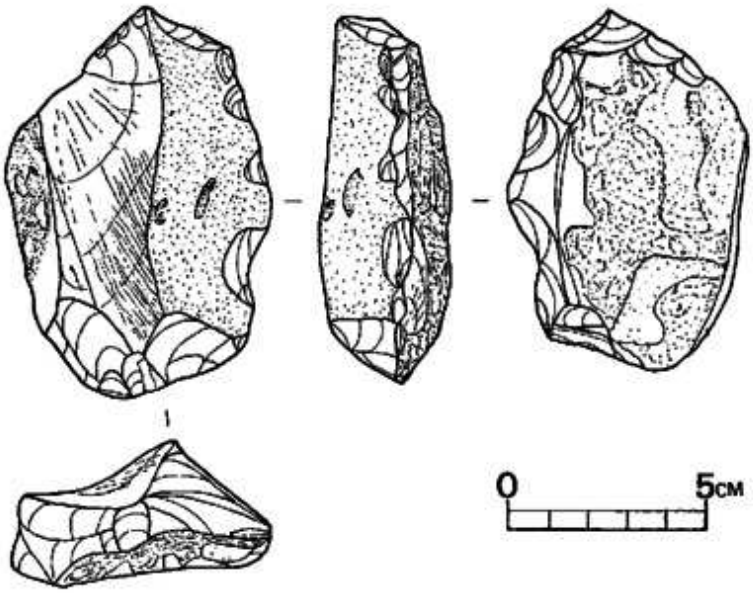
4．遺　　物

整理の結果，chipsのほか，石器と思われるものは一点である（図37）。

石質は珪岩で表裏両面に原面を残しており，角礫を素材とし，その一端に両面からの剥離をくわえて刃部としたものである。

刃部の風化度もよい。しかしながら，疑わしいところは，左端の剥離角度が∠Rをこえている。打角からみて技術的にもむずかしい角度を持っていることが大きな疑問として，ひっかか

ってくる。石器の形態からみると，旧石器時代の chopperである。



第 37 図　広川赤坂遺跡出土石器実測図（縮尺½）

第4 粕屋地域関係遺跡

第38図　粕屋地域遺跡分布図
1. 鴻臚丁遺跡　2. 鴻臚丁瓦窯跡　3. 鴻臚丁廃寺

駕　輿　丁　遺　跡

第 1　はじめに

1. 調　査　の　経　過

駕輿丁遺跡は九州縦貫自動車道予定路線の第3地点の遺跡で，駕輿丁廃寺東側の谷間の須恵器散布地としてあげられていたところである。

発掘調査は昭和44年11月1日から11月5日まで実施した。調査員は次のとおり。

福岡県教育委員会文化課技師		西谷　正
〃	〃	柳田康雄
〃	〃	副島邦弘

なお，出土品整理にあたっては，福岡大学の山崎茂孝・水城一俊・桜井康治・肥山正秀・磯部昭憲，および福岡女子大学の田原真理子・江藤信子の諸君の協力をえた。

11月1日　発掘前に遺跡の写真撮影を行なう。道路センター杭から東1m離して幅3mのトレンチを道路にそって設定。北端では地表下約20cmで地山の白色粘土層にあたり，遺構は発見できない。トレンチの中央付近は約1mの最近の整地層があり，この下に瓦・須恵器・土師器を多量に含む灰黒色粘土層がある。

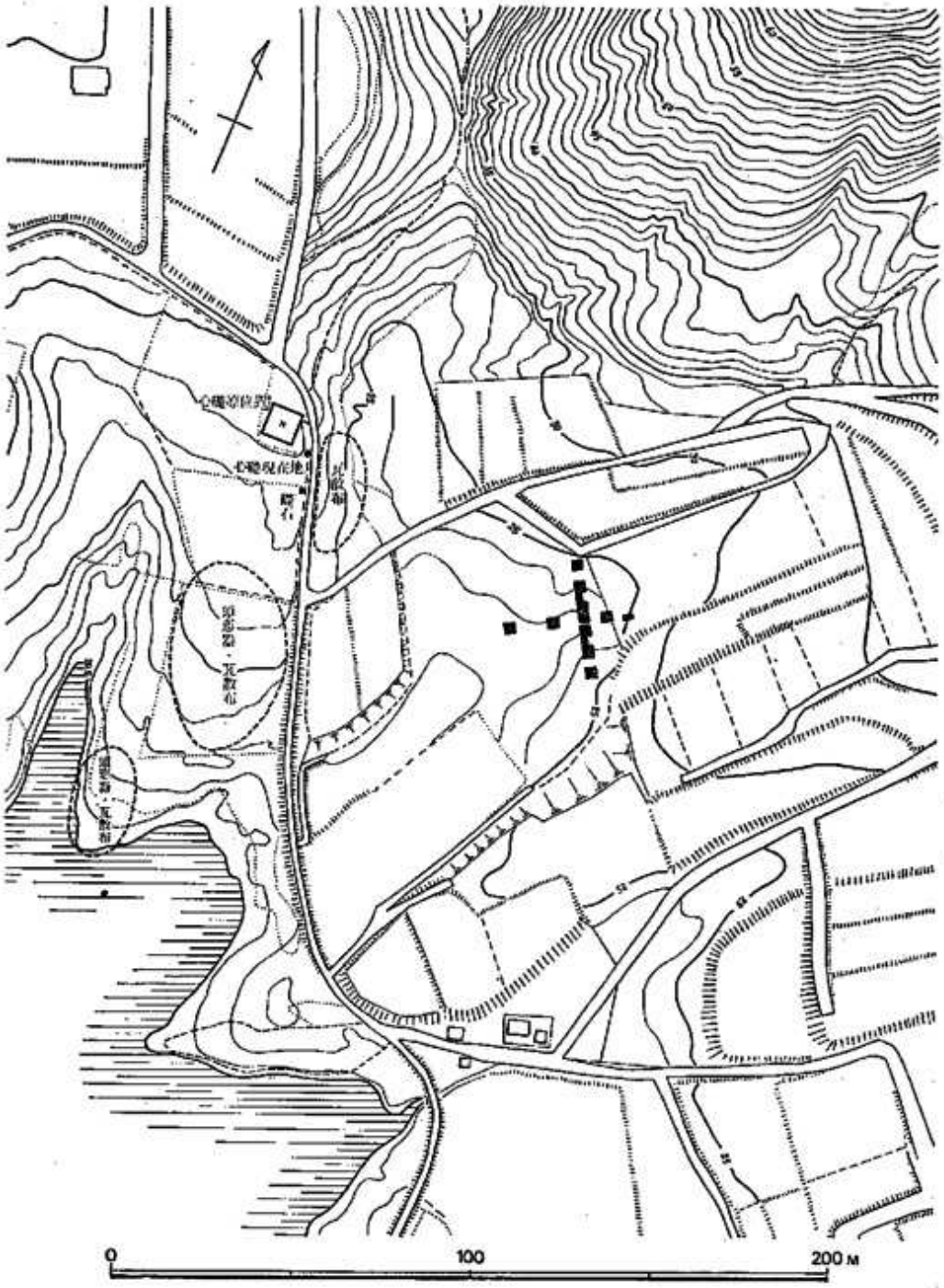
11月3日　トレンチ南端では開墾による整地土が厚くかぶり，この下に旧地表の黒褐色土がある。この黒褐色土に多くの瓦を含んでおり，この下層は灰色粘土層になっている。

11月4日　道路にそったトレンチに直交するトレンチを設定し掘り始める。遺構はまったく検出できない。

11月5日　灰黒色粘土に含まれている多量の遺物は2次的に堆積したもので，この下は岩盤となっている。午後より平面実測，トレンチ断面実測を行ない，本日をもって調査終了とする。　（柳田康雄）

2. 駕輿丁廃寺とは

今回，発掘調査した地点は，粕屋郡粕屋町仲原991—70番地，991—72番地，991—77番地である。調査地点から100m西には，数年前までは，塔心礎がほぼ原位置に所在していた。そして心礎を中心として，半径100mほどの範囲に，古瓦や須恵器片の散布が見られた。福岡在住の考古学の仲間では，駕輿丁池の池畔であるため，主として駕輿丁廃寺と呼んできている。また人によっては，すぐ北側が大字長者原であるので，長者原廃寺ともよんでいる。しかし上記塔跡は勿論，遺物が発見される地域の大半が，字駕輿丁のうちであるので，駕輿丁廃寺と呼ぶのが，適当と思われる。今回の調査地点もまた字駕輿丁のうちである。



第39図　駕輿丁道跡地形実測図

さて，この寺跡は，終戦前から一部の人には注意されていたが，特に戦後知られるようになったのは，戦後の開墾および道路の整備によって，大量の古瓦類が出土したからである。そのころの状態は，この報文を書くにあたって，ご恵送いただいた森貞次郎先生の次のメモがたいへん参考になる。

『鴛鴦丁廃寺

藤仙次郎氏（当時57才，仲原村鴛鴦丁居住）からの聞書（昭和29年1月2日）「昭和21年開墾地に指定されたので，松林を伐採し，小高い地点は小松が残っていたが，昭和22～23年に開墾のとき，仲原村甲仲原（こうなかばる）の某氏が，ここに神榊苅りに来て，藤氏に，この付近は<うばがたらい>という地名だから，<うばがたらい>がある筈だと教えてくれたので，そのつもりで気をつけていたら，あのような大石の中にたらいのような穴のあいたものがでてきたので，これが<うばがたらい>だなと思ったが，そのままにしておいた。」と。

29年当時，安松毅氏が畑に仕立てる予定で，荒おこしだけすんでいた。心礎は縦横約9m，高さ約1mの方形の土壇の中央にあり，若干の布目瓦や須恵器の細片をみることができた。安松氏に，土壇の上の耕地化を後廻しにしてもらうことを依頼し，県の開拓課長が小田部（こたべ）氏だということを聞き，数日後，現状を県教委に報告し，調査保存が必要であることを進言した。

鴛鴦丁池は渇水期に池底から黒曜石の石器類が発見されることで知られており，中原志外顕，高山英彦氏らが，これを採集されている。北側池畔に近く，瓦が発見されたのもこのような事情からで，高山英彦氏の採集した軒平瓦片数点を私は保管している。心礎は，藤氏によれば，23年頃より時々人が見に来たと言う，中原氏などは最も早くこれを見た人であろう。私が最初にみたのはずっとおくれて25年ぐらいだったと思う。29年1月2日は3回目ぐらいの現地探訪だったが，藤氏，安松氏宅は，鴛鴦丁池のとっつき近くの，道路東側の高みにあり，正月で皆在宅していたので幸に聞き込みをしたのであった。』

昭和29年1月，小田富士雄君とともに筆者も現地を探査したが，上記メモのとおりの現状であった。このとき，塔跡から南に300mはなれた低台地上で，焼け損じの布目瓦片がかなり発見された。ここはすでに開墾のため削平されていて，地表観察では瓦窯としての遺構は全然確認できなかった。しかし塔跡発見のものと同一の瓦当文もあり，この廃寺の瓦窯跡と考えられた。同年7月，石田茂作先生を現地に案内したりした。

ところが，昭和36～37年頃から，またたく間に付近一帯に宅地造成が行なわれ，塔跡のすぐ北側の道路までせまってきた。さいわい，道路以南は，ほぼ旧状をたもっていたが，これもまた，昭和42年2月になって，さらに開拓のため，ブルドーザーが入り，土壇は消滅し，心礎は

旧土壇のすべ東側の道路脇に移されてしまった。なお，ほかに数個の礎石と思われるものが，現在道路わきにあるが，同じ工事によるものであろう。

第40図　駕輿丁廃寺心礎

第41図　駕輿丁廃寺礎石

駕輿丁廃寺の遺構は，塔跡をのぞいては，まったく明確でない。駕輿丁池は江戸以前からの著名な大池であるが，この廃寺の創建のころは無かったものと思われる。南に，すなわち，現在駕輿丁池にむかって150mほど突出した幅約50mの平たい尾根の奥まったところに塔跡がある。塔跡の背後は20mほどいって，急に小高い山となっている。また塔跡から約40～90mほどはなれた前面の，平らなところにも，やはり古瓦，須恵器類が多数散布していて，寺院建築があった公算がある。さらにこの尾根の西側の谷をへだてた西の平たい尾根にも若干古瓦類等が見られた記憶がする。また塔跡背後の小山の裾部付近にも古瓦の包含層があ

った。そしてまた，尾根の東の谷間に今回の調査区があるわけである。地形から見て，左右対象のととのった伽藍配置をとるかどうかは，多分に疑問もある。相当ははげしい破壊だが，塔南の部分はなお旧状を残しており，広く発掘調査を行なえば，ある程度の見当はつくであろう。

なお心礎は，緑色片岩で，長さ約2m，幅約1mの細長く上面の平たい自然石である。中央部に心柱のための直径約60cm，深さ約15cmの円形の穴がほられている。　　（渡辺正気）

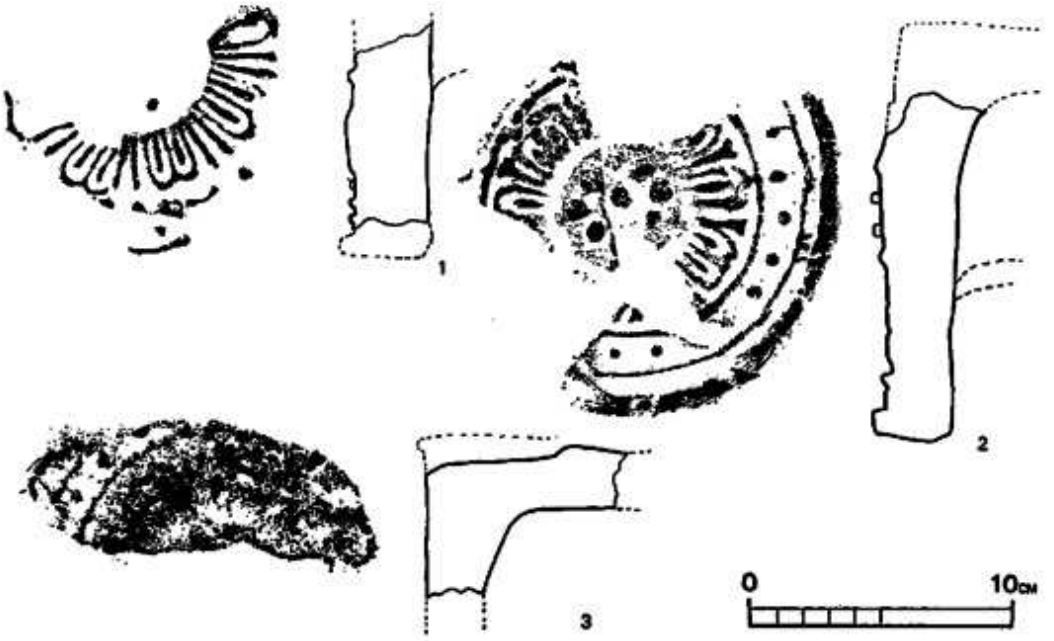
第 2　遺　　物

1. 瓦　　類

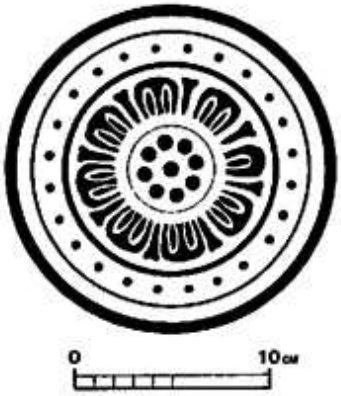
今回の出土瓦の大部分は有機質が沈殿した灰白色から灰黒色の粘土層から発見された。土層の状態からほとんど流れこみと見られる。出土した瓦は魚箱35はいほどである。この中には軒瓦もあるが大部分は丸瓦および平瓦である。

軒 丸 瓦（図42）

軒丸瓦は2種7個体である。



第42図　軒　丸　瓦　拓　影（縮尺1/4）



第 43 図　復　原　図（縮尺1/4）

1は複弁をかこむように界線を有する。復原径はほぼ17～18 cm。割り付けから推定すると複弁8葉である。2は複弁7葉，単弁1の畸形である。中房蓮子は1＋8の配列をなし周縁に24個の珠文をめぐらしている。復原図（図43）から推定すると径は17cm ほどとなる。瓦当は笵型が古くなったものを使用したらしく，木目のあとが瓦当面に残っている。3は瓦当の磨滅がひどく複弁の一部が理解できる。復原径は17～18 cm 内外で，割り付けから複弁八葉となる。すべてが鴻臚館系の軒丸瓦である。

軒 平 瓦（図44）

軒平瓦は2種12個体である。その内分けは老司系の瓦1～4と鴻臚館系5～11の瓦とにわかれる。

1～4の文様は上帯が珠文で，下帯は線鋸歯文からなりたっている。主文は扇行唐草文様である。3・4は型抜きおりの失敗とみられ，型がずれている。

5～11は主文に均正唐草文様を入れ，周縁部上帯に奈良興福寺，鴻臚館でみられる杏仁様の珠文で，下帯に陽起鋸歯文を配置している。瓦当の断面では，周縁が中心帯より突出している。

しかし，本遺跡ではまとまった資料は少いが5・6によって鴻臚館系と見られるが1式（註1）などと異なる点は，唐草の主文のみになり，副葉は消滅している。

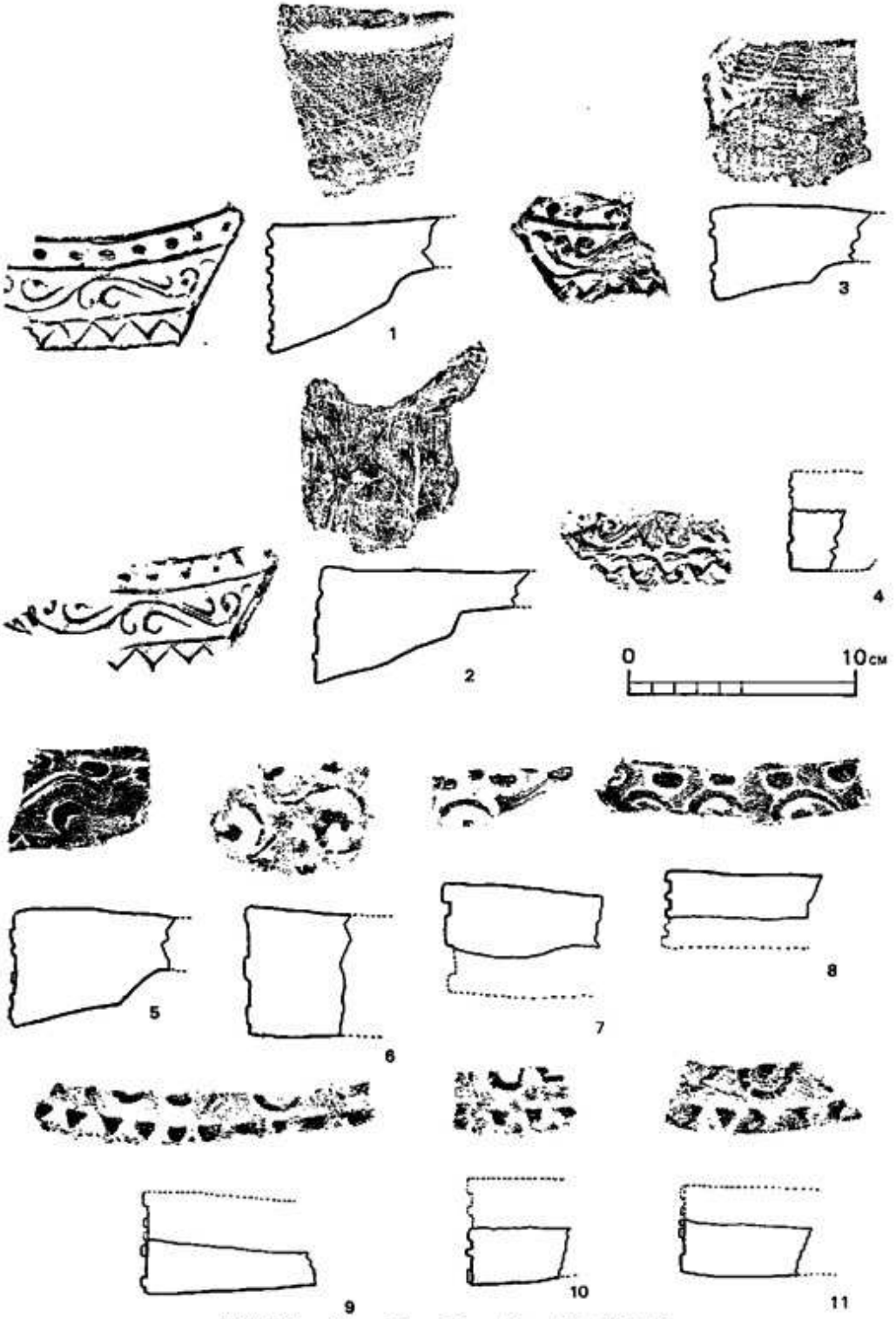
丸　瓦

丸瓦は全体の40%を占める。玉縁の部分は20個体ほどあるので，おそらく全部が玉縁のつく形式のものと思われる。図45のように粘土ひもの巻上げを残しているものがある。またのように玉縁の上面に箆記号がある。

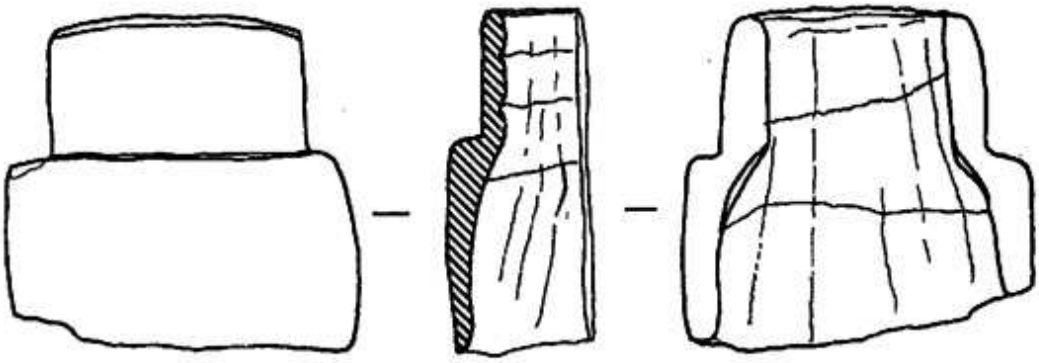
平　瓦（図47，48，49）

平瓦は3種類に分類できる。文様は　1. 縄目文と　2. 格子目文および　3. 後世の布目瓦である。

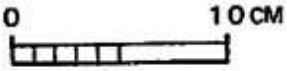
1.　縄目文（図47—1 図48. 49）は格子目文の2点をのぞき約70%を占める。5 cm幅で10～18本ほどである。



第44図　軒　平　瓦　拓　影（縮尺1/3）



第45図　丸瓦にみられる粘土ひも実測図（縮尺1/4）



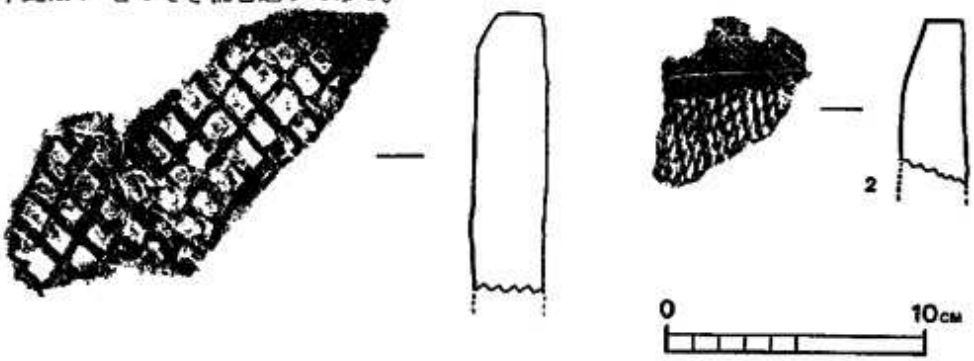
第46図　玉縁にみられるヘラ書拓影（縮尺1/4）

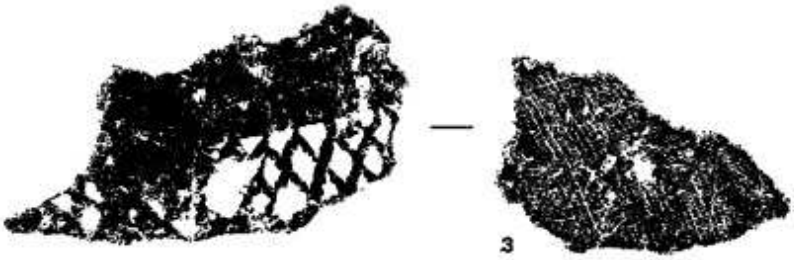
2.　格子目文（図47−1.3）は2点だけで，両方とも斜格子目文で1.5cm×1.5cmから1.4cm×1.6cmのほぼ正方形に近いものである。

両種とも色調は黄褐色で胎土に小砂が少量まじり焼成は硬い。側面を篦にて整形している。

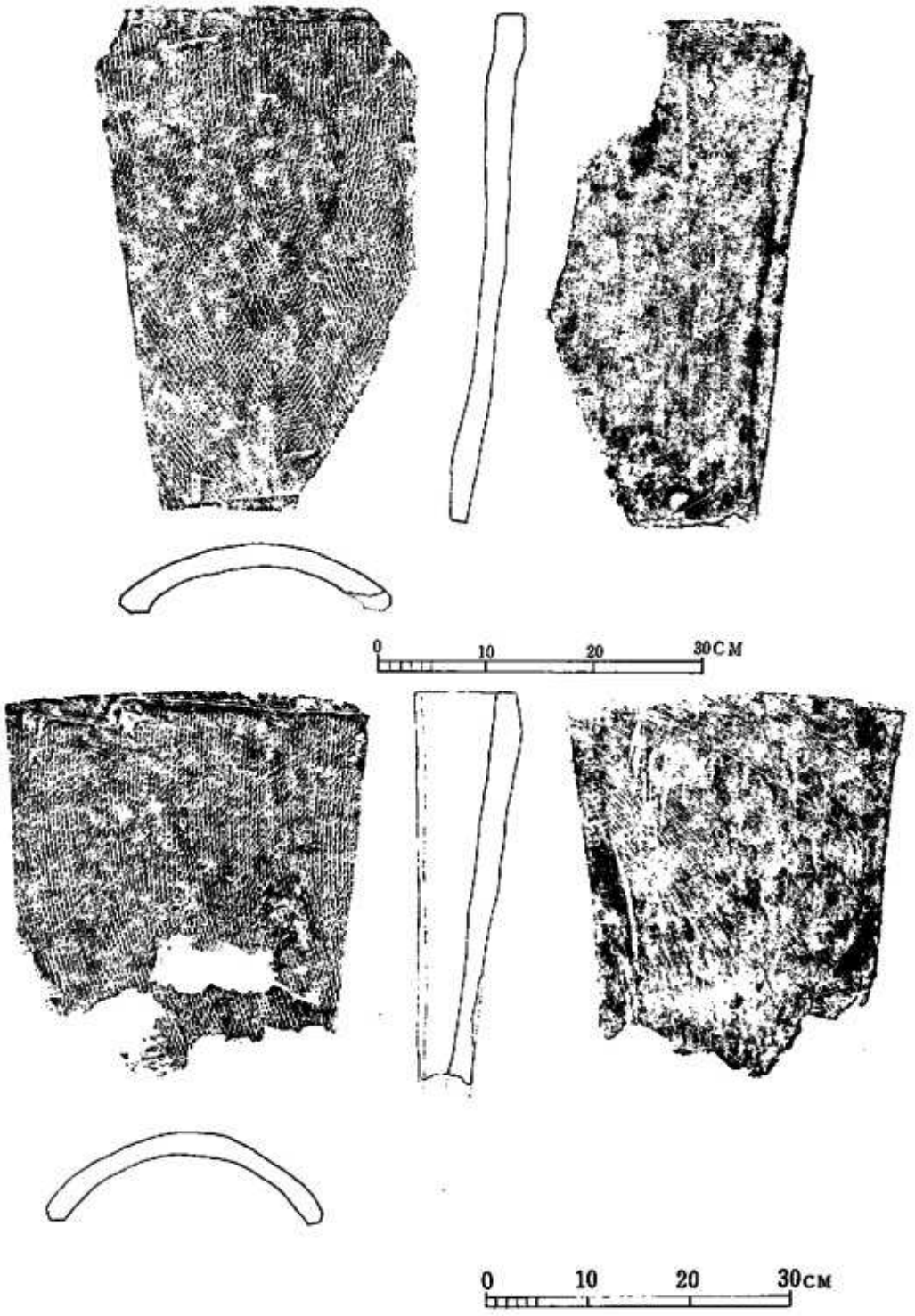
3.　表土中あるいは灰白色粘土層の上面から出土した後世の布目瓦である。色調は黒色で焼成は硬く良好である。

平瓦は3.をのぞき桶巻造りである。





第47図　敲打文拓影図（縮尺1/4）



第 48・49 図　平　瓦　拓　影　図　(縮尺約1/7)

小　結

木遺跡から出土した軒丸瓦および軒平瓦のセットは，軒丸瓦が鴻臚館系の瓦で，軒平瓦は鴻臚館系系と老司系の瓦である。

軒丸瓦で複弁7葉＋単弁1畸形の類例は高祖山の怡土城からと筑前国分寺からも出土している（註2）。この瓦は筑前国分寺および怡土城の瓦と同笵の瓦であろう。

軒平瓦（図44—1.2）は城ノ原廃寺出土のものと類似している（註3）。

瓦のセットと畸形瓦を踏まえた上で，年代を考察すると，ほぼ国分寺や怡土城の創建あるいは築城とほぼ同時期で，奈良時代中葉から後葉にかけてではないだろうか，瓦だけでいえば奈良時代後期にあたる。　（副島邦弘）

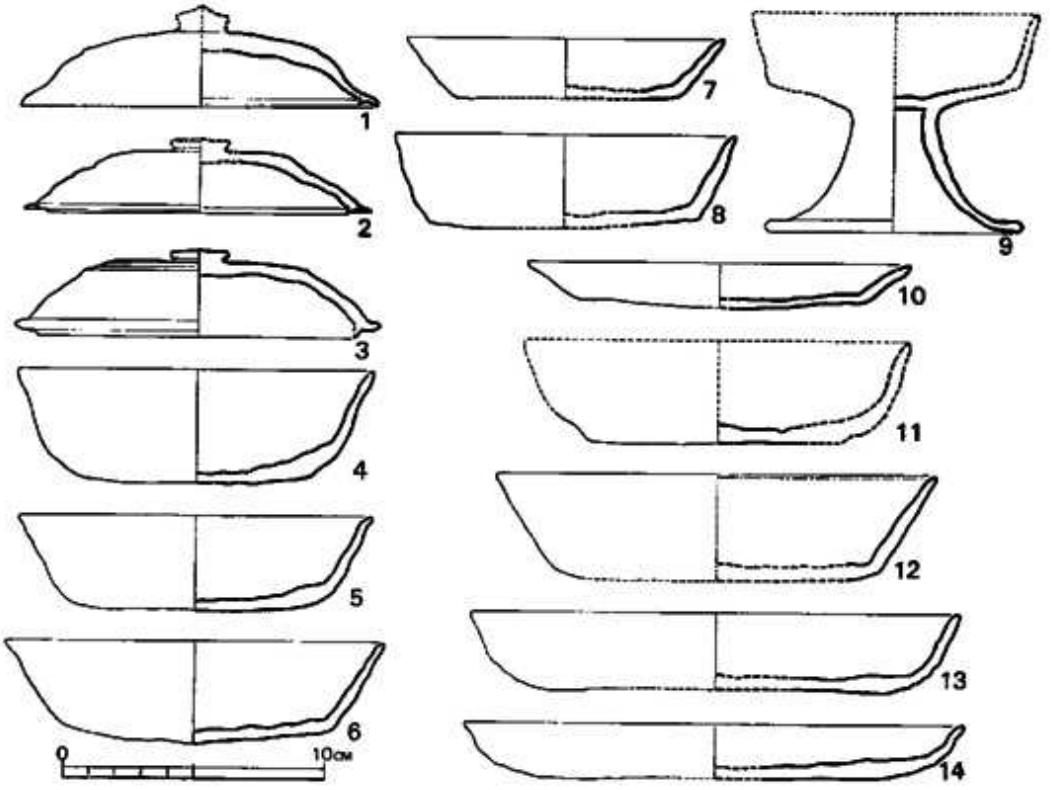
註　1　小田富士雄，「九州における太宰府系古瓦の展開(1)」九州考古学1.1957. 鴻臚館系瓦を8形式に分類しており，その祖型を1式とした。『均正唐草文様を入れる。心飾は上に開く相対曲線で，郭内に小葉を「小」字形を配する。心飾の左右には先端の巻いた蔓草を各四個連ね，各蔓草の尾部に二個の副葉を添える』という。本遺跡の軒平瓦を6式として，遺跡をもって平安期まで下げている。本遺跡自体が直接でてくる文献はなく，太宰管内誌と筑前風土記の中にそれらしきものがみえるだけで，遺跡から平安時代まで下げるのは疑問である。

2　中山平次郎「畸形的小葉を有せる鴟瓦蓮華紋」考古学雑誌6—3・1915. この中で畸形瓦の類例を上げ，その一例として高祖山怡土城の瓦を上げている。また「古瓦類雑考(9)」考古学7—4.1916. 中で筑前国分寺の畸形瓦と高祖山怡土城の畸形瓦と同一笵型であるとした。本遺跡の畸形瓦と両遺跡の畸形瓦の割り付けは，ほぼ一致する。しかしながら復原径が若干相違する。これを焼縮と考えるか，新しい笵を作ったものか。今後の研究にまちたい。しかし，木目が残っていることが注意される。

3　佐田茂「有田遺跡—福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告—」福岡市教育委員会，P47. 城ノ原廃寺，1968.

2. 須　恵　器

須恵器には，杯・杯蓋・高杯・壺・長頸壺などがある。大部分が破砕されて小片となっているが，約130個体を数える。なかでも，杯・杯蓋が大多数をしめ，復原可能なものは約70個体である。高杯は1個体であるが，壺・長頸壺は復原不可能な破片で，しかもきわめて少ない。

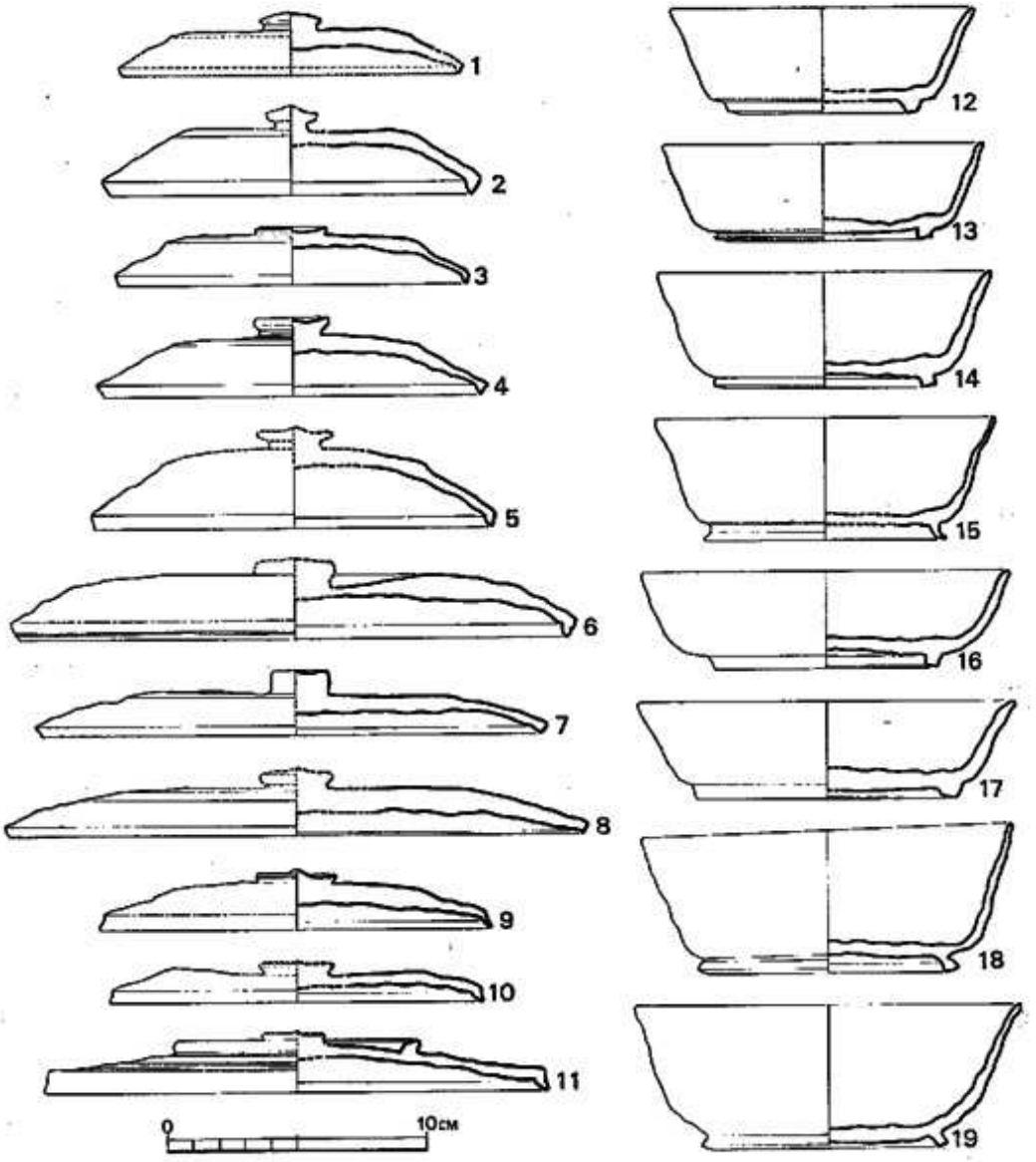


第50図　須　恵　器　実　測　図（縮尺1/4）

杯には，大別して，高台のないもの（I形式）とあるもの（II形式）とがある。高台のないI形式（第50図4～8，10～14）のうち，器形のもっとも小さいもの（7）は，口径12，2cm，高さ2.3cmである。最大のもの（14）は，口径19.1cm，高さ2.1cmを測る。口径が15cm前後のものがもっとも多いが，大きさによる整然とした類別は，わずかな資料をもとにしては困難である。器形は，屈曲を示しながら，ゆるやかに底部へ移行するもので深味のもの（4・5・11）と浅味のもの（13・14）のほかに，比較的まっすぐに斜降して，急に底部へ移るもの（6～8・12）に大別できる。胎土には，概して細砂を多く含むが，精良な粘土を使ったもの（11・14）や，少しではあるが大粒の砂を混じえるもの（3～5・12・13）がある。色調は，焼成がよくて

灰青色をするものと，焼成が不良のため軟質で灰白色をして，土師器のような外観をなすものがある。器面は内外ともに，横なでによって調整を行なっている。いっぽう，高台のあるⅡ形式（第51図12～19）は，器形の大きさが，いずれも接近している。もっとも小さいもの（12）は，口径11.6cm，高さ4.1cmである。最大のもの（19）は，口径14.8cm，高さ5.6cmである。器形は，ゆるやかなカーブをえがいて曲線的に底部へ移るもの（16・19）と多少凸凹した器面であるとはいえ，まっすぐな体部が比較的急に底部へ移行するものとの2種に大別できる。胎土には，細砂を含むものが多い。少量ではあるが，大粒の砂が目だつもの（16）もある。焼成は，不良でやや軟質のもの（12・17）若干のほかは，良好である。前者にあっては，灰褐色のものもあるが，後者のものは灰青色をする。器面は，内外ともに顕著な横なでによって調整している。

杯蓋の場合は，杯を高台の有無によって2種に分類したことに対応して，口縁端部に返りのあるⅠ形式（第50図1～3）と返りのないⅡ形式（第51図1～11）に大別できる。Ⅰ形式は6個体以上ある。口縁端部の返りは小さく，貼りつけ，ないし，体部から引きだしによってできている。杯蓋の頂部につくツマミは宝珠形であるが，立ちあがりが弱く，低いものである。杯蓋の大きさは，ほとんど同じであるが，完全に復原が可能なもの（3）では，口径が12.1cm，高さが3.4cmを測る。胎土には，細砂が少ないもの（1），細砂が多いもの（2）そして大粒の砂を混じえるもの（3）などがある。1は軟質で灰黄色をするが，2・3は焼成良好で，灰青色をする。1・2の器面は，内外ともに横なでによって調整している。3のみは，頂部に3回以上のヘラ削りを行なって仕あげている。なお，1には，内面のところどころに墨が付着する。他方，Ⅱ形式の杯蓋は圧倒的に多く，復原可能なものだけでも11個体以上を数える（第51図1～11）。Ⅱ形式の杯蓋は，口縁端部が引きだされて，下に屈折するものである。端部が断面三角形状に下にさがるもの（1～6），端部にごくわずかな突起として表現できるもの（7・8）そして端部が折れさがって外に若干広がるような形をしめすものの3種類がある。ツマミは宝珠形であるが，全体に低い感じを受ける。ただ，1の場合は上面が円弧をなす曲面をすること，7では，円柱状に近いものなどは珍しい。大きさは口径が15cm前後のものと，20cm前後のものの2種に大別できる。最小のもの（3）では，口径が13.5cm，高さが2.3cmである。もっとも大きなもの（8）は，口径22.2cmに復原される。胎土には細砂をかなり含むものが多い。2・4・6・7のように，少量ではあるが大粒の砂を認めるものもある。11のみはきわめて精良な粘土を使っている。この杯蓋は頂部に外周と平行する高台のような突帯が一周する。破片の端において，ツマミの付着を想定させる立ちあがりの痕跡を認める。焼成が不良で灰白色を呈するもの（4・5・8・9）のほかは，すべて焼成が良好で灰青色をする。いずれも内面は横なでによって調整しているが，外面は5を除くと，ほとんど頂部にヘラ削りを行なって仕あげている。7の内面には「大宅」の墨書をもつ（第52図2）。2の内面の一部には

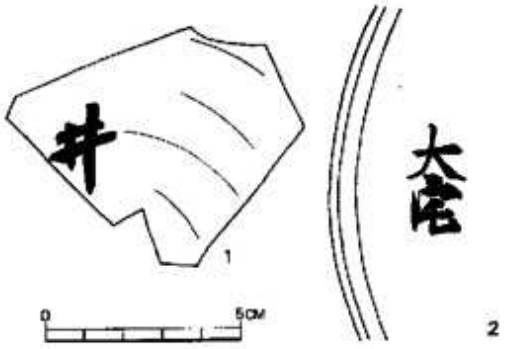


第51図　須恵器実測図（縮尺1/4）

墨の付着がある。このほか，同じ杯蓋であるが，外面に「井」字の墨書をもつ土器（第52図1）がある。この場合，「井」字の下はすぐツマミになるので，そこに墨書はなかったことが考えられる。したがって，「井」1字以上の語句を考える場合，「井」字の上に想定されよう。

高杯（第50図9）は破片1個をえたのみである。底部の一部に，ゆるやかに大きくカーブをえがいて脚部が広がる。脚径10cmである。堅く焼きしまって青色をする。細砂を多く含んでいる。

以上の須恵器は，奈良県の藤原宮跡や平城宮跡出土品のなかに類例をみだすので，7世紀後半から8世紀にわたって使用されたものと考えられよう。　（西谷　正）



第52図　墨書土器実測図（縮尺1/4）

3．土　師　器

器種を分類すると蓋Ⅰ・蓋Ⅱ・皿・椀・杯Ⅰ・杯Ⅱ・杯Ⅲ・杯Ⅳ・甕がある。杯を4種に分類したのはおもに外面の手法によったものである。

蓋Ⅰ　（1・2・4）

蓋Ⅱと違って外面は全面へら摩きの調整がなされている。大きさにはかなりの差があるが，ツマミや内面のかえり，横なで調整は同じである。胎土には明褐色の精良なもの（1・2）と，褐色を呈する粗いもの（4）がある。

蓋Ⅱ　（3・5）

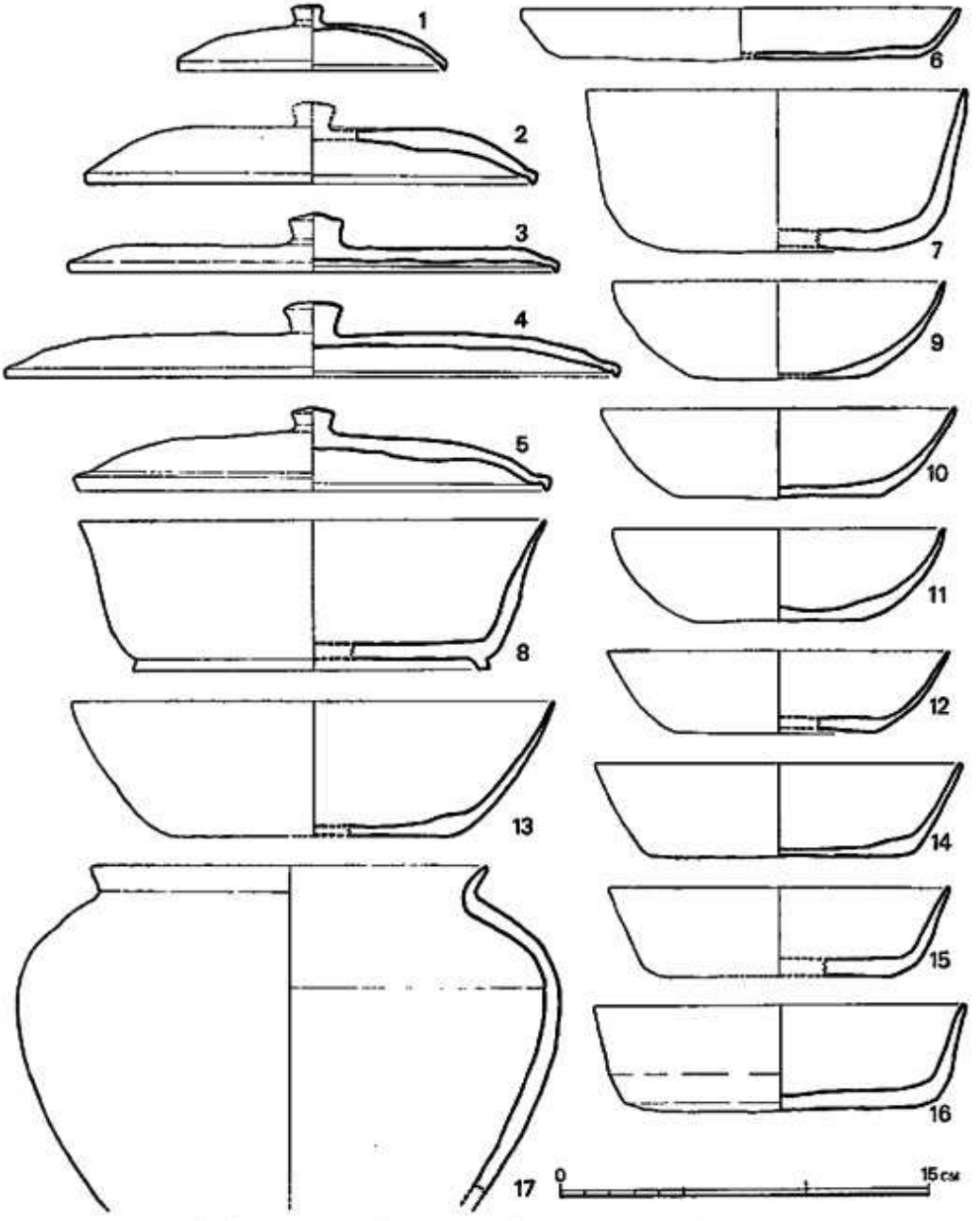
外面が口縁端までへらで削られているものである。胎土は褐色で粗いのでへら削りのため胎土中の砂が移動している。このことからかなり遠く右廻りに回転させてへら削りしたことがわかる。3は割合扁平で外面にはへら削りのなかに粘土巻の痕跡がある。5は内側口縁端に明確な段を有し他と違ったところがあり，さらに内面中心付近はへらによる横なでが行なわれ，口縁側は横なで調整である。

皿　（6）

口径18cmのもので，底部には右廻りのへら削りの痕跡があり，側面は横なで調整である。内面はへらによる横なでが行なわれている

椀　（7）

口径15.5cm，高さ6.5cmのもので明褐色の精良な胎土で，内外とも丁重な横なで調整が行なわれている。



第53図　土　師　器　実　測　図　（縮尺1/4）

杯Ⅰ　(8)

高台付の口径19cm，高さ6.2cmのもので，底部内外面はへらによる横なで，胴部内外面は横なで調整が行なわれているものである。

杯Ⅱ　(9～13)

大小2種あるが，手法は外面の底部と胴部下半にへら削りがなされ，内面と外面上半は横なで調整である。器形はべで平底で内弯ぎみの胴部からなっている。出土品中もっとも多い器形である。

杯Ⅲ　(14)

杯Ⅱに比較して底面径が大きく真すぐのびた胴部で，底部に粘土巻の痕跡がある。外面胴部内と面は横なで調整が行なわれている。

杯Ⅳ　(15・16)

杯Ⅲと器形は似たとここがあるが，これは胎土が黒色および灰黒色を呈しており，瓦器質のものである。両方とも摩滅がひどく調整具合が不明であるが，16には底部に粘土巻上げの痕跡がある。

甕　(17)

これを土師器とするにはかなりの抵抗をようするほど，須恵器の手法に低いもので，外面下半はかなり速い回転によるへら削が行なわれている。外面上半および内面内面は横なで調整が行なわれているが，須恵器のようなろくろ状の回転台を使用しないかぎりできないようなところがある。

以上の土師器で蓋・椀・杯Ⅰ・甕は器形および手法においてかなり須恵器に類似するところがある。しかし，これらが須恵器の焼成不良品ではなく土師器としての性格が強いものである。

(柳田康雄)

第3　おわりに

今回の発掘地点は駕輿丁廃寺の伽藍が考えられる地域から少し離れているので，駕輿丁廃寺とは別に駕輿丁遺跡とした。しかし，瓦が出土するところから駕輿丁廃寺と関連することはまちがいない。調査の結果，発掘地点は遺物こそ多量に発見されたが，2次的堆積のもので長期間の遺物が混在していた。この地域は20数年前に整地されるまで湿地であり，遺物が多量に発見された灰黒色粘土層はまだ臭気がただよっていた。したがって，発見された瓦・土器類は付近が開墾されたときに出土したものが湿地に投込まれて堆積したのであろう。現在は第39図のようにすっかり整地されていて付近の遺構は消滅しているので明らかでないが，駕輿丁廃寺と関連あれば，寺跡としては土器の出土量がかなり多い。調査地域を拡大すれば，まだ相当量の遺物が発見できると思うが駕輿丁廃寺がほとんど消滅してしまったことはおしまれる。(柳田康雄)

図

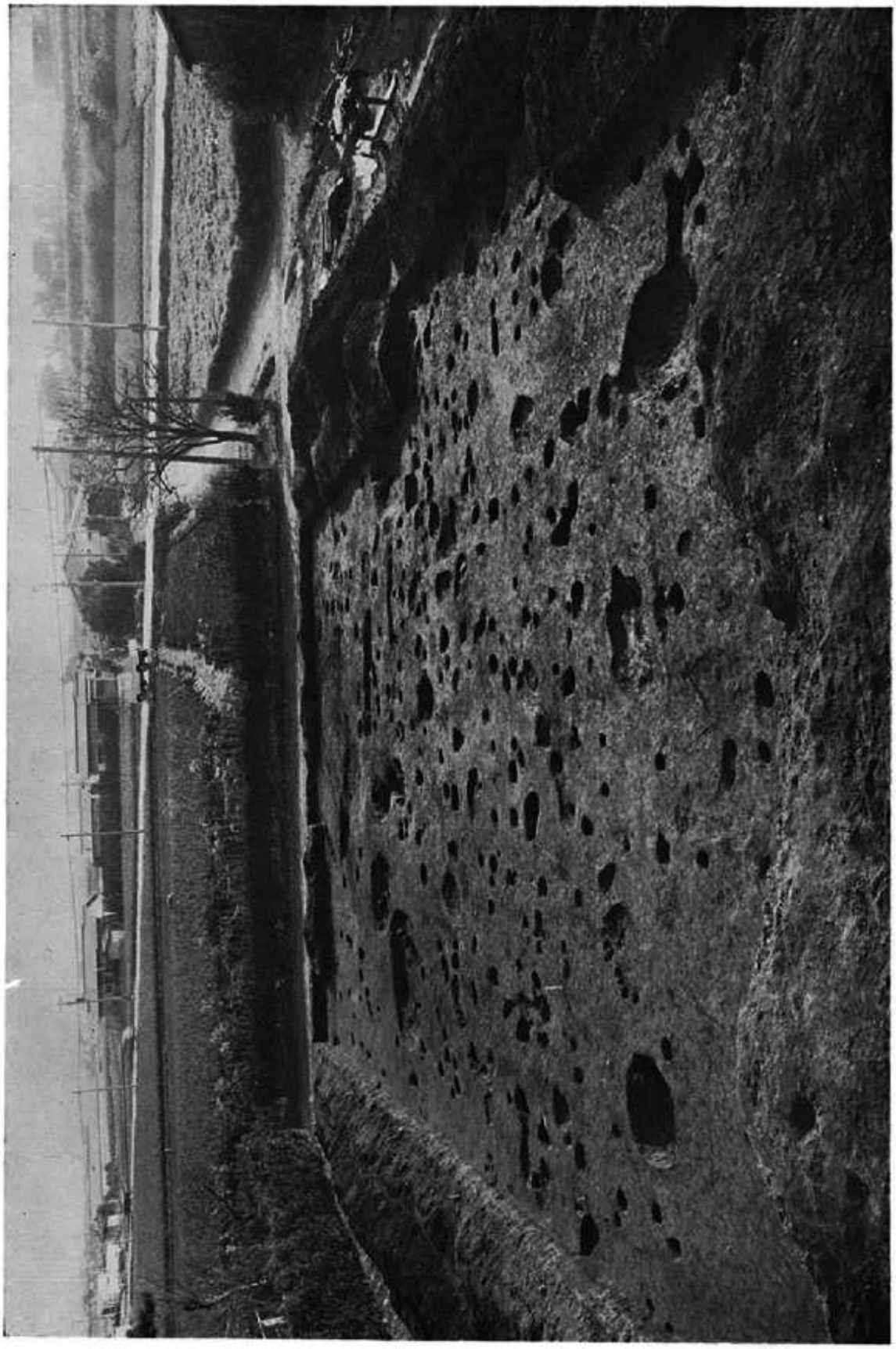
版

(1) 葺　石　(西より)

(2) 石棺蓋石 (西より)

(1) 石　棺　(東より)

(2) 石　棺　(西より)



拡張部全景（西より）

(1) Aトレンチ出土の瓦器類

(2) C — 8区　土　壙

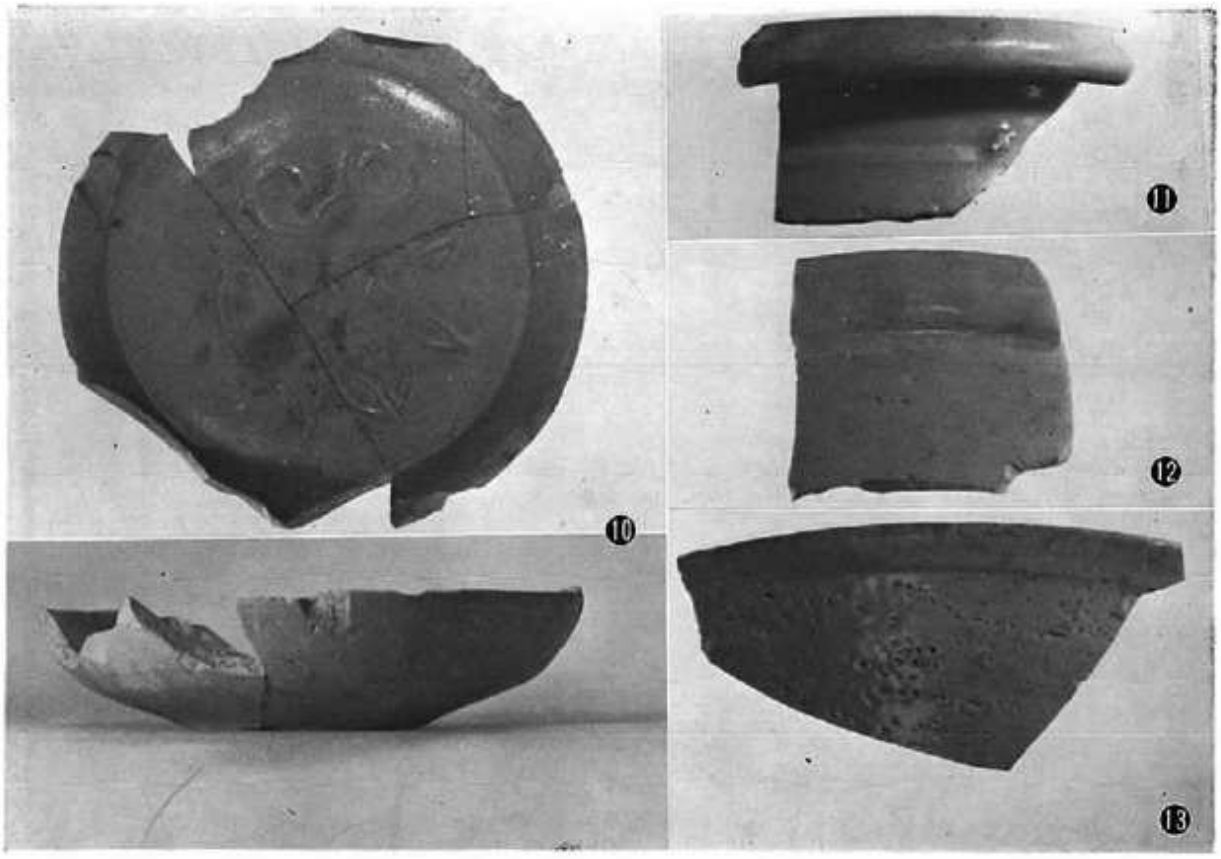
(3) F—16区ピット内出土須恵器

(4) G—5区小土壙 (南より)

（1） B—16区 （南より）

（2） D—8区—B （東より）

(1) 瓦 器 ・ か わ ら け



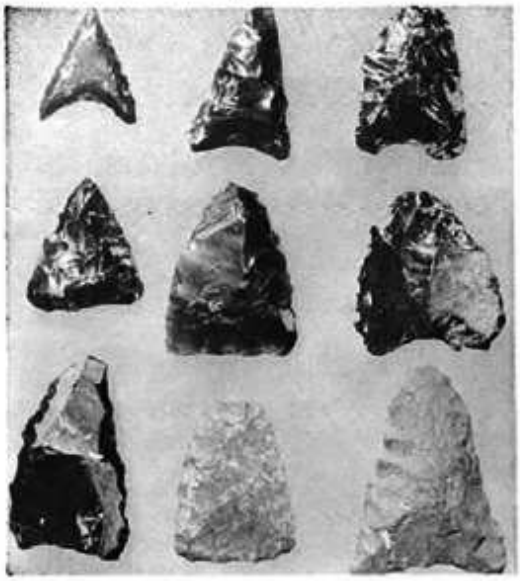
(2) 白　　磁

（1） 甲塚古墳より遺跡所在の台地を望む

（2） 第 1 区 第 2 号 竪 穴

（1） 第3区竪穴（縄文土器・石皿出土状況）

（2） 第2区第1号・第2号 竪 穴

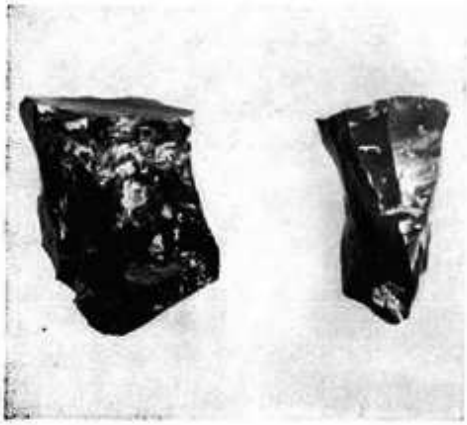


（1） 石鏃（内2個サヌカイト）

（2） 掻　　器

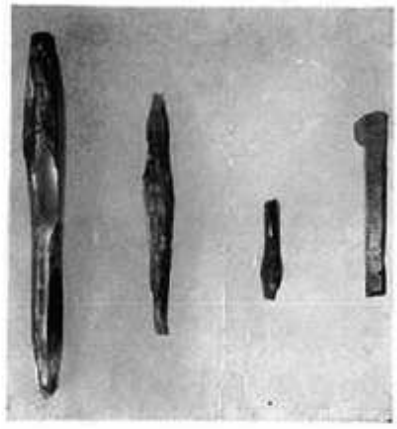
（3） 尖　頭　器

（4） 石　　刃



（5） 石　核

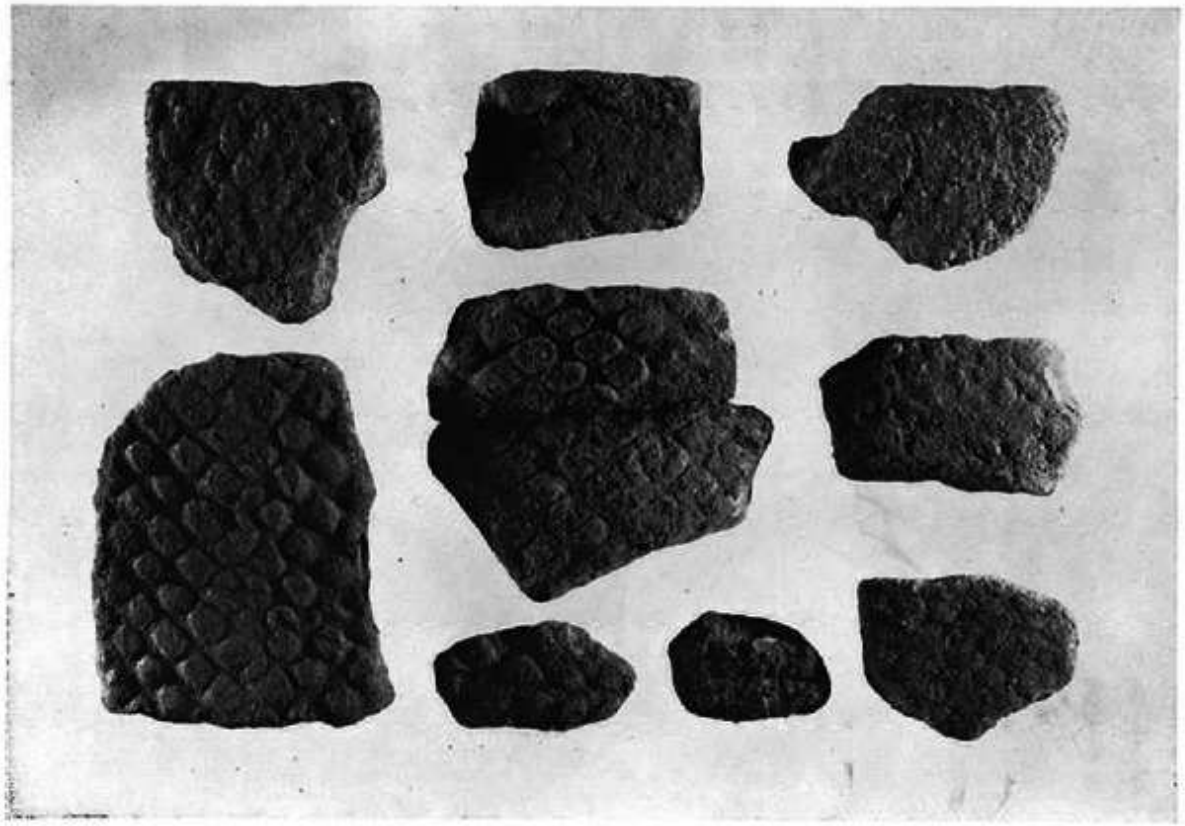
（6） 細 剝 片



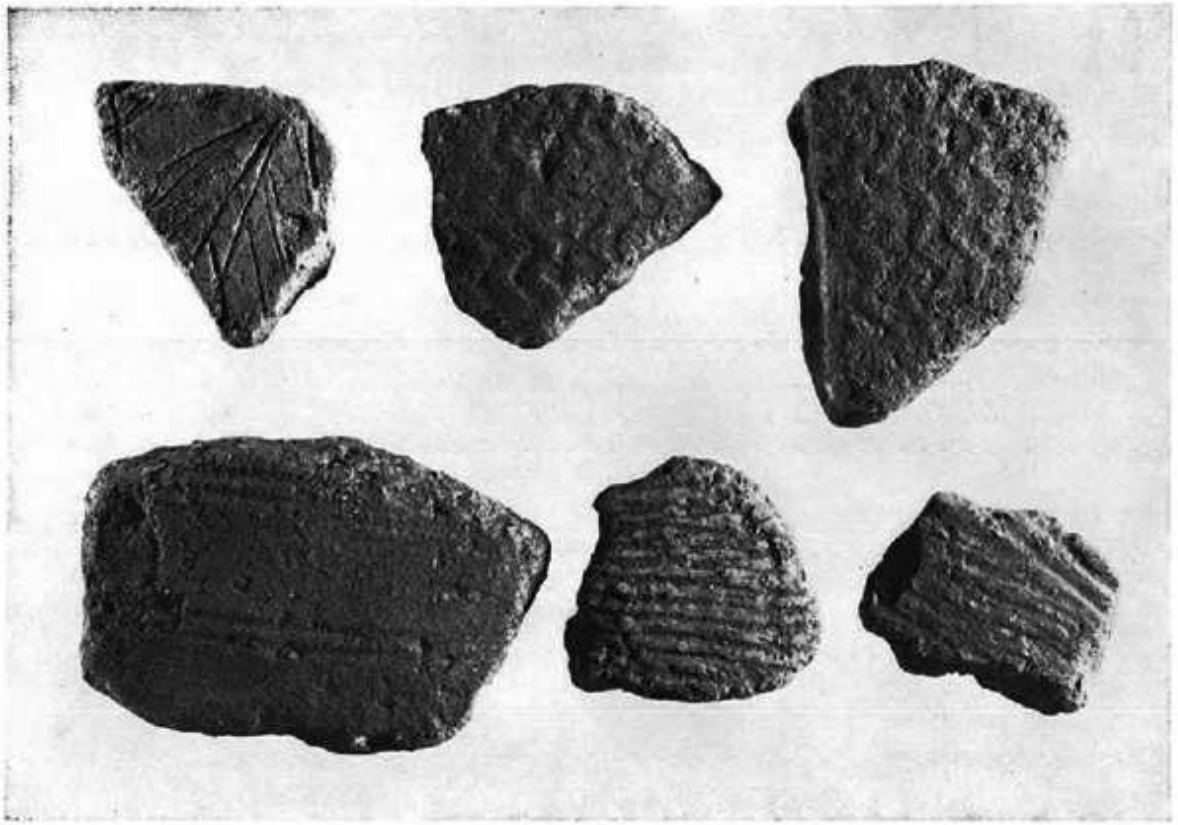
（7） 石錐・剝片

（1） 広川平原第2号住居跡（南西から）

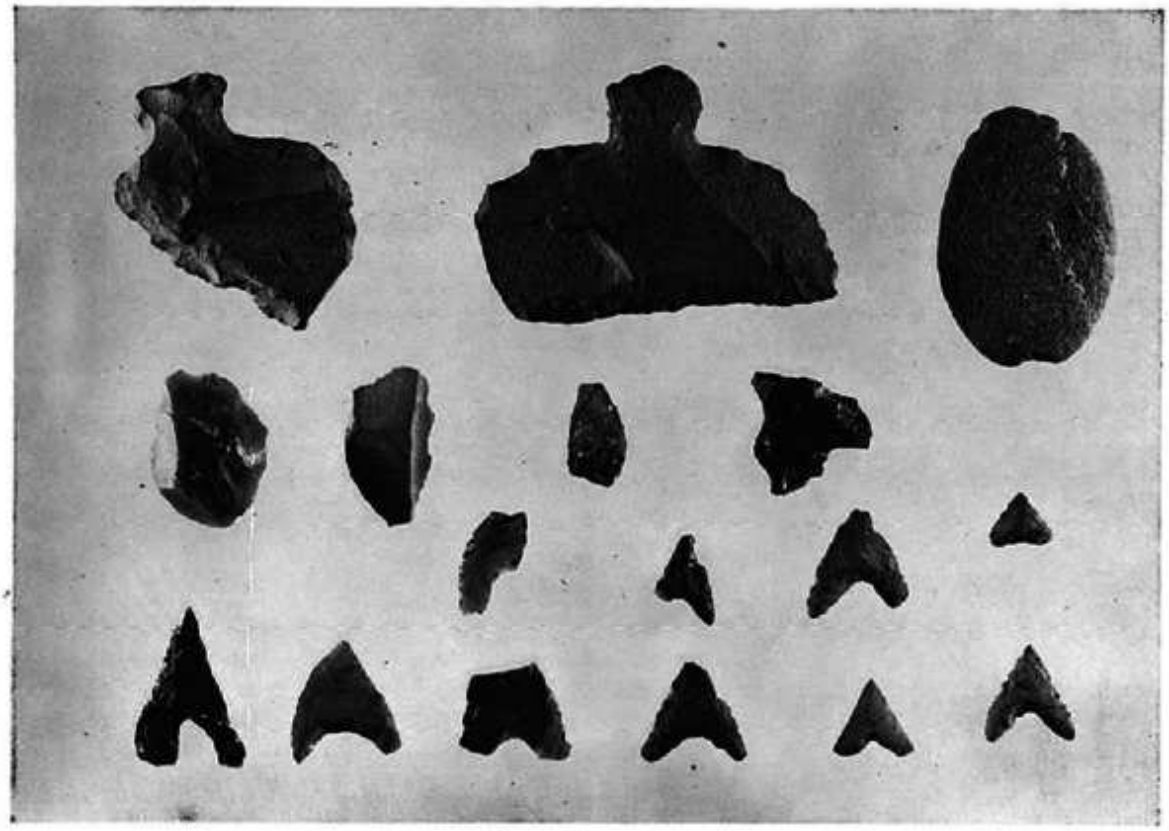
（2） 広川平原第4号住居跡（北から）



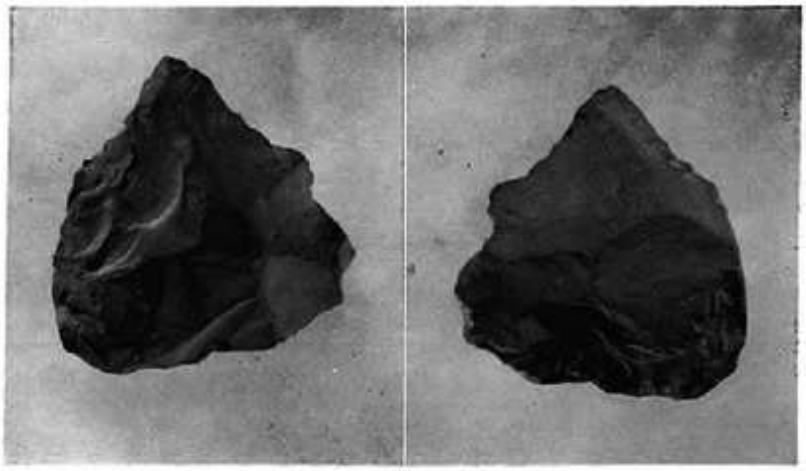
(1) 縄文土器

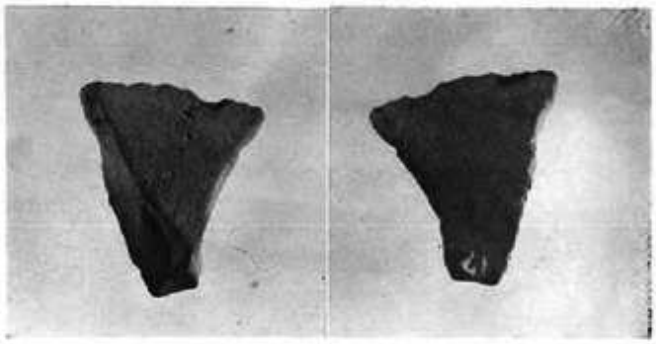


(2) 縄文土器

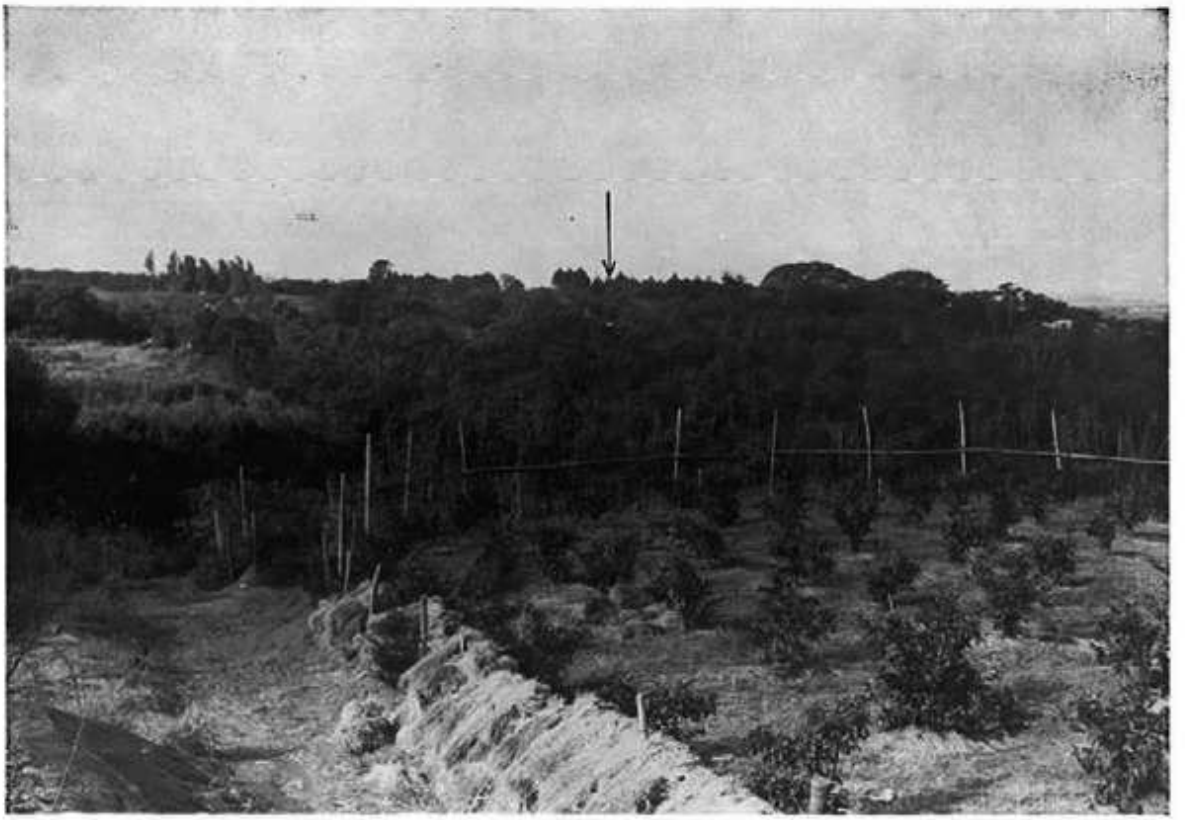


(1) 石　　器



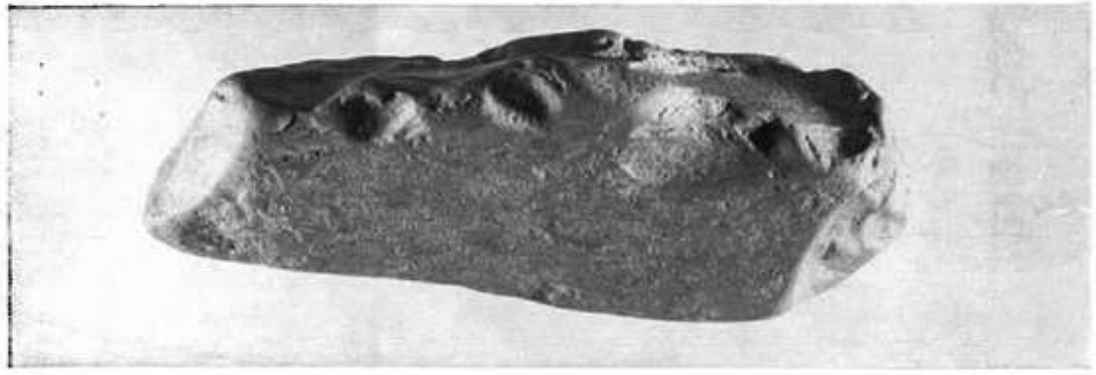


(2) 先　土　器　石　器



(1) 遺跡遠景(東対岸から)矢印遺跡

(2) 発掘全景(南より)

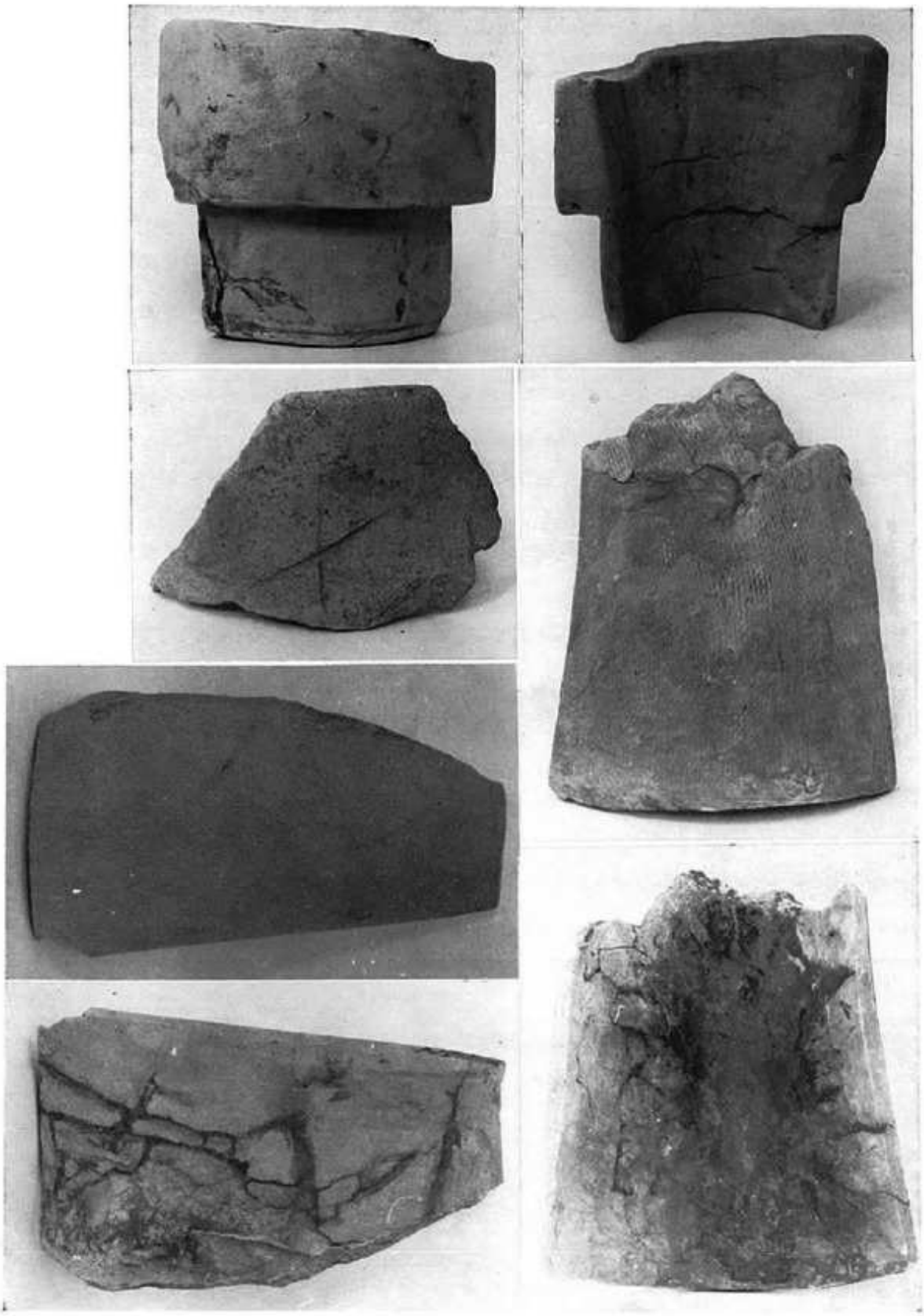


出　土　遺　物

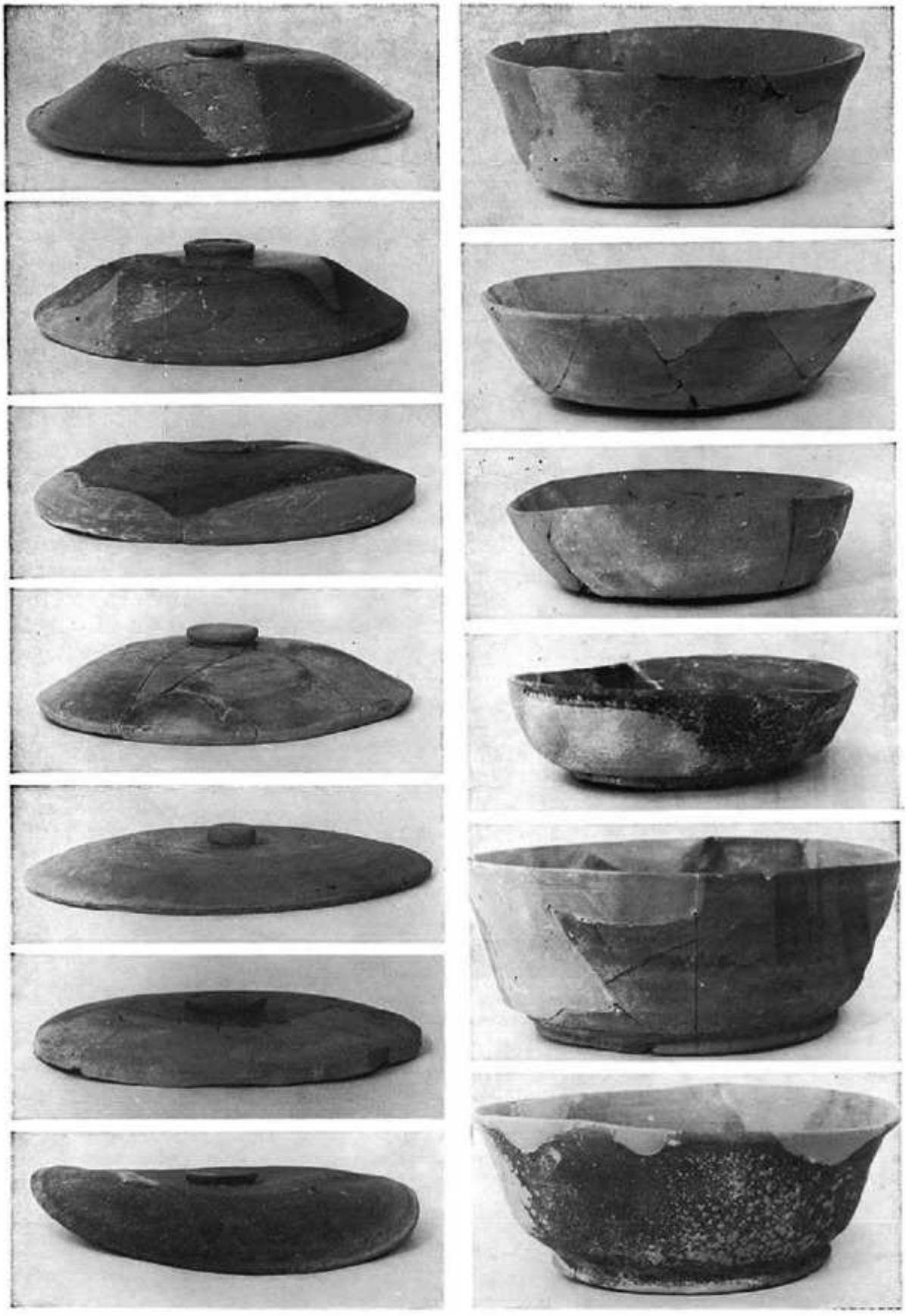
（1） 駕輿丁遺跡（左）と駕輿丁廃寺（右端）の遠景（北東から）

（2） 駕輿丁遺跡遠影（駕輿丁廃寺から）

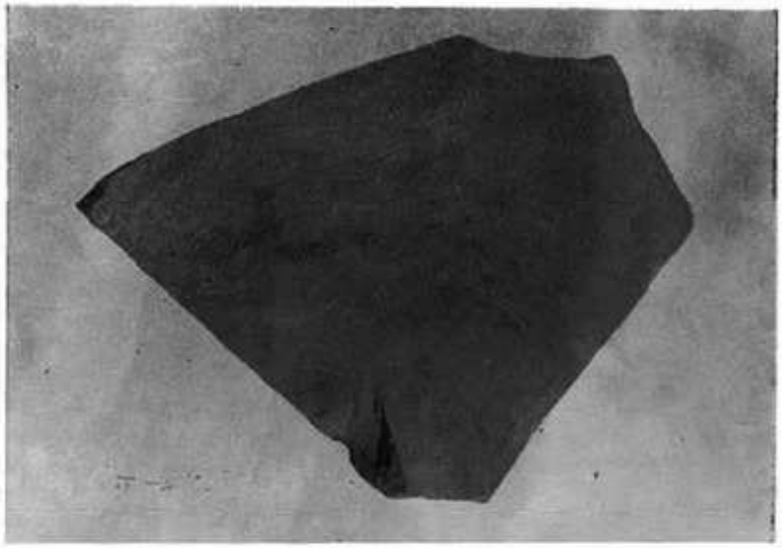
軒丸瓦・平瓦



軒丸瓦・軒平瓦



須　恵　器



墨書土器

1

2

3

4

5

8

13

17

6

7

9

10

11

12

14

15

16

土　師　器

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -I-

昭和45年3月31日

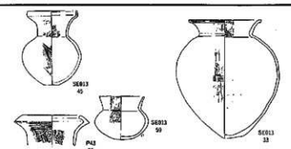
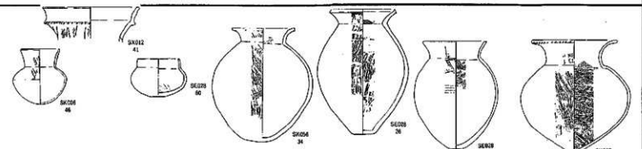
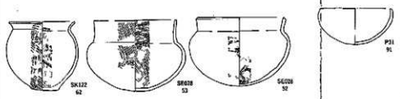
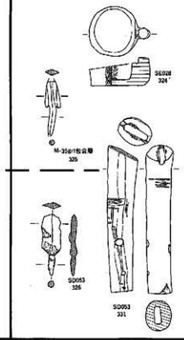
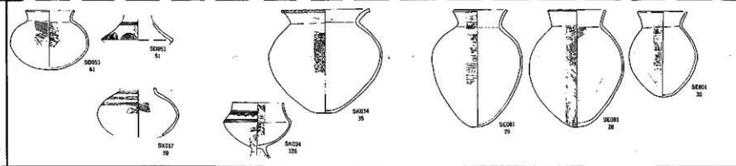
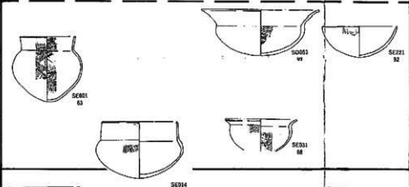
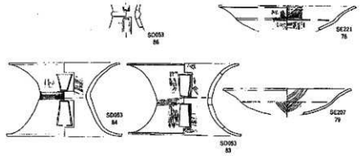
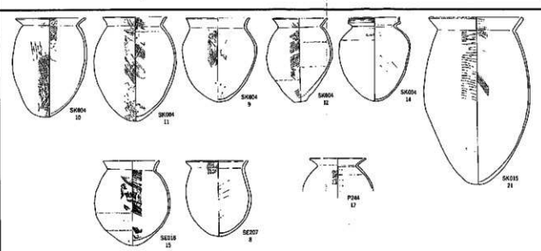
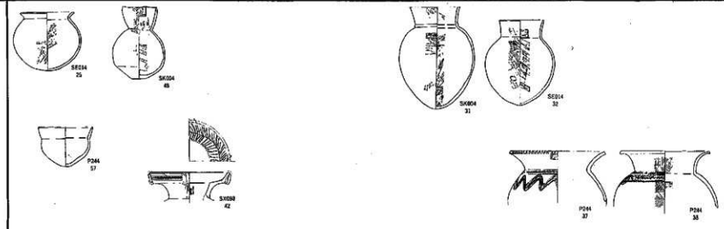
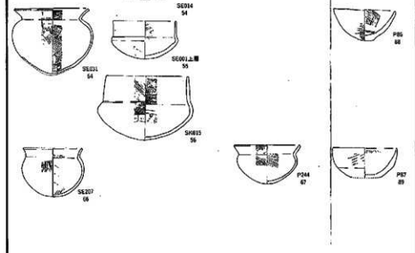
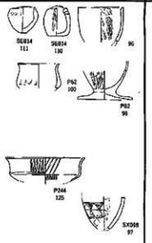
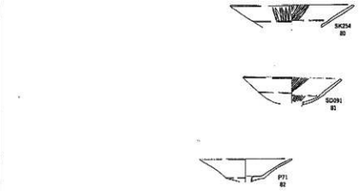
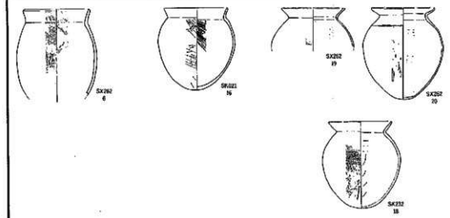
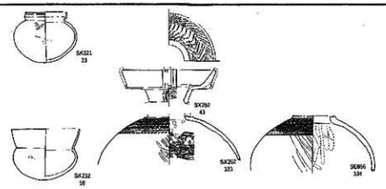
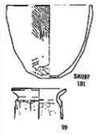
発行 福岡県教育委員会

福岡市西中洲6街区29号

印刷 栄光印刷株式会社

福岡市清水1丁目16番地の1

村中角遺跡出土遺物編年表(案)

	甕	壺	鉢	特種な土器	高杯・器台	木器・青銅器・骨角器
村中角Ⅰ式						
村中角Ⅱ式						
村中角Ⅲ式a						
村中角Ⅲ式b						
村中角Ⅳ式						
村中角Ⅴ式